

The Nagayama Maeda Site  
長山前田遺跡

The Ryouhazama Hiwatashi Site  
両迫間日渡遺跡 1

— 九州新幹線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 —

---

2012  
熊本県教育委員会

# 長山前田遺跡 両迫間日渡遺跡 1

— 九州新幹線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 —

2012

熊本県教育委員会

## 序文

本書は、九州新幹線建設工事に伴い埋蔵文化財発掘調査を実施した熊本県玉名郡南関町に所在する「長山前田遺跡」と玉名市両迫間に所在する「両迫間日渡遺跡」の発掘調査報告書です。

両遺跡とも熊本県北部に位置し、阿蘇外輪山に源を発する熊本県下の四大河川の一つである菊池川流域に所在する遺跡です。菊池川流域は、古代から熊本県の歴史を語るうえで欠かすことのできない多くの遺跡が知られています。なかでも全国に類を見ないほどの密度で装飾古墳が築かれており、九州中部域の古墳文化を語るうえで重要な地域として注目されています。また、古代には現在の山鹿市、菊池市にまたがり「鞠智城（国指定史跡）」が所在しています。

このたび、このような歴史的背景を有し文化を育んできた熊本県北部域に九州新幹線鹿児島ルートが建設され、平成 23 年 3 月 12 日熊本県民悲願の新幹線が開通しました。

県土の発展に伴い、記録保存として発掘調査が行われた本遺跡（本書）が、学術的資料としてはもとより、郷土の歴史に対する造詣を深めるとともに、県の教育・文化の向上に対する一助として活用していただけると幸いです。

最後に、埋蔵文化財発掘調査に御理解、御協力をいただきました玉名市の皆様を始め、事業主体である独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構に対し心より感謝申しあげます。

平成 24 年 3 月 23 日

熊本県教育長 山本隆生



# 長山前田遺跡

The Nagayama Maeda Site

調査場所 熊本県玉名郡南関町長山 26、27-（2）

調査期間 平成 16 年 4 月 21 日から平成 16 年 5 月 31 日

熊本県教育委員会

# 長山前田遺跡発掘調査報告

## －九州新幹線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査－

### 目 次

第Ⅰ章 序言	1
1 調査にいたる経緯	1
2 発掘調査の体制及び経過	2
3 報告書の作成	2
第Ⅱ章 調査	4
1 調査地域	4
(1) 遺跡の位置及び歴史的背景	4
(2) 地理的環境	4
(3) 測量	4
(4) その他	4
2 調査日誌抄	5
第Ⅲ章 調査報告	9
1 調査区の概要	9
2 各区の報告	9
3 まとめ	14
挿図 (Fig) 目次	
Fig. 1 施工区域における地形表記と九州新幹線建設に伴い発掘調査を実施した遺跡	3
Fig. 2 長山前田遺跡周辺地形図 (1/5,000)	6
Fig. 3 長山前田遺跡周辺遺跡地図	7
Fig. 4 標列 SA001 実測図	9
Fig. 5 土坑 SK001 実測図	9
Fig. 6 土坑 SK002 実測図	9
Fig. 7 長山前田遺跡遺構配置図及び座標変換点	10
Fig. 8 清 SD001 ～ SD003 実測図	11
Fig. 9 標列 SA002 ～ SA005 実測図	12
Fig. 10 挖立柱建物 SB001 実測図	13
表 (Tab) 目次	
Tab. 1 九州新幹線（新八代・博多間）建設工事に伴う玉名都市埋蔵文化財発掘調査一覧	1
Tab. 2 長山前田遺跡の基準点測量成果	4
Tab. 3 遺跡地名表	8
写真 (PL) 目次	
PL. 1 調査区から新幹線トンネル坑口（玉名方面）	18
PL. 2 溝遺構を挟み掘立柱建物 SB001 方向遺構検出状況	18
PL. 3 標列 SA001 実測（東より）	19
PL. 4 挖立柱建物 SB001 実掘（北より）	19

# 長山前田遺跡発掘調査報告

## 第Ⅰ章 序言

### 1 調査にいたる経緯

長山前田遺跡は熊本県玉名郡南関町長山 26, 27- (2) に所在し、九州新幹線建設工事に伴い実施した分布調査で、試掘調査が必要と判断したなかで確認された新規発見の遺跡である。遺跡の時代は、試掘調査時に弥生時代後期の台付甕ほか弥生土器が数点出土したことから、当初は弥生時代の遺跡と報告された。

調査範囲は九州新幹線三池トンネル坑口（三池トンネル終点）から閑川を望む丘陵先端部にまで及び、調査面積は 1,201m<sup>2</sup>を測る。

### （事業計画の概要）

九州新幹線鹿児島ルートは、国民経済の発展及び国民生活領域の拡大並びに地域の振興を目的で、「全国新幹線鉄道整備法」に基づき建設されるもので、福岡市から熊本市、鹿児島県川内市を経由し、鹿児島市に至るまでの総延長約 249km の大動脈である。完成により、移動時間の短縮、県内総生産にもたらす経済波及効果及び地域間交流の拡大多くのメリットがもたらされることから、各界から早期の開業が望まれていた。

当該ルートは昭和 48 年 11 月 13 日に整備計画の決定及び建設の指示がなされた後、昭和 61 年 8 月 29 日に工事実施認可申請がなされたが、その後の経済情勢や社会情勢の変化に伴い、平成 3 年 8 月 22 日に先行して八代～西鹿児島間にについて工事実施計画が認可され、同年 9 月 7 日に起工した。その後、平成 10 年 3 月 12 日に船小屋～西鹿児島間の工事実施計画が認可され、同年 6 月 2 日に博多～船小屋間に起工している。

平成 16 年 3 月 13 日に新八代～鹿児島中央間の部分開業を経て、平成 23 年 3 月 12 日博多～新八代間が開業した。

No	遺跡名	所在地	地名記からの 新幹線の題材	調査面積	調査期間	調査員名	遺跡の年代	主な遺構・遺物
1	長山前田遺跡	玉名郡南関町長山 26-27- (2) 前田	66km700m ～ 66km900m	1,201m <sup>2</sup>	H16.4.21 ～ H16.5.31	坂口圭太郎 松本徹也 坂本重矢子 鶴田光智	弥生・中世	獨立柱建物、塚列、道路、溝、土坑
2	船小屋津留遺跡	玉名郡玉東町津留佐地内	80km383 ～ 80km598m	2,273.54 m <sup>2</sup>	H16.5.27 ～ H17.12.28	尾方幸子 今村和雄 鶴田光智	弥生・古墳 古代	獨立柱建物、土坑、溝、 堅穴建物、柱穴部 巴形網路、弥生土器・古式土器
3	琴田下遺跡	玉名市津留字琴田下 223-2 ほか 9 等	78km227m ～ 78km400m	5,762m <sup>2</sup>	H16.6.1 ～ H16.10.27	長谷部義一 吉田徹也 早田利宏 園田昌子	古墳・中世 近世	溝、杭跡、土坑 13世紀～14世紀代青磁・白磁、 土師器・中世須恵器、瓦器など
4	小瀬遺跡	玉名市石賀字小瀬 345-2 ほか 13 等	74km220m ～ 74km300m	2,406m <sup>2</sup>	H16.6.14 ～ H16.10.31	坂口圭太郎 松本徹也 坂本重矢子 鶴田光智	弥生・中世 近世	獨立柱建物、堅穴建物、 土坑、溝 弥生土器・土師器・須恵器・陶器
5	太郎丸遺跡	玉名市大字津留字白柏 373-2 ほか 13 等	77km840m ～ 78km230m	14,148m <sup>2</sup>	H16.11.1 ～ H17.10.31	長谷部義一 吉田徹也 早田利宏 園田昌子	古代・中世 近世	土坑、土坑墓、溝、獨立柱建物、 土師器・中世須恵器、龍泉系青磁、 瓦器、白磁
6	西屋敷遺跡	玉名市大坊字西屋敷 2660-3 ほか 4 等	75km230m ～ 75km500m	325m <sup>2</sup>	H17.4.9 ～ H17.5.13	長谷部義一 吉田徹也 早田利宏 園田昌子	中世・近世	五輪塔、近世墓（舟形背荷墓石）
7	瀬底遺跡	玉名市瀬留字田面 103-3 ほか 3 等	78km560m ～ 78km950m	4,344m <sup>2</sup>	H17.4.19 ～ H17.9.30	吉田徹也 早田利宏 園田昌子	古墳・古代 中世	堅穴建物、溝、燒成土坑 土師器・須恵器・青磁・白磁ほか
8	西追間田遺跡	玉名市内迫間	76km277m ～ 76km420m	742.92m <sup>2</sup>	H18.8.23 ～ H18.10.10	坂口圭太郎 龜田 學	弥生・古墳	水田跡
9	玉名市平野字豊野 (古關前地E)	玉名市西迫間田古關前 158-2 ほか 9 等	76km721m ～ 76km873m	2,537.85 m <sup>2</sup>	H19.8.1 ～ H20.1.31	長谷部義一 吉田徹也 吉井英二 坂本重矢子 園田昌子	弥生後期 古墳初期・後期 古墳中期・後期 古代・中世 近世	弥生後期（堅穴建物・溝状遺構） 古墳時代（堅穴建物・製鉄関係遺構・ 井戸・焼成土坑・土坑） 古代（獨立柱建物跡・焼成土坑） 中世（溝状遺構） 近世（防土探査坑）
10	西院寺遺跡	玉名市玉東町西院寺 1018	— (工事用道路)	518m <sup>2</sup>	H18.11.26 ～ H19.12.26	坂口圭太郎	中世・近世	溝、土坑、柱穴

Tab.1 九州新幹線（新八代・博多間）建設工事に伴う玉名都市埋蔵文化財発掘調査一覧

## 2 発掘調査の体制及び経過

調査期間 平成 16 年 4 月 21 日から平成 16 年 5 月 31 日

### 調査体制

調査責任者 文化課長 島津義昭

調査総括 課長補佐 倉岡 博

調査指導 課長補佐（文化財調査第一係担当）高木正文

調査担当 文化財調査第一係 参事 坂口圭太郎、主任主事 松森由美

非常勤職員 坂本亜矢子 横田光智

### 調査助言・指導及び調査協力者

大牟田市教育委員会、南関町教育委員会、和水町教育委員会、玉名市教育委員会

坂井義哉、坂本重義、黒田裕司、竹田宏司、益田浩二

### 調査に伴う業務委託先

4 級基準点測量及びメッシュ杭設置業務 有限会社 古家測量設計

## 3 報告書の作成

報告書の作成は、熊本県文化財資料室（熊本市城南町沈目 1667 番地）にて、平成 23 年 5 月 9 日に一次整理、二次整理、原稿執筆等一連の作業に着手し、同年 5 月 31 日に終了した。

本書の作成体制は以下のとおりである。

整理責任者 文化課長 小田信也

整理総括 文化財調査第一係長 村崎孝宏

整理指導 文化財資料室長 坂田和弘

整理担当 参事 長谷部善一

非常勤職員 稲葉貴子、唐木ひとみ

整理補助 石田敦子（班長）、福島典子（副班長）、小早川隆春、塙田喜美子、今崎光成、田中裕子  
藤井美智子、田熊敏子、瀬淵俊子（以上、一次整理）

土田みどり、岩下恵美子、築出直美（以上、二次整理）

### 整理報告に伴う委託業務

デジタルトレース業務 株式会社 埋蔵文化財サポートシステム 熊本支店



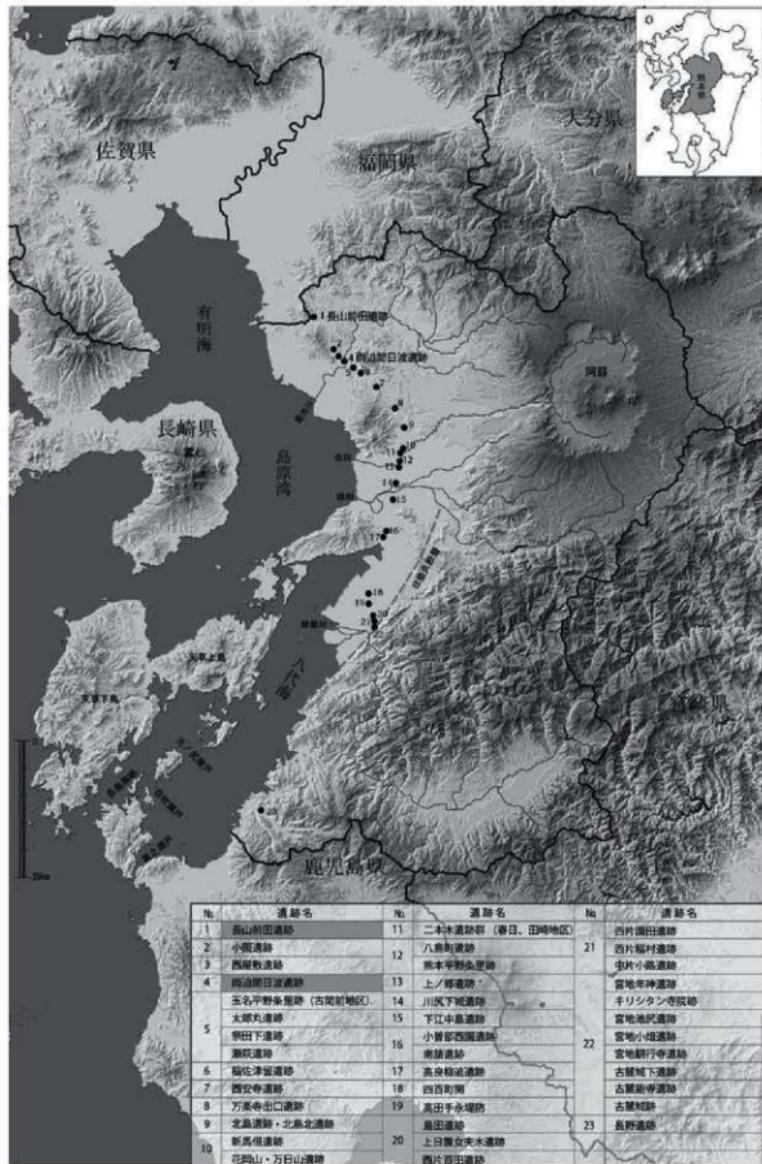


Fig.1 熊本県域における地形表記と九州新幹線建設に伴い発掘調査を実施した遺跡

## 第Ⅱ章 調査

### 1 調査地域

#### (1) 遺跡の位置及び歴史的背景

熊本県の西北端部に位置し、行政区では玉名郡に位置する。福岡県大牟田市、みやま市に隣接する県境に接している。奈良時代から大水と呼ばれ、927年完成の『延喜式』兵部省諸国駅伝馬条によれば、この地域に宿駅が置かれたとされている。それが「大水駅」であったと考えられる。その後、正式な記録としては平家物語の中に、南関町の関所が置かれたとする一節があるのみである。

現在の南関町の中心部近くには、近世には長く肥後国北辺の固めとなる上番関所の「松風の関」(別名「大津山の関」)が置かれ、町内をとおる豊前街道は豊後街道・薩摩街道・日向街道とならぶ「九州四大街道」のひとつで、熊本の城下から南関を経て豊前・小倉を結ぶ参勤交代路であった。参勤交代の道中、肥後藩主らが休息をとった「御茶屋」は、現在、豊前街道南関御茶屋跡として保存されている。また、明治10年(1877年)の西南戦争(西南の役)では、有栖川宮熾仁親王が大本營を設置し官軍を指揮したとの記録も残る。

#### (2) 地理的環境

地形は北の大津山、西の三池山、南の小岱山、白間山、東の二城山の小山系で囲まれ、盆地地形を呈する。南関町内に源を有する関川が大牟田市の境界境(一部は県境)を西流し、大牟田市街を経て有明海に注いでいる。遺跡は低丘陵性台地上に位置し、小規模な尾根上のわずかな平坦地に所在する。

#### (3) 測量

長山前田遺跡の発掘調査を実施するにあたっては、事前に基準点測量と水準点測量を実施した。基準点は本調査のきっかけとなった九州新幹線建設工事に伴い鉄道・運輸機構が設置した国土座標系II系に基づく日本測地系により設置している。

2002年(平成14年)4月1日からの改正測量法の施行に伴い、日本測地系から世界測地系へ移行することとなつたが、本事業における基準点が日本測地系となっていることから、熊本県内における埋蔵文化財調査に伴う基準杭、メッシュ杭はすべて日本測地系で示している。そのため、以下に世界測地系に変換した数値を示すことで今後の資料とする。

	日本測地系		世界測地系	
	X座標	Y座標	X座標	Y座標
引照点.7	1157.619	-44964.887	1530.2451	-45185.8790
引照点.8	1174.340	-44957.699	1546.9656	-45178.6913
A2(調査区中心)	1210.000	-44960.000	1582.6248	-45180.9921
B1(調査区南端)	1193.500	-44960.000	1566.1251	-45180.9925
B4(調査区東端)	1220.000	-44952.500	1592.6244	-45173.4928
B8(調査区西端)	1234.000	-44960.000	1606.6243	-45180.9926
B6(調査区北端)	1220.000	-44982.000	1592.6252	-45202.9917

Tab.2 長山前田遺跡の基準点測量成果

#### (4) その他

発掘調査は遺構の種別を示す以下の記号と、一連の番号の組み合わせにより表記した。

SA(柵列) SB(掘立柱建物) SC(回廊) SD(溝) SE(井戸) SF(道路) SG(池) SI(竪穴建物)  
SK(土坑) SP(柱穴) SS(礎石) ST(墓) SX(その他、不明遺構等)

※上記、遺構名称には本書で使用していない記号も含んでいる。

※遺構観察表に記している色調については「新版標準土色帖」(1999)を使用した。

## 2 調査日誌抄

2004年（平成16年）

### 4.21 調査区の現況撮影実施

- 4.22 午前中、表土剥ぎ作業、調査機材等整理。午後、調査区周辺の除草作業。その後土壟を作り調査区を囲む。
- 4.23 調査区の範囲に土壟を積む（調査区のラインを明確にするため）。
- 4.26 午前中に土壟作りをして調査区範囲に並べる。南西側から南東側に調査区全体を清掃。午後は調査区南東端の表土残りを除去。
- 4.27 午前中は降雨のため作業は中止。午後から土壟作り、調査区にシート張り作業。その後、南西上段部から清掃。
- 4.28 調査区全体清掃。南側下段の精査を行い遺構検出作業を実施。
- 4.30 調査区北側の掘り下げ。
- 5.6 午前中は連休中の降雨による清掃作業を実施。その後、北側の精査を行い、遺構検出、写真撮影を実施。
- 5.7 午前中北側上段から清掃し遺構の検出に努める。中世期と見られる柱穴群を検出。午後から4級基準点測量及びメッシュ杭設置。
- 5.10 週末の降雨による土砂の排出及び水汲みを実施。その後、清掃を実施したが再度降雨のため作業を中止。午後から晴れたため全体の清掃を実施。
- 5.11 SA001、SA002、SA003、SA005、SA006、SB001 柱穴半裁。調査区北側の1層掘り下げ。  
遺構配置図（1/100）、割り付け図（1/20）作成、遺構検出状況撮影。
- 5.12 SD001～SD003 掘り下げ。SA003、SA005、SA006、SB001 実測。午前中、SD001～SD003（溝状遺構）の掘り下げを実施。SA003、SA006、SB001 の土層断面を作成。文化課高木課長補佐来跡・指導。
- 5.13 降雨のため調査は中止。
- 5.14 前日までの降雨による雨水くみ上げ等を実施。SD001～SD003 にトレッチを入れ立ち上がりを確認。SA005、SA006、SB001 の完掘写真撮影。
- 5.17 前日までに降った雨水の水抜き作業を実施。やや現場が乾いたのちに上段の調査区北西端から清掃を行い、SA002、SA003 の完掘写真撮影。  
県教育庁 大久保教育次長、文化課倉岡課長補佐、高木課長補佐来跡。
- 5.18 SD001～SD003 完掘状況、SA001 完掘状況撮影。
- 5.19 SK001、SK002 完掘。1/20で実測。
- 5.20 降雨のため作業中止。
- 5.21 SD001～SD003 の実測。
- 5.24 完掘写真撮影のため全体清掃。本日は個別遺構の写真撮影を実施。
- 5.25 午前中に全景完掘写真撮影を実施。その後、調査機材等の整理。
- 5.26 午前中に調査事務所で図面整理、写真台帳作成、遺構台帳作成。午後は調査区内の杭を抜いて現地調査を終了する。
- 5.27 図面整理。事務所撤収。

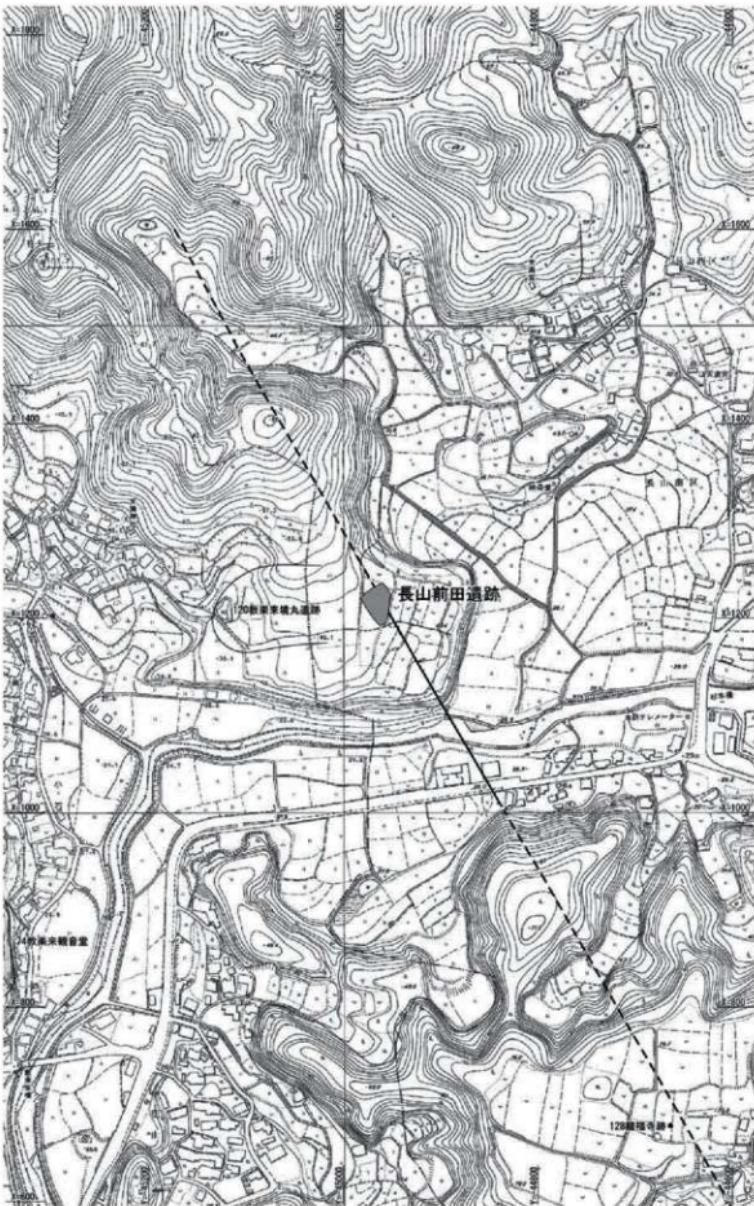


Fig2 長山前田遺跡周辺地形図 (1/5,000)

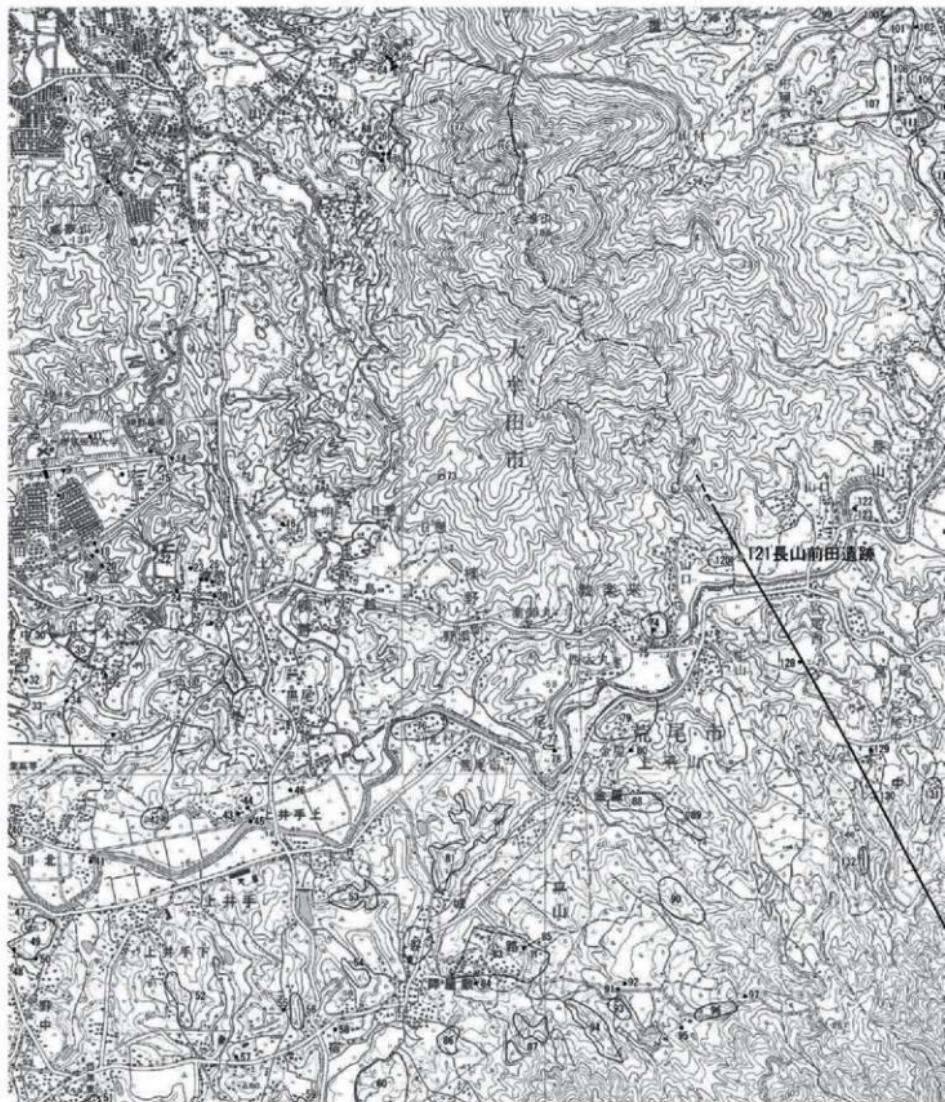




Fig.3 長山前田遺跡周辺遺跡地図

遺跡 番号	遺跡名	時代
1	歴木石垣の遺跡	古代
2	御前原土塁跡	古代
3	今山前田遺跡	古代
4	櫛面御区化石の遺跡	古代
5	跡立ヒカリ丘古2号窯	古代
6	跡立ヒカリ丘古4号窯	古代
7	跡立ヒカリ丘古5号窯	古代
8	古神明社跡の心石遺跡	古代
9	跡立ヒカリ丘古3号窯	古代
10	跡立ヒカリ丘1号窯	古代
11	跡立ヒカリ丘12号窯	中世
12	跡立ヒカリ丘10号窯	古代
13	跡立ヒカリ丘13号窯	中世
14	跡立ヒカリ丘11号窯	古代
15	東御地区陶化の遺跡	古代
16	十六の字ノホ	古代
17	跡立ヒカリ丘6号窯	古代
18	跡立ヒカリ丘7号窯	古代
19	跡立ヒカリ丘8号窯	古代
20	跡立ヒカリ丘9号窯	古代
21	跡立第1号窯	古史
22	跡立御石遺跡	古史
23	跡立御石窯跡	古史・平安
24	跡立丙内御石窯	平安
25	跡立御石3号窯	古史・平安
26	跡立御石4号窯	古史・平安
27	跡立御石5号窯	古史・平安
28	跡立御石5号窯	古史・平安
29	跡立御石古墳	古史
30	跡立御石古墳	古史
31	跡立御石古手	古文
32	跡立御石ノホ古墳	古史
33	跡立御石下	古史・中世
34	木材の川口古墳	中世
35	跡立ノホ元	古史
36	本村古墳	中世
37	下平ののうかし	古史
38	跡立御石窯	古史
39	東の川古窯及び 石垣の遺跡	古史
40	跡立・三郷古墳	古文～中世
41	豊富古石造古墳	中世
42	安の原	古文～中世
43	羽木本山御石	古史
44	羽木八幡地石跡	中世
45	羽木城	古史
46	新井の安堵	中世
47	月手御跡	中世
48	麻葉古跡	中世
49	月手・平定	中世
50	御石山空塗	古史・中世
51	用田	古代
52	西御跡	古史・中世
53	大坂	古文～中世
54	ウズゴス空塗	古史・中世
55	首屋ノ原	古史
56	首屋御跡	古史・中世
57	豊富御石跡	中世
58	豊山古墳	古史
59	タクシ山古跡	古史・中世
60	平山	古史・中世
61	今山御石平塗	中世
62	今山御石御代跡	中世
63	近山古小野山古塗	中世
64	若生古石塗	中世
65	池谷古石塗	古史
66	御石御代跡	古史
67	御石・池谷古石塗	古史
68	豊光古石塗	古史
69	若生古石塗	古史
70	若生古石塗	17世紀
71	今山御石古塗	中世～近世
72	御山	中世～
73	御野道	古史・平安
74	西御石古跡	古史
75	御石木天保社の御石	中世
76	御野	古史～中世
77	御野糸ノ屋	中世
78	一ノ尾のアラカシ	中世
79	金屋・金屋居敷	中世

Tab.3 遺跡地名表

## 第Ⅲ章 調査報告

### 1 調査区の概要

当該工事予定は大牟田市側から延びる三池トンネル坑口であるため、通常の線路予定地のみの場所よりも横幅が広くなっている。調査区は背後の低丘陵性台地から関川に張り出す緩斜面上に位置しており、調査区の中ほどの溝状遺構（溝 SD002）を境に北側を1区、南側を2区として調査時に設定してある。また、Grid設定は調査面積（1,201m<sup>2</sup>）が広くないこと、遺物包含層が後世の削平により残されておらずGridでの遺物取り上げは必要ないと判断されたことから設定はしていない。（Fig.7）参照

### 2 各区の報告

X=1225、Y=-44980 から X=1220、Y=-44953 にかけて調査実施した溝 SD002 を境に北側の遺構から報告する。

1区柵列 SA001 (Fig.4) P1 ~ P6まで確認され、最大長 (P1 ~ P6) の中心間は 9.7m を図る。しかし、P1側はP2との間隔からして調査区外に延びている可能性もある。南北側に並列する柱穴列が確認されなかつたことから、調査時点から柵列との認識がなされている。検出された遺構は、いずれも浅いが基底面レベルはほぼ均一であることから、同時に掘り込まれたものとして間違いないと考えられる。柱穴1基あたりの直径は約20cmから35cm程度とバラつきはあるが、中心ラインはほぼそれぞれの柱穴の中心を通る。P6のみ

は遺構深度、直徑ともに違いはあるが、ラインが中心線上に位置していることから同一遺構として報告する。柱痕跡、根固めの土層等は確認されていない。

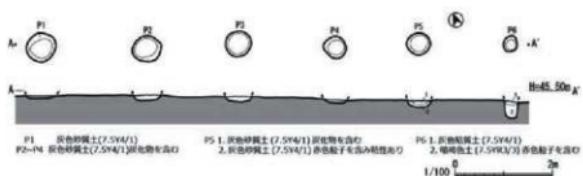


Fig.4 柵列 SA001 実測図

土坑 SK001 (Fig.5) 先述した柵列 SA001 の南側に位置し主軸はほぼ北を向く。遺構全長は 3.3m で、幅は断面図を作成した範囲で 50cm を測る。両端でやや断面位置よりも幅が広がるが極端ではない。遺構南端ではやや西向きに曲がるが先は延びない。掘削深度は浅く、下端付近はほぼ水平である。出土遺物はない。

土坑 SK002 (Fig.6) 土坑 SK001 の西側に位置し検出された円形の遺構。直径 73cm で、検出深度は 13cm である。遺構埋土は土坑 SK001 と類似する。出土遺物はない。

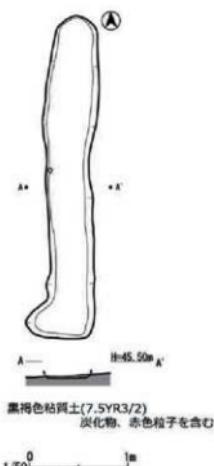


Fig.5 土坑 SK001 実測図



Fig.6 土坑 SK002 実測図

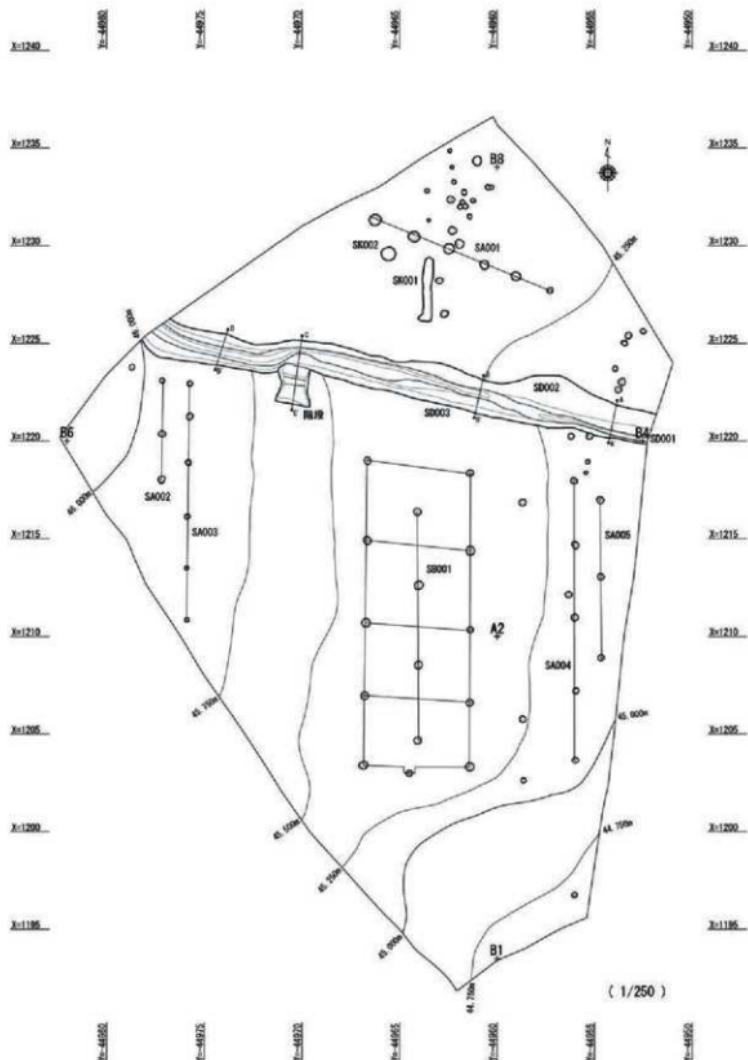


Fig.7 長山前田遺跡遺構配置図及び座標変換点

溝 SD001～SD003 (Fig.8) 本調査区で 1 区、2 区の間で検出した遺構。全長は約 26m、主軸は N-76.5°・W を測る。

遺構検出、掘削時には 1 条の溝状の遺構として認識され調査されているが、完掘時点で 3 条の溝が切り合っていると判断し、断面図で溝の切り合いを表している。

整理時の図面検証の結果、溝は 3 条であること、切り合いの中に溝 SD001 が掘り込まれていることを確認した。しかし、溝 SD002、SD003 間の切り合いは不明である。遺構ラインの推定を検討した結果、溝 SD001 の断面形状等が最も規模が小さく、溝 SD002 が最も規模の大きな遺構であると判断された。断面形状はいずれの溝も緩い U 字状で西に行くほど深くなる。土色は調査時点での記録がなく不明であった。

断面 C-C' 部では、南側に向かって階段状の遺構も確認されている。下段より 2 段目に向かっては緩く弧を描き段差を付けるが、これは本来の形状ではないと判断される。使用途上での崩落の結果であろう。溝 SD003 から 1 段目までの比高差はやや高く約 20 cm を測るが、2 段目との段差は数センチしか残されていない。後世の削平によるものであろう。

東側から直線的に延びてきた溝は C-C' の階段状遺構直下でやや南に角度を変え蛇行し、その後再度直線に延びたのち、北へ屈曲を始める様相を呈する。延長線は用地買収外へ延びていることから最終的な形状は不明である。

埋土からは中世後期に位置する青磁皿片が出土しているが、同時に近世磁器の長頸壺胴部片が出土しているため、本遺構は近世の遺構であると考えられる。その他には、欠損端部が丸くなつた土師器片が数点出土している。土地掘削時に上層にあった遺物の流れ込み、または表土に使用する耕作土を持ち込んだ際にすき込まれた可能性もある。

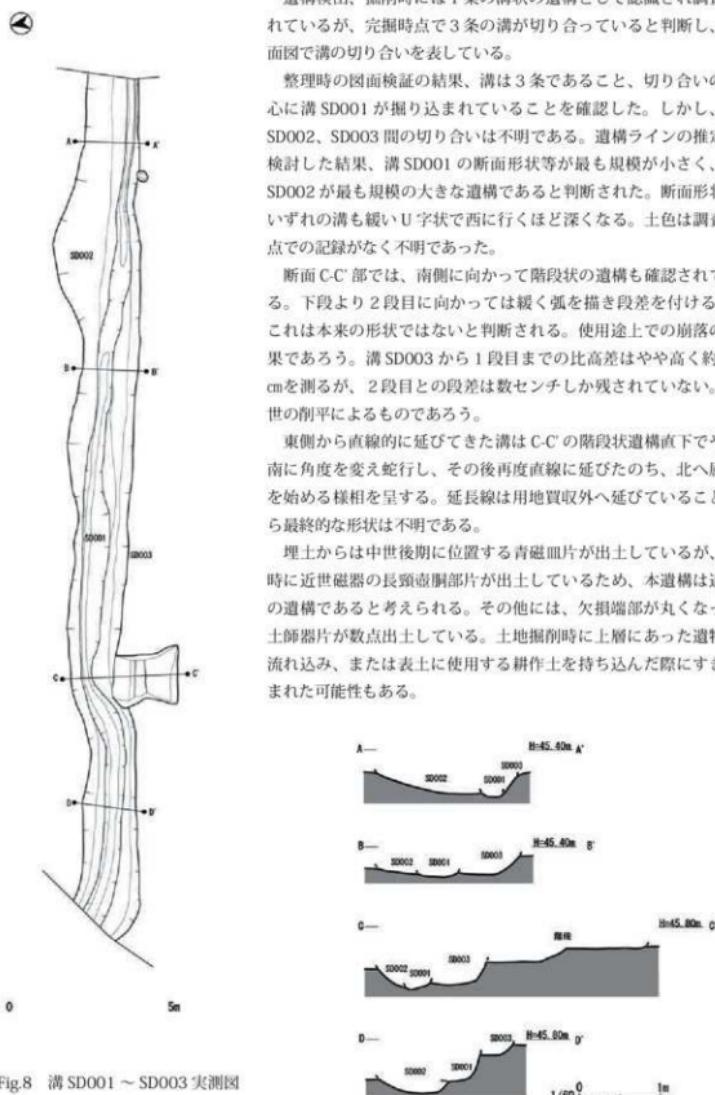


Fig.8 溝 SD001～SD003 実測図

2区 柵列 SA002～SA005 (Fig.9) 1区で検出した柵列遺構と違い、柵列 SA002 から柵列 SA005 として検出・確認した柵列はほぼ南北に主軸を有する。後に報告するが、柵列 SA002・SA003 と柵列 SA004・SA005 間で検出した掘立柱建物 SB001 を基準とした柵列であったことは、遺構の配置から十分検討するに足るものである。

遺構の全長はそれぞれ柵列 SA002 が 5.1m、柵列 SA003 が 12.2m、柵列 SA004 が 14.4m、柵列 SA005 が 8.1m を測る。また、同時期の柵列であるとした根拠は、中央の建物を挟み西側に位置する柵列 SA002・SA003 が黒褐色土系の埋土、東側に位置する柵列 SA004・SA005 が灰色砂質土の埋土を有すること、それぞれの土壤のなかで同時に廃絶されたことと見られること、遺構下端がほぼ均一で後世期の柱穴が混入しているとは考えられないこと等である。

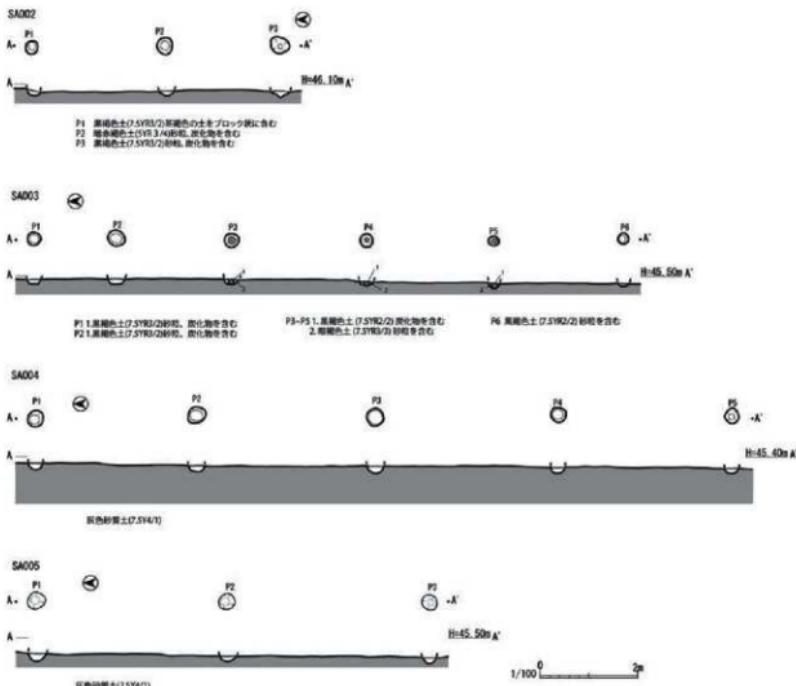


Fig.9 柵列 SA002～SA005 実測図

掘立柱建物 SB001 (Fig.10) 調査区のほぼ中央部で確認された遺構。側柱は 4間×2間で中心に半間ずらした状態で中柱を配している。長軸方向の全長は 15.6m、短軸側は 5.4m、主軸はほぼ南北に位置する。本建物で検出した柱穴群もほかの柵列柱穴群同様に、埋土が灰色と黒褐色土系の埋土であること、下端レベルがほぼ同一であることから柵列と同時期の遺構であると考えられる。

また、建物を検出した場所は 45.250m 付近の等高線間隔が広がっており、緩斜面を削平し整地していることが窺える。埋土中から図示できる遺物の出土ではなく、欠損部端部が磨滅したものが多く年代を与えるだけの材料をもった資料はない。

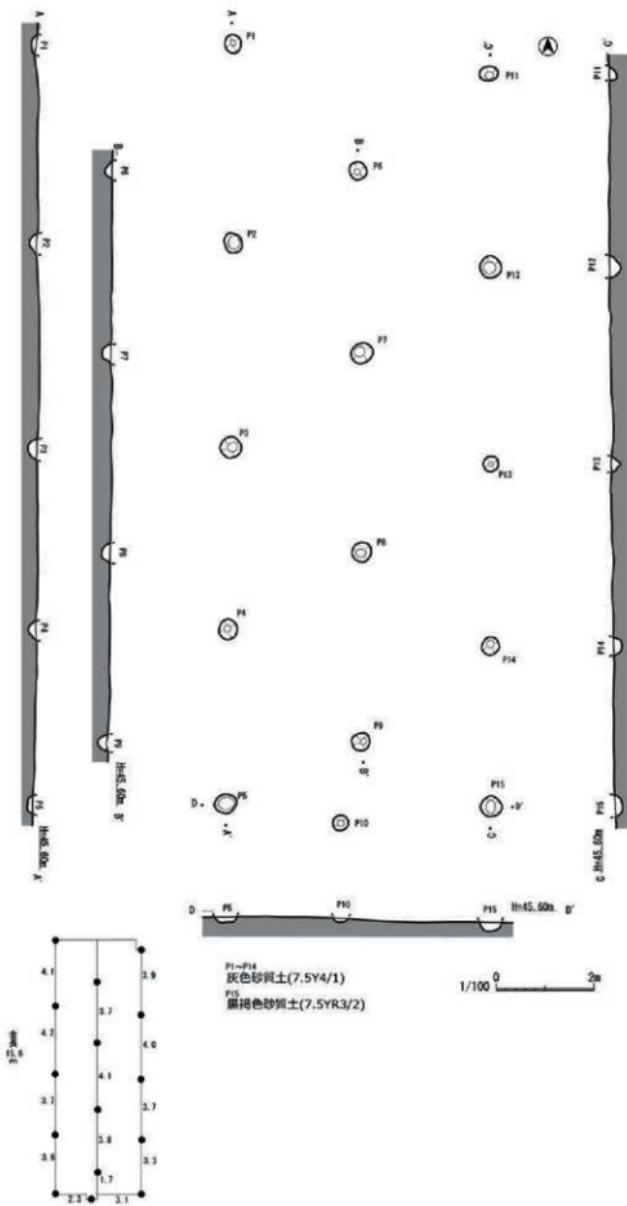


Fig.10 据立柱建物 SBO01 実測図

### 3 まとめ

今回の調査で検出した遺構は、明確な時期の遺物を含むものではないため、遺構そのものに時期を与えることは非常に危険である。しかし、調査を実施した記録と調査担当者の言を借りまとめとしたい。

調査を実施した平坦面を含む丘陵は、背後の低丘陵から延びる尾根上に位置する平坦面であることから、本調査区で検出した遺構が当該丘陵上で検出できるすべての遺構である。中心となる建物（SB001）が狭い丘陵上の中央に尾根方向に沿って建てられていたことも土地利用を意識したうえでのものと考えられる。また、建物の両端に柵列が並び、両方向からの見通しを分断するような構成となっており、建物の性格を判断するうえで重要な意味合いを持つ。また、遺物包含層が形成される土地ではないこと、遺構検出面が表土層直下であることなどを考慮すると、平野部に位置する遺跡と違った遺物の移動は少なく、出土した遺物が限りなく遺構の年代に近いことが予想される。

出土した遺物をみると、主に溝SD001～SD003 墓地から弥生後期の土器片、中世後期の龍泉窯系青磁片が出土している。主な遺構は龍泉窯系青磁が持ち込まれた中世後期の掘立柱建物 SB001 などで、これら遺構群造成の際の丘陵上の平坦部造成に伴い、弥生後期の遺構は消滅したものと考えられる。溝 SD001～SD003 墓地からは、赫筒底皿青磁、細連弁文青磁の小片が出土しており、これらの遺物が流通する 16 世紀前半以降の年代が本遺跡で確認した遺構群に与えられる年代であろう。

遺跡が立地する土地は福岡県と熊本県の県境が入り乱れていることから、見通しのきく丘陵上には簡易な砦が多く築かれ、本城に対する出城の機能を持った施設であったと考えられる。

遺跡の年代を 16 世紀前半から後半頃であったとすると、肥後国衆一揆が起きた 1587 年（天正 15 年）前後で、当該地区を含む肥後國北部が不安定な時期とも重なる。このことから、本遺跡で確認された遺構は、丘陵直下を通る三池街道への監視のための施設であった可能性が高いと考えられる。

1 中世土器研究会「観測 中世の土器・陶磁器」 真陽社 1995 の「質屋陶磁器(中世後期の質屋陶磁器)B 青磁」中で佐井明徳氏により、14～16 世紀に A・雷文帶蓮弁文種、B・細連弁文（萬文）種の 2 型式に分類し、うち細連弁文については弁の先端が側面状でへたによる片切形である B-1 と、口縁直下に連続する弧線を描きそこから任意に高台方向に繊維を下ろす B-2 の 2 型式に分類している。



長山前田遺跡現況 2011（平成 23 年）初夏

PLATE  
写 真



PL. 1 調査区から新幹線トンネル坑口（玉名方面）



PL. 2 溝造構を挟み掘立柱建物 SB001 方向造構検出状況



PL. 3 梱列 SA001 完掘（東より）

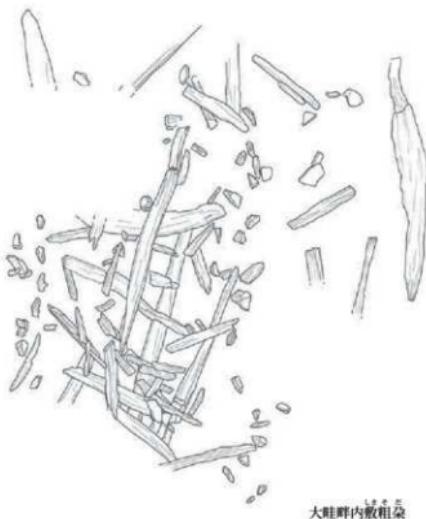


PL. 4 捜立柱建物 SB001 完掘（北より）



# 両迫間日渡遺跡 1

-九州新幹線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査-



熊本県教育委員会

2012

## 例 言

- 1 本書は、熊本県玉名市両迫間石町に所在する両迫間日渡遺跡 県 06-II 調査区の報告書である。
- 2 発掘調査は、九州新幹線建設工事に伴い、独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構九州新幹線建設局（旧日本鉄道建設公団九州新幹線建設局）の依頼を受け、熊本県教育委員会が実施した。調査費及び整理報告費については、独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構九州新幹線建設局が負担した。
- 3 遺物の整理は、熊本県教育庁文化課文化財資料室で実施した。
- 4 遺跡の発掘調査は平成 18 年度に実施し、整理報告作業を平成 22 年度から 23 年度まで実施した。
- 5 本書で用いる地形図は、玉名市都市計画課から提供された図幅、並びに国土地理院発行の 2 万 5 千分の 1 地形図、玉名市教育委員会「両迫間日渡遺跡」掲載図面等をもとに作成した。  
また今回、地元地権者の方々に御協力を頂き、遺跡の測量の基準点測量及び水準測量は「有限会社古家測量設計」に委託して実施した。また、新幹線建設工事の共同企業体の担当者にも協力いただいた。
- 6 現地での写真撮影は坂口圭太郎、亀田 学、伊藤(手柴)友美子、園田恭子、戸田英祐、桑原 愛、多賀晴司、吉留 広が行った。遺構実測は前記 3 人の他、飯塚千恵美、高津千尋、吉田ムツ子、吉川ゆかり、堀田祐子、田上俊子、尾浦公治、梅林将吾が実施した。現地での掘削作業は、先程挙げた方々の他、多数の作業員の協力を得た。遺物の実測は、土器・石器を坂井（西野）由葉、測上久史、亀田、製図は、主に同 3 人の他、川井田久子、平川恵里子が実施した。遺物洗浄・接合・復元は、松本直枝、上野栄子、三井佳子、松原泰子、水牧藤美、境 美恵子等が行った。遺物の写真撮影は、亀田が行い、これを坂井（西野）が補助した。  
その他宮崎敬士、山口節子、末武希代子、渡邊いわ子、田中知恵美、木村奈美、中島美絵に協力を得た。
- 7 自然科学分析（炭素同位体年代測定、樹種同定、種実同定等）は「株式会社パリノ・サー・ヴェイ」に委託した。
- 8 本書の執筆は、自然科学分析は、「株式会社パリノ・サー・ヴェイ」が、その他を亀田が執筆した。
- 9 整理後の保管は熊本県文化財資料室で保管されてい

る。

- 10 本書の編集は、熊本県教育庁文化課が行い、測上・平川・川井田の援助を得て坂井（西野）、亀田が担当した。

## 凡 例

- 1 方位／座標 國土座標第 II 系（日本測地系）を基準とし、方位もそれに準じた。
- 2 遺跡地区名 遺跡全体の地区（図 5）の通りである。
- 3 遺構名略号 次の通りである。SD：溝、SX：その他
- 4 遺構図版 標高は東京湾平均海水面（Tokyo Peil[T.P.]）
- 5 遺構図版 縮尺 遺構図版は、ブロックごとに掲載し、縮尺はキャッシュン及びスケールで図示した。
- 6 遺構図版 線種 遺構平面図は原則として確定ラインは実線で掲載し、遺構上・下端の推定線は破線で示した。また搅乱および調査区範囲については一点破線で示した。
- 7 遺構図版 木杭の断面については木目の方向で（斜線）で示している。これに該当しないものは線のみで示した。
- 8 遺構図版 断面ポイント 各遺構の平面及び断面図では—ラインの内側をポイントとしている。
- 9 遺物図版 縮尺 遺物実測は原則として土器は 1/3 及び 1/2、石器は石製穂道具については 1/2、その他は 3/4、木器は 1/5 で掲載した。
- 10 遺物図版 線種 外形線、中心線及び区画線は実線、接線は一点破線または二点破線、推定線は破線で示した。また、須恵器については、断面を塗りつぶし、回転ヘラ削りを実線で示したのち、以下底部まで砂粒の動きを示している。
- 11 遺物図版 土器の小破片については、断面図の左を内面、右を外面の立面図にしている。拓本貼付もこれに準じている。須恵器は断面を黒塗りしている。
- 12 接合痕跡 断面の内側に破線を入れている。
- 13 遺物観察表 すべての実測個体について、遺物観察表を掲載した。その凡例は、各観察の下に別項にて注記している。
- 14 本文中のローマ数字の層名は、遺物包含層を省略して表記している。

## 第Ⅰ章 調査の経過

### 第1節 調査に至る経緯と経過

今回報告する調査地は九州新幹線の路線上であり、幅広くなっている調査区域は現在新玉名駅の駅舎の南側になっている部分である。当初調査地の北側及び南側の確認調査では頗著な構造が存在しなかつたが、県道玉名山鹿線の道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査で弥生時代後期と考えられる水田耕作に伴う畦畔が検出され、周辺に水田面が広がっていることが判明した。そこで確認調査を実施していなかった区域にトレンチを設定した結果、水田の畦畔に伴う木杭などを検出した。そのため、独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構九州新幹線建設局（旧日本鉄道建設公団九州新幹線建設局）の依頼を受け、熊本県教育委員会が平成18年8月23日から平成18年10月9日まで埋蔵文化財発掘調査を実施した。（平成18年8月21日付け教文1369号で発掘調査の通知）を実施している。

### 第2節 調査の組織

#### 【平成18年度】現地調査

調査主体者 植塙 純男（熊本県教育長）

調査責任者 梶野 英二（文化課長）

調査総括 江本 直（文化課課長補佐）

高木 正文（課長補佐（文化財調査第1係担当））

調査事務 吉田 恵（課長補佐）

高宮 優美（主幹兼統務係長）

小谷 仁志（主任事務）

調査担当者 坂口 圭太郎（参事）、亀田 学（主任学芸員）、

伊藤（手柴）友美子・園田 恒子・多賀 晴司・

吉留 広（嘱託）

調査指導／支援 西住欣一郎（主幹兼文化財調査第2係長）、

山下 義満（参事）

戸田 英祐・栗原 愛（嘱託）

#### 【平成23年度】整理・報告書作成

整理主体者 山本 隆生（熊本県教育長）

整理責任者 小田 信也（熊本県文化課長）

整理総括 村崎 孝宏（文化財調査第1係長）

坂田 和弘（参事兼文化財資料室長）

整理事務 川上 勝美（課長補佐）、水元 敬浩（主幹兼統務係長）、山田 京子（高校教育課参事）

整理担当者 亀田 学（主任学芸員）、坂井（西野）由葉（嘱託）

## 第Ⅱ章 遺跡の環境（図1）

両迫間日渡遺跡は、菊池川下流の右岸に位置する遺跡で山鹿地区から熊本県玉名市両迫間の宇日渡・龍王田・御琴・阿弥陀田・上徳等に広がる遺跡群で東西約300m、南北約600mの範囲に広がる遺跡である。南側に柳町遺跡が存在し、弥生時代から古墳時代及び古代にかけてが中心の遺跡であることが判明している。また両迫間日渡遺跡や柳町遺跡を包むように古代からの生産遺跡（水田跡）として玉名平野条里跡が広がっていると推定されている。

九州新幹線建設工事に伴い、約400m南東の玉名平野条里跡古墳前地区で、弥生時代後期の堅穴建物15軒、古墳時代の堅穴建物13軒やそれらに伴うであろう土坑が出土している。また、総柱の建物群も想定され、古墳時代から古代にかけて集落が存在していることが判明している。地形をみると、当遺跡は菊池川右岸の自然堤防と西側から伸びる丘陵に挟まれた中央部分にあたり、いわゆる低湿地にあたり、古くから菊池川水系の氾濫していた箇所である。古くから水抜きに苦労したことが伺え、現在も玉名山鹿線沿いに北東から南西に灌漑水路が流れおり、生産区域として重要な役割を果たしている。

生産区域を取り囲むように微高地には井戸等を持つ集落が点々と営まれたと考えられる。

すなわち、この区域は弥生時代から古墳時代及び古代の集落及び水田跡と推定され、集落と生産遺跡をセットとして考えられる遺跡である。九州新幹線玉名駅周辺整備事業に伴う玉名市教育委員会による埋蔵文化財発掘調査では、標高約3.7mで弥生時代中期以前にさかのぼる杭列が4群検出されている。方向等から大別して2列の杭列を検出している。杭列の木杭の放射性炭素年代測定(AMS法)などや本報告の成果も合わせると、弥生時代の後期以前のものと考えられる。注目されるのは、杭列内から刻目凸帯文土器が出土しており、どこまで水田遺構がさかのぼれるか注目される。

また、小田宮の前遺跡のボーリング調査の結果、菊池川の流路が東側に蛇行していることが推定される。小田宮の前遺跡も菊池川右岸の遺跡になり、一連の遺跡と考えられる。

小田宮の前遺跡では、古墳時代中期の水辺の祭祀と推定できる遺物群が出土している。鏡を模造した土製品や滑石製の有孔円盤や剣形石製品等が出土している。流路等から古墳時代前期にさかのぼる遺物も出土している。

当遺跡でも本調査区の150m西で古墳時代前期から中期の滑石製の有孔円盤や剣形石製品の祭祀遺物が出土している。土坑等に伴う祭祀遺構も検出されており、柳町遺跡にかけて

西側の微高地には集落も点在していたと考えられる。柳町遺跡では古墳時代前期の堅穴建物や井戸や土坑等が検出されている他、農耕具や鳥形木製品など多数の木製品が出土しており、水田耕作や集落に伴う祭祀等の一部が明らかになりつつある。

また、小田宮の前遺跡では縄文時代後・晩期では野蒜が炭化して土器に付着している状況が観察された。当遺跡周辺の県道玉名山鹿線の調査でも縄文時代晩期から弥生前期までの土器が集中して出土する地点もある。今回の調査の縄文土器の分布は調査区の北側を中心に分布しており、北側の微高地には縄文時代晩期から弥生時代前期にかけての集落が営まれていたと考えられる。

柳町遺跡でも縄文時代晩期の遺物が出土しており、菊池川の自然堤防上やそれから派生する微高地や丘陵から伸びる微高地等に縄文時代晩期から集落が営まれていたと考えられる。

古墳時代後期は当遺跡から北側の丘陵部に古墳が点在する。

6世紀前半から7世紀前半にかけて特に装飾古墳である大坊古墳や永安寺西古墳、永安寺東古墳等が分布する。その間の時期には馬出古墳や小路古墳等が分布し、周辺に有力な豪族が連絡と墓域を形成している。

また、7世紀代の堅穴建物や中世の掘立柱建物群が検出されている。

玉名平野条里跡では、奈良時代～中世と考えられる水田跡も検出されており、土地区画の変遷も注目されるところである。

### 第三章 調査の成果

#### 第1節 調査区の位置（図1・2・3）

九州新幹線路線内の現在の駅舎南側からほぼ直交する県道玉名山鹿線に接まれた路線部分（幅の狭いところで約8m）、駅舎南側の幅の広いところで約20m、長さ33mの調査区域である。

南東側が県道玉名山鹿線に伴う両迫間日渡遺跡県調査05-1区に隣接する区域で、あたり一面水田に囲まれており、北側が市道大坊両迫間線、東側が上述のとおり、県道玉名山鹿線（玉名平野幹線水路）、西側が中央水路、九州新幹線駅前周辺整備事業で玉名市教育委員会によって平成19年度調査を実施した調査II区から東へ50mの地点にある。

弥生時代から古墳時代にかけての住居跡が見つかり、古墳時代の塩を作った土器等が見つかり、注目された玉名市の玉名平野条里跡（古閑前地区）から北東へ300mほど離れた地点である。

#### 第2節 調査概要

今回は、主に弥生時代終末から古墳時代後半にかけての水田跡を検出した。

この遺跡の弥生時代の水田跡については県道玉名山鹿線改良工事（県文化課平成17年度調査）や九州新幹線新玉名駅周辺整備事業に伴う調査（平成19年度調査；玉名市文化財調査報告第19集2009）で見つかっており、その広がり及び時代ごとの区画のあり方を調べ、玉名平野の開発の歴史を解明することが求められていた。

今回の調査では熊本日日新聞で、「熊本最古の水田跡」として取り上げられる根拠になった水田に伴う大畦畔の続きを検出している。畦畔の時期は弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての時期であろうと現在のところ考えている。古墳時代初頭まで大畦畔に伴う区画は機能し、古墳時代後期には、西側の安定した区域を中心として水田は立地していると考えられる。

区画については、弥生時代終末から古墳時代初頭については、小区画水田で5～10m前後の区画と推定できる。

明確な水路や水口や排水口を検出できなかったが、簡易な敷粗朶技法を用いて畦畔の補強している様子や畦畔内に直交して杭列が並ぶ等の様子が観察できたことは意義深い。

ただ、玉名市教育委員会が杭列で畦畔を推定したように畦畔やそれに伴う構を検出するのは困難であった。畦畔自体は上層で水田の区画が変わると削平されたり、下層の畦畔跡に影響された擬似畦畔等の認定など難しい面が多くあった。さら

に、湧水時期のため、調査区に浸透する水を十分に断ち切れず土層の観察が難しかった。

玉名市教育委員会調査両迫間日渡跡遺跡Ⅰ区の標高3.7mで弥生時代中期以前の杭列を検出している。刻目凸帯文土器が検出されていることから下層にも水田面が存在した可能性が高いと推定できる。

また、水田面の広がりも本調査区の北西にも（もちろん南東にも）広がっていることが確認できた。

しかしながら、古墳時代中頃の祭祀遺構（ミニチュア土器や鏡や劍等の石製模造品の出土）が玉名市教育委員会の調査で検出されているが、その時期に対応する水田面は明確にできなかつた。

一方、丘陵上に位置する古墳に伴う古墳時代後期の水田面は検出できた。古墳時代の玉名平野の開発の一端を解明できた意義が多い。

県道玉名山鹿線改良工事に伴う埋蔵文化財調査の報告が後日なされ、周辺の開発の様子が分析されると考えられるが、縄文時代晚期から中世にいたるまで、重要な生産拠点や集落が営まれていたことが判明している。

周辺は九州新幹線の新玉名駅に伴い開発が進む可能性も高い。

縄文時代晚期から弥生時代前期にかけての頃より、開発事業とともに玉名平野の開発を支えてきた地域であるため、周辺の埋蔵文化財の分布を再考・検討し、町づくりに活かして欲しいと感じている。

### 第3節 基本土層（図6、Ph.1）

I層は現代耕作土でオリーブ黒色（5YR3/2）、IIa層は灰オリーブ（5Y4/1）細砂混シルト。若干斑駁が混じる。IIb層は灰色シルト、わずかに細砂（7.5Y2/1）最上部にマンガン斑、全体的に斑駁が著しい。しまり良。IIIa層は灰色シルト（5Y4/1）細砂及び粗砂混、上下の層に比較して暗色で砂質が強い。IIIb層は灰色細砂混シルト（7.5Y4/1）。粗砂が若干混じる。若干糸根状鉄あり。IV層との境は不明瞭なところがある。また、細砂が埋土となる踏み込みが点々と見られる。IV層は灰色細砂混シルト（7.5Y5/1）。Va層は暗灰黄色シルト。全体に斑駁が著しい。上層よりシルト質が強い。Vb層はオリーブ黑色細砂混シルト。しまり良好。

I層は現代耕作土。II層は現代耕作土床土。III層は近世から近代の耕作土及び床土、近世後期以降の陶磁器を含む。IV層は近世の床土。木の葉猿や青銅製の煙管の吸い口等も出土している。V層は中世の耕作面及び床土と推定できる。瓦器

も出土。

Vla層は（淡）灰色シルト（10YR6/1）淡褐色細砂を含む。やや青みあり。Vlb層は灰色シルト（10YR5/1）。やや砂質が強い。Vlc層は灰色粘質土で砂粒を多く含む。マンガン、鉄分が多い。

この層までは一部県道玉名山鹿線道路改良工事に伴う両迫間日渡跡2005年Ⅰ区の調査結果や出土遺物を参照している。

Vlc層は古代の耕作面の可能性がある。

VIIa層は灰色粘質土（砂質土を顕著に含む）で、古墳時代後期の耕作面と考えられる。VIIb層は灰色粘土でシルト質だが粘性強い（砂質土を含む）。鉄分、マンガンを含む。古墳時代後期の床土もしくは耕作土と推定できる。VII層は灰色粘土（10YR4/1）砂質を部分的に含む。ややシルト質で鉄分、マンガンが多い。VII層下層はオリーブ黒色粘土で暗青灰色粘土混。古墳時代初頭の耕作面と推定できる。VIIb層はオリーブ黒色（5Y3/2）シルト質で粘性が強い。VIIb～IX層に伴う小畦畔より南側がやや砂混じりの土を含み、上下2層に分層できる。上層はところどころに鉄分を含む。しまりがなく粘性が強いシルト層。弥生時代終末の水田の耕作面と推定できる。下層は上層に比べ粘性が強く、鉄分がほとんど混じらない。細砂が斑に混じる。調査区の北側にいくほど層が安定し、調査区南側から2つ目の調査区の土層観察用アゼ（ベルト）付近（B12付近）でこの層が確認できなくなる。洪水堆積にともなう水田区画を表す層と考えられる。敷粗染技法に伴う畦畔の形成も砂層を含むことから、この土を含む土で行われたと推定できる。

IX層はオリーブ黒色（7.5Y3/1）粘土でややシルト質。上層部はシルト質が強く、下層部ほど粘性が強い。

上層では砂質が強いことから耕作面の可能性が高い。小畦畔もこの時期から存在していた可能性が高い。IX層上層は、部分的な調査にとどまったため、時期や区画に不明な点も多い。

夏の湧水期に重なったため調査区内に浸透する水を断ち切れなかったことから十分な分層ができなかったことも一因である。

X層はオリーブ黒色粘土（7.5Y3/1）、IX層より粘性が強く、やや暗い色調である。

X層は標高4.3mくらいと考えられる。玉名市教育委員会で平成19年に調査した調査Ⅰ区で弥生中期以前の杭列が標高3.7mで見つかっている。70cm以上高いことからさらに下層に、弥生後期以前の水田面が存在した可能性がある。

#### 第4節 繩文時代晩期から弥生時代早・前期の遺物

(図48～51)

**概要** VII層から遺物の出土量が増える。大畦畔周辺に多い。量的には北側に多いので、集落は調査地の北西側の微高地に存在すると推定される。

刻目凸帯文系の土器は宮地統一郎編年のIIb期を中心とするが、IIa期の粗製土器及び精製土器の浅鉢も出土している。

また、Ia・Ib期や天城～古閑式の黒色磨研土器後半の土器群も少量ながら出土している。

遺物包含層の時期的にはIX層上層が弥生時代後期から終末にかけての水田面と推定できるので、調査時はIX～X層を縄文時代の刻目凸帯文期にかけての時期の水田の可能性があるかもしれないと考えていたが、玉名市教育委員会調査I区の成果からして弥生時代中期から後期にかけての水田を想定するのが妥当なようである。

##### (1) 土器 (図48～51, Ph. 12～16)

**出土状況** 包含層VIIb層まで頗著に出土する。(図48～51)

畦畔周辺のグリッドから出土しており、VII層以下の耕作面などから畦畔を形成する際に上層に浮き上がっている可能性がある。遺物包含層VII層については、出土数が増えているが傾向は同じである。南北に若干分布が広がっている。VIIb・VIIc層については大畦畔の位置するグリッドのうちC11及びC12に分布が集中する。IX層も同様な分布をするが調査区の北東側に遺物の分布が集中する。

**土器** 図48のIはX層からの出土で黒色磨研土器様式の浅鉢である。口縁部に一条の沈線を持ち、全面を横方向の磨きを施した精製土器で古閑式併行期と推定できる。IX層上層からの出土であるが、図48の9も同様な黒色磨研土器様式の古閑式併行期と推定できる。図48の2・3・6・8・10は黒色磨研土器様式の黒川式の系統を汲む浅鉢で、口縁部刻目凸帯文土器様式の古段階にかけての浅鉢(精製土器)と考えられる。図48の4は横方向に磨いているもので細片のため器種認定が困難であるが、浅鉢の可能性がある。深鉢であれば、やや古い型式の可能性がある。(古閑式以前)

図48の7は黒川式の系譜を引くもので、刻目凸帯文に併行する可能性があると考えられる。図48の8・10・11・12は黒川式の浅鉢の系譜であり、刻目凸帯文土器様式に併行するかが問題である。

図48の16は深鉢で、胴部屈曲部に丁寧な横方向のミガキを施し、黒色磨研土器様式の古閑式に併行する時期以前と推定できる。

図48の17は、口縁部に条痕文を数条施す深鉢で黒色磨研土器様式の古閑式併行期と推定できる。また、図48の13は細片で詳細は不明であるが、黒色磨研土器様式の古閑式併行の底部円形のボウル形の浅鉢の可能性があると考える。

図49は刻目凸帯文土器を中心とした粗製土器である。指押さえで刻目凸帯を施しているのは図49の6でIX層からの出土である。

図49の13はIX層上層からの出土で刻目凸帯文が口唇部よりやや下がった位置に有り、ヘラ状工具で刻目を入れている。

図49のIはX層からの出土で、口唇部から若干下がった位置にヘラ状工具で刻目を施している。

図49の8・9は刻目凸帯が断面三角形状のやや突出するタイプで刻目もヘラ状工具の先端で施していると推定できる。夜臼IIa式併行期以降で板付I式併行期と推定できる。図49の7は口唇部が屈曲して先端部にヘラ状工具で刻目を入れている。夜臼IIb式以降板付I式併行期と推定できる。図49の6・14は口縁部上部に凸帯を貼付けているもので、夜臼IIa式併行期と推定できる。

図49の3・4は深鉢の底部で、図49の3は外面に粘土貼付けて踏ん張った形状(円盤形)であり、黒色磨研土器様式黒川式から刻目凸帯文土器様式夜臼式併行期と推定できる。図49の4はやや上げ底の形状を呈する可能性があることから黒色磨研土器様式古閑式以前にさかのぼる可能性がある。図49の10・11は刻目凸帯文の胴部片でヘラ状工具による調整である。夜臼IIa式以降の型式と推定できる。

以上図化した図48・49の遺物は遺物包含層IX層からX層にかけて出土しているものである。VIIb層に本来属する層からもIX層として取り上げている遺物も若干あると思われるが、黒色磨研土器様式古閑式から黒川式、刻目凸帯文土器様式夜臼式、また弥生前期土器である板付I式まで型式差が存在する。

図50はVIIb層・VIIc層・VII層下層・VIIb層出土の刻目凸帯土器型式を中心とする粗製土器である。図50の1・2・12・15は指による刻目を有する刻目凸帯文土器である。口唇部からやや下がった状況で凸帯を貼付けている。図50の7はヘラ状工具による口唇部の上方に刻目を持つもので、凸帯部分が低く小さい。胴部のうち、図50の3・4・5・6・9・10はヘラ状工具による刻目凸帯を持つもので、3・6は条痕調整が頗著に残存する。胴部に刻目凸帯を有する図50の4と図49の8とは刻目凸帯部分の調整・文様の類似により一連の遺物の可能性がある。

図51はVIIb層・VIIc層・VII層下層・VII層・VIIb層他出土の黒

色磨研土器様式及び刻目凸帯土器型式の精製土器である。

図 51 の 1・2 は口縁端部が肥厚して厚い黒川式の系統を引く浅鉢である。大きさの復元はできないが、かなり小型の製品である。図 51 の 3 は波状口縁の深鉢であるが、細片のため詳細は不明である。図 51 の 4・5・14 は壺形土器の口縁と推定できる。刻目凸帯文土器様式の夜臼式段階になって顕著に現れる器形である。図 51 の 6・8 は黒色磨研土器様式の深鉢で古関式以前までさかのぼる可能性がある。図 51 の 8 は横方向に丁寧なヘラミガキを施し、口縁端部を丁寧に調整しているものの、丸みがなくなっている。刻目凸帯文土器様式夜臼式でも新段階の浅鉢と推定できる。図 51 の 9 は 8 と類似するが口縁部の屈曲が図 51 の 8 より緩やかで内面を条痕で調整したままであることから省略化が見られる。図 51 の 12 は口縁端部が若干肥厚する浅鉢である。夜臼式古段階(刻目凸帯文土器様式)かそれ以前と推定できる。図 51 の 13 は口縁部に明瞭な沈線を持つもので、口縁部から胴部までの屈曲も顕著であり、黒色磨研土器様式の天城式くらいまでさかのぼる可能性がある。図 51 の 16 も胴部に沈線が残存し丁寧に作られたもので、地域にはよろしくと思われるが古関式古段階以前までさかのぼると考えられよう。図 51 の 18 は浅鉢で図 51 の 8 が退化したものとも考えられる。

参考文献 小林 達雄編『総覧 繩文土器』2008

## (2) 石器 (図 43 ~ 45, Ph. 10・11)

石器は繩文時代から弥生時代にかけてのものと推定できるが、弥生時代後期と推定できるもの以外はここで紹介する。

図 43 の 1~3 は打製石鏃である。図 43 の 1 は遺物包含層Ⅷb 層出土で挟りがある。調整は刃部周辺のみ細かい剥離を施す。刃部は先端部と基部よりの側面とを両面交替交替に最終剥離を施す。主要剥離面の左側面を中心に押圧剥離を施していると考えられる。基部を最後に調整している。図 43 の 2 は三角形を呈する鏃である。最終的には片面から剥離を入れて刃部を最終調整している。図 43 の 3 は刃部の剥離が大きい。主要剥離面の片方から刃部を主に加工している。安山岩製の三角形を呈する鏃である。先端部が欠損する。現存している刃部の部分の剥離は両面の左側面を最終調整している。基部は片面から最終調整を行っていると見られる。

図 44 はスクリーバー及び使用痕剥片である。図 44 の 1 はⅧb 層からの出土である。剥片の側縁に使用痕を持つ。上部を簡単に刃つぶしの調整を行っている。図 44 の 2 はⅧb 層からの出土である。剥片の一側縁及び端部に使用痕を持つ。図 44 の 3 はⅧb 層からの出土である。剥片の一側縁に刃部を形

成しているスクリーバーである。図 44 の 4 はⅧc 層下層からの出土である。剥片の一側縁に刃部を形成している。端部に剥離を持ち刃つぶしの可能性がある。図 44 の 5 はⅧc 層上面からの出土である。剥片の端部及び右側縁を片側から細かく刃部調整を行っている。上部には縫面が若干残存するが、つまみ状になる。小形製品だが、片刃の石匙の形態を呈する。

図 45 はⅨ 層から出土の石核である。図 45 の 1 は、打面を転移した後、細かい剥離を行っている。図 46 の 1 はⅨ 層上面出土の安山岩製の石核である。打面を転移しながら、剥離を行っている様子が伺える。最終剥離は縦方向の細かい剥離を行っている。図 46 の 2 はⅧc 下層出土の黒曜石の石核で、打面を転移しながら剥離を行っている。最終剥離は連続的に縦長の剥片を探っている痕跡が残存する。

図 47 は各層出土の剥片である。図 47 の 1~3 は使用痕等が顕著に残存するものである。いずれも縦長剥片の側縁部に残存する。一部欠損も含まれていると思われるが明確でない。図 47 の 1・3 は両側縁に、図 47 の 2 は一側縁に使用痕が残存する。

図 47 の 4 はⅨ 層出土の黒曜石の縦長剥片である。図 47 の 5・6・7 は安山岩製の縦長剥片である。図 47 の 6 は端部及び側縁下部が刃部として使用された可能性がある。

**小結** 繩文土器については、大きく分けて 3 型式に分けられる。まずは黒色磨研土器様式古関式以前である。口縁部に沈線を持つ浅鉢(図 48 の 1、図 51 の 11・13)や口縁部に条痕文を施すもの(図 48 の 17 等)や、黒色磨研土器様式の胴部(図 48 の 16、図 51 の 16 等)が出土している。2 型式目は、黒色磨研土器様式の黒川式の系統を引くものである。図 48 の 2・4・6 等である。またその他の型式は刻目凸帯文土器様式併行期と考えられる。刻目凸帯文土器様式も宮地總一郎編年の IIb 期を中心とするが、IIa 期の粗製土器及び精製土器の浅鉢も出土している。また、Ia・Ib 期も出土している。

## 第 5 節 弥生時代後期から古墳時代初頭の遺構

### 概要

Ⅷb 層の時期がメルクマールになる。水田遺構は顕著に砂の層が見られ、大畦畔の粗粒の上には、Ⅷc 層上下層を分離する砂の層に対応する可能性が高い砂層が含まれることから、水田の面が押さえられる。水田面の耕作面にはⅧb 層を耕作面とする層の下には、Ⅸ 層上層を耕作面とする水田面が広がっている。基本的に土器や石器等を伴う遺構ではないが、流れ込みの遺物や上下の層の遺物の出土状況等から考えて弥

生時代後期～終末にかけての時期と推定できる。この層より上層は少なくともⅧ層までは大畦畔は機能していたと考えられる。

#### (1) 遺物包含層Ⅷ層検出遺構

##### ア 概要

(図5～8・43・48・49・52、Ph. 6・13・14)

Ⅷb層に明確に畦畔が形成される以前のものである。大畦畔部分は調査区南西部部分のⅧb層の段階で造成をおこなっており、IX段階の構造は不明であるが、IX層上層に砂質土が混じると認識できる箇所が存在するため、この層を耕作層と認定して良いと考えられる。

A0-A2'の土層断面観察によると、北東分が10cm下がっており、ややU字状を呈する。(図6)

区画については、Ⅷb層まで踏襲している可能性が高いが、調査区の南側でⅧb層の大畦畔から北に3.5～4m離れた位置で畦畔を検出した。それらしい畦畔を検出できたのは、調査区の南東部と北西部のみで中央の区画を検出できなかつた。そのため、区画の詳細をつかむに至らなかつたが、3.5mから10mの不定区画水田を推定したい。(図5)

##### イ 畦畔(図5～10)

検出した畦畔は蛇行しており軸は明確でないが、一番南側で検出したものは座標北より約50°程西に振れています。断面観察によると基底部の幅は80cmと広いが、断面観察によると明確ではないが、Ⅷb層の耕作面の段階で削平されており、その際に広くなつたと考えられる。そのため、幅50cm程の規模の畦畔と推定したい。検出できたのは約12m、その先は17m離れて約7mであり、半分の長さしか検出できていない。北側で検出した畦畔は調査区の北西から3m離れた箇所で途切れた状況で検出されており、水口の可能性があろう。

また、耕作面を区画するその畦畔については、調査区の南東部分はⅧb層の段階で大畦畔に敷粗粒技法が取られており、軟弱地盤である。このIX段階でも、断面B0-B1の断面図によると北東側から南西側(南側)に向かって10cm程耕作面が下がっていることが観察できる。同様に軟弱な土壌であったと推定できる。(図7)

さらに、断面観察によると位置的にはこの畦畔に併行している畦畔についてはⅧb層段階の大畦畔の下層にはほぼ想定できると考えられ、平面の位置図には畦畔推定線を復元的に入れてある。

ただ、A0-A2'の土層断面観察によると、IX層上層の耕作面

が大畦畔下層と南側の北東部分が10cm下がつておらず、ややU字状を呈する。耕作面の時期もあろうが、最終的には溝の役割を兼ねる氾濫を想定する区域になった可能性もある。(図6)

もし、復元が正しければ南側のグライ化した土壤に行くに従い、その区画の面積が小さくなる。

併行する畦畔と推定するのが、Z14、Z15、A15で検出してある。蛇行して検出できたが、断面で確認できたのは、断面D0-D1である。高さ7cmで畦畔上部がややM字を呈する。

また、平面検出した畦の高まりに対して断面Q-Q'にもわずかに痕跡が認められる。(図9) Q-Q'にかかる畦畔はD0-G-G'方向に設定した調査用土層観察用の中に続いていることも想定できる。(図8・9)

##### ウ 溝(図9・10)

IX層段階でも大畦畔の両側に排水や取水の溝があった可能性があるが、平面的には明確に検出できなかつた。

ただ、L-L'の断面を観察すると大畦畔の北側及び南側が溝状になり杭が打たれた部分や横木が倒れている状況が伺える。(図10) K-K'、J-J'も溝状の痕跡があつた可能性がある断面である。(図9) こうした箇所はIX層耕作面の段階でも溝状に機能していたと推定したい。

##### エ 遺物出土状況(図43・52、Ph.10・21)

遺物の取り上げの際、大畦畔の粗粒内の下層及びIX層上層のグライ化した土壤の部分をIX層として取り上げた部分もあり、また、混入品もあると考えられる。

**土器** 図52の1・2・3はIX層出土である。1は長頸壺の口縁部と考えられ、図52の4のような壺の一部と推定できる。図52の2は甕の口縁でタテハケ目の中丁寧にナデている。図52の3は脚部で小形甕や鉢等の底部である。内面も丁寧にナデしている。細片で不明であるが、他の層等の土器も勘案して考えると弥生時代後期後半と推定できる。ただ弥生土器は畦畔部分を中心に10点数しか出土していない。

土師器については6点程出土しているが、少数であり、図化できるものがない。

**石器** 図43の4は石製穂摘具である。孔間距離約3cm、刃部幅1.5～3.5mmで片方の刃部幅が狭い。孔背間距離は約0.7cm、孔径は3.5mmである。研磨は横方向に施した後、縱方向に刃部方向は特に丁寧に背部も丁寧に研磨している。杏仁形である。弥生時代後期であろうが、孔間距離が長く孔の穿孔する範囲も広く、やや古い形態である。

## オ 小結

残念ながら、還元された（グライ化）土壤での検出である点や調査時間が不足しており、VIIb層検出大畦畔を十分解体しながら下層を調査できず、調査用畦も除去できなかった。

さらに、畦畔方向の推定への認識が調査中に不足していたため、十分に区画をつかめなかつたのが実状である。

工業善通式の水田立地の分類によるとB類に位置づけられる。現況の地形から比較的高低差の少ない冲積地で水田を小さく区切る必要がなく見えるが、周辺の調査によると微地形で谷や微高地が存在し、微高地の縁辺から低湿地にかけての緩やかな傾斜地を利用したものと推定できる。そのため、小さな区画が必要な区域であったと考えられる。

IX層出土の遺物に土師器が含まれるが、上層取り上げの遺物と接合する細片が多い。混入遺物と考える。VIIb層の出土遺物に接合して復元できているものが多い。VIIb層で復元できる土器が図52の4、図53の1等であり、大きめの破片で復元できそうなものが図53の2・3であることを考えると、この時期の耕作面を弥生後期後半から終末〔畿内第VI様式（庄内式）併行期〕と考えられる。図52の4・5を見ると弥生後期中葉以降、図53の1・3の土器を見ると、弥生後期終末と考へて良いと思われる。推測の域を超えないが、IX層耕作面は、弥生後期中葉併行期以前の可能性がある。玉名市教育委員会の調査等からIX層もしくはX層が耕作面だとすれば、弥生中期までさかのぼる可能性を提起しておきたい。

## （2）遺物包含層VIIb層検出遺構

### ア 概要（図11～13・21～24・52・53、Ph. 1～5）

大畦畔を確実に伴う時期の耕作面である。区画としては、IX層の区画をほぼ踏襲していると推定できる。

VIIb層と認定している層位は南東側に一部に存在する。

畦畔の上部は敷粗杂技法と言われる枝や木材を畦畔の軟弱な部分に敷いて土が沈んでぬかるんで歩けなくなるのを防ぎ、通行できるように工夫されている。また畦畔を補強するように両脇に杭を打ち、補強している構造が見られた。

### イ 畦畔（図11～14・22、Ph. 1～5）

VIIb層及びVIIIc層と認定している層位は南東側に一部存在する。

VIIIc層はVIIb層に含まれるが、特に顕著に砂の層が含まれる層位に調査時に付けたが、断面A0-A2'、E-E'の間に一部存在する層である。同様な層は大畦畔周辺にも存在し、畦畔粗杂技内のVIIb'やVIIb''等の層が対応する可能性がある。（図14）

VIIb層は大畦畔に直交している畦畔まで存在し、断面で言うとT-T'やH-H'付近までである。

畦畔の形態は、幅90～100cm程であり、台形状を呈する。畦畔を形成している土はVIIb'・VIIb''・VIIb'''層等であり、その都度補強されていると推定できる。畦畔の中央は10cm以上くぼんでいるところがある。その部分には、大きい物で50～80cmの長さの木（枝）や杭等が土とともに積み重ねられている。それが約6mの長さにわたり続く。畦畔に平行や直交して積み重ねられていると言うより、土とともに斜交して、不規則に積み重ねられている。整然としているとは言いがたい状況である。杭材も若干含まれるが、杭の転用材というよりは、自然の木を利用していると考えられる。20cm未満の枝状のものも多数出土している。

大畦畔に平行と言うより併行している畦畔を検出している。当初IX層の耕作面の畦畔を検出したと考えたが、断面状況から見るとVIIb層の耕作面の段階まで機能していたと考えられる。

その構造は、断面台形状であるがVIIb層の耕作段階ではA0-A2'等の断面で平坦部は20～30cm程度のものと推定できる。（図12）

## ウ 溝（図14）

畦畔に伴う確実な水路の溝等は検出していない。しかしながら、L-L'の断面や畦畔南西側の木の出土状況を観察すると、幅1m、深さ15cmの溝を想定して良いと思われる。

ただし、IX層上層の断面で指摘したように併行している小畦畔との間は、いわゆるある時期に溝のような役割をしていた可能性があるため、整然とした列状に杭が検出されなかつたと考えられる。また、L-L'の杭は長さ約30cm、径は約5cmであり、枝状の柵を軽く止める程度のもので上部に砂状の堆積が多く、残存状況が悪かった可能性がある。

## エ 遺物出土状況

### （図11～14・21・22・52・53、Ph. 2～5・16～18・20・21）

水田面に伴う遺物は出土していないが、大畦畔の粗杂菜や周辺から大きな破片で復元できるものが数点ある。（図22）

全体的な個数を見ても大畦畔の所属するグリッドに遺物が多い。弥生土器が一番多く、内面にケズリを持つ薄手の土器（弥生終末から古墳時代初頭の甕類）はほとんど大畦畔周辺のみと言って良い。確実に弥生土器と言える土器は少ない。

粗杂菜内を完掘したとは言えないが、断定できないが、VIIb層及びVIIIc層は砂を含み、洪水等で流された土に混じり畦

畔周辺で止まり、割れた可能性も想定したい。畦畔に伴う祭祀の可能性も想定できなくなのが、状況からは前者の可能性が高く、厳密な年代を推定する資料ではないと考える。

また、縄文土器も出土している。畦畔周辺に多いのは他の時期の土器と同様の出土状況である。

**土器** 図 52 の 4 は VIIb 層・VIIc 層・IX 層の土器が接合されている。口縁部から胴部の上半部、胴部下半から底部が接合できるが、胴部上半から下半部で接点がなく器形を考え実測図上で復元した。口唇部に櫛歯刺突文と胴部と頸部の境に列点文を施している。調整は外面胴部上半にハケ目が残存するが、その後ナデ調整をおこなっており、丁寧なつくりである。底部も平底が若干残存する。図 52 の 5 は同じく口唇部に櫛歯刺突文を施し、頸部に刻目凸帯をめぐらせており、頸は長くはない。器形は壺である。他地域の影響を受けている可能性がある。図 52 の 6・7 は櫛描波状文で長頸壺の頸部のやや下がった箇所と推定できる。

図 52 の 8・9 は甕の口唇部に面を持つもので弥生後期と推定できる。図 52 の 9 はタテ方向のハケ目が残存しており、調整の省略化が見られる。図 52 の 10・11 は外面にタタキが残存しているが、タテ方向のハケ目で一部調整している。図 52 の 13・14 は弥生土器の甕の底部である。図 52 の 15 は小形器種の底部である。土師器の可能性もある。細片で特定できない。

図 53 の 1 は口縁端部が丸く、外面及び内面の胴部下半がヘラ削り調整である。底部は尖底である。口縁部の形態は面を持つタイプであるが、熊本県上益城郡益城町の古閑南遺跡等と共通点がある。図 53 の 2 は甕で口縁部は沈線状のものを持ち外反し、胴部外面はハケ目調整を丁寧に消している卵形の上器である。図 53 の 3 は甕で口縁端部がやや丸みを持ち外反し、頸部にまで右上がり方向のタタキを残す。内面下半部には左上がり方向のケズリを残す。上半部はナデ消している。胴部下半部が欠損して不明であるが、卵形を呈すると考えられる。図 53 の 4 は甕で口縁部がやや外反しながら端部付近で上方にややつまみ上げ、丸めの端部を持つ。図 53 の 5 は 2 と同様には頸部付近までケズリを残す。図 53 の 6 は尖底と考えられ、内面に指頭圧痕が残存する。長卵形の壺形土器と推定できる。内外面に右上がり方向のハケ目を残す。

#### 才 小結（図 53, Ph.18）

VIIb 層は洪水で流れてきた砂を含む層であり、この層の存在する時期だけでなく、北西部の IX 層の耕作面の新しい段階と同時期の可能性もある。

時期的には遺物出土状況で述べたとおり、年代の推定は土器からは難しいが、VIIb 層に含まれる細片や復元できる遺物から弥生終末からいわゆる古式土師器の時期までの間を想定したい。なお、型式学的には、図 53 が野田編年で言う古閑期（図 53 の 6 は前段階に含めて良い）から山下期併行期と考えられる。図 52 はいわゆる弥生後期後半（うてな遺跡段階）と考えられるが、その段階までさかのぼる可能性も否定できない。

なお、木杭の年代測定も現段階では弥生終末から弥生後期と推定できる年代を得ている。ただし、悉皆調査した訳ではないので、年代の誤差があり、木杭を加工する木の供給先も問題となろう。

#### 第 6 節 古墳時代時代初頭の遺構

**概要** VIIb 層で作られた大畦畔を踏襲しながら直交する区画等を若干変えながら 2 面の耕作面を認識できると想定できる。

VIIb 層の耕作面から、古墳時代後期の遺物も若干見られるが、混入と考えられる。溝等は明確に認識できていない。

##### (1) 遺物包含層 VIIb 層下層検出遺構

###### ア 概要（図 14 ~ 21, Ph.2 ~ 6）

VIIb 層の大畦畔を踏襲し、7 ~ 10m を最小単位とする区画を持つ耕作面と推定される。溝や水口の状況を確定するには至らなかった。

###### イ 畦畔（図 14 ~ 21, Ph.2 ~ 6）

大畦畔を踏襲する時期のものと考えられる。T-T'、L-L' の断面を観察すると耕作により VIIb 層下層の畦畔の幅が 60 cm と狭くなっている。VIIb 層の耕作の段階で畦畔が削平されており明確ではないが、大畦畔で検出した杭列のうちいくつかはこの段階で打ち込まれた可能性が高い。図 22 の VIIb 層下層段階杭列の平面分布や L-L' の断面等から真ん中内側と外側の間の深さの浅い杭等が該当する可能性がある。杭列の悉皆調査をできていないため詳細は不明であるが、推定の杭列を図示している。（図 22）

この段階では明確に北西方向の比較的安定して検出した段階でグライ化していない層まで区画が続く。

VIIb 層を少し削った段階で検出した畦畔がこの段階まで継続すると推定していたが検出した杭列の状況や H-H' や C-C' や K-K'、J-J' の断面等から VIIb 層段階と重なる部分はあるものの VIIb 層段階の畦畔よりも若干北西方向にずれた状況が推定

できる。

VIIb層が分布する区域やR-R' やS-S' ではVII層を上下2層に分層でき畦畔らしい高まりを検出したが、他の調査用ベルトでは必ずしも分層できていない。K-K' の断面やJ-J' の断面を観察すると畦畔状の高まりを近接して観察できることから、Y15・Z14・A13などに位置する畦畔を復元した。

#### ウ 溝（図19・20）

T-T' やL-L' やE-E' の断面を観察しても大畦畔周辺には明確な構は検出できない。上層の耕作段階でならされた可能性もある。

#### エ 遺物出土状況（図54、Ph.19）

畦畔の出土している地点に弥生土器、土師器、繩文土器等共通して多い。量的には土師器、そして弥生土器である。

一番多いのはC11グリッドの古墳時代初頭の土師器の出土である。

前述のように耕作面に伴う遺物はない。耕作によりそれより前に流れ込んだ土器を畦畔に投げ上げたりしていると考えられる。

**土器** 細片のため、口縁部も詳細不明である。ただ参考になるのは、図54の1である。口縁部がつまみ上げられ、端部が内傾し丸くなっていることから、VIIb層段階よりやや時期を下って良いと考えられる。

#### オ 小結

先に7~10mの最小区画を持つ耕作面としたが、A12グリッドで検出された北西から南東に伸びる幅50cmの畦畔がこの段階に伴えば、4~5mの区画が最小単位になる可能性がある。畦畔や溝や水口等はVIIb層段階で耕作されており明確でないが、調査地全体の区画がぼんやりと判明できる。

時期については、耕作面に直接伴う土器はないもののその出土状況から古墳時代初頭に位置づけたい。

#### (2) 遺物包含層VII層検出造構

##### ア 概要（図24~30、Ph.7）

VIIb層の大畦畔を踏襲する区画を持つが、直交する区画は調査区の北西側に検出した程度である。杭列は伴う最終段階である。VIIb層の耕作面により畦畔は削平を受けている。

##### イ 畦畔（図24~30、Ph.7）

VIIb層の大畦畔を踏襲した最後の段階である。検出した畦

畔の平坦幅は南東部で80cm、A12付近では1m以上ある箇所も存在する。

A0-A2'、T-T' やL-L' の断面などからわずかに畦畔の痕跡を残す。

VIIb層・VIIb層段階の耕作により畦畔が明瞭でなくなったと推定できる。

VIIb層が分布する区域やR-R' やS-S' ではVII層を上下2層に分層でき、畦畔らしい高まりを検出したが、他の調査用ベルトでは必ずしも分層できていない。Y15・Z14・A13グリッドなど蛇行する畦畔を検出した。K-K' の断面やJ-J' の断面を観察するとわずかに畦畔状の高まりやくぼみを確認できる程度である。

また、Z13・14ではP-P' の断面で高まりを確認できる大畦畔に直交する畦畔を6mほど検出した。

また、調査区の北西部C0からC1の部分に大畦畔に直交する高まりや水口等の排水・給水の状況を示す施設の確定するには至らなかった。

#### ウ 溝（図25・26）

調査区の北西部C0からC1の部分に高まりを検出したが、B4・B5付近（W13・14グリッド）の断面やW14・X14付近で溝状のくぼみを検出した。直交する比較的大きな畦畔と排水の溝の可能性がある。

#### エ 遺物出土状況（図53・54、Ph.19）

大畦畔付近周辺が多いのは他の層と共通するところである。VII層下層と同様に土師器の出土量が一番多く、点数的には弥生土器の2倍以上である。やはり、多いのが敷粗朶技法で作られた畦畔周辺である。

**土器** VII層で図化できたのは、図54の3と5である。図54の3は弥生後期と推定できる甕の底部である。弥生の小形器種の底部とも考えられるが、図54の5は底部径9cmで厚みが2mmであることから土師器の小形器種の可能性がある。

また、図54の6は須恵器模倣杯（土師器）である。内外面に丁寧な横方向の静止ヘラミガキを施しており、黒色に塗られている。図54の7は須恵器杯蓋でありMT85型式期以前のものと考えられ、天井部と口縁部の境目に棱が残存する。

図54の8は須恵器杯身の口縁である。端部は丸く、沈線は消滅しており、器壁も3mmと薄い。傾きがもう少し立つ可能性があるがTK43型式期を中心とした時期であろう。図54の4は、頸部はやや厚めでVIIb層出土土師器より時期が下る様相であろう。

## オ 小結(図 54、Ph.19)

平面や断面を観察すると10m以上の最小区画を持つ耕作面の可能性があるが、特に南東側の大畦畔に直交する畦畔を検出できなかったため、比較的大きな区画の可能性もある。

この耕作面に直接伴う遺物はない。図 54 の 6・7 のような古墳時代後期の土器は出土しているが、VIIb 層からの出土量は少ない。畦畔が VIIc 層下層等から継承していることから考えて、これらの土器を混入品と考えて、VIIc 層下層から若干時期が上る、VIIb 層耕作面より 1~2 型式期下った古墳時代初頭の時期と考えたい。

## 第 7 節 古墳時代後期の遺構

**概要** VIIb 層で作成された大畦畔よりやや離れた区画で水田面が作成されている。やはり小区画水田と考えられる。畦畔を検出時に須恵器を検出しておらず、古墳時代後期の水田面と想定している。下層の水田面よりやや時期の差があると考えられる。

### (1) 遺物包含層 VIIb 層検出遺構

#### ア 概要(図 31~35、Ph.8・9)

南北から約 50~60° 西に振れた畦畔を持つ小区画水田と推定できる。一辺の区画は 4~10m と不定形である。

#### イ 畦畔(図 31~35、Ph.8・9)

大畦畔の VIIb 層が存在した範囲には明確な畦畔は検出できない。平面的に検出したのはその北西側で、ポイントで言うと B2 と D1 を結んだ線付近である。R-R' の断面からは畦畔は約 60 cm 幅である。F-F'、K-K' の断面からは高まりを 2 カ所観察できる。平面的に顕著に検出できたのは南側の方であり、A12・Z13 付近で蛇行している。北側で検出した高まりは、広い意味での VIIb 層の耕作面の畦畔か、または、畦畔に伴う溝による凹みと高まりか判断が難しい。

平面的には X14 や Y13 及び Z13 付近で畦畔を検出できなかつた部分もあり、畦畔を切る水口や排水があった可能性もある。

#### ウ 溝(図 32・35)

R-R' の断面からは畦畔の南東側に溝状のくぼみを観察できる。平面的には検出できなかつたが、さきに畦畔のところで触れたように北西から南東にかけての畦畔の北(東)側や北東から南西に伸びる畦畔の南(東)側に溝状構造を推定できなくもないが、平面的にうまく検出できなかつた。(C2-C3

の断面では凹みが検出される。)

## エ 遺物出土状況(図 54、Ph.9・19)

VII 層には C11 に須恵器及び須恵器模倣土師器が出土しているものを混入品と考えられた。しかしながら、この段階の耕作面には若干ではあるが、畦畔の上で検出した須恵器もある。(写真: Ph.9) 須恵器は北西側に 3 点検出している。

土師器については、北側に集中している。厚手の土師器は見当たらないが、古墳時代中期以前のものが大半と考えられ、前の耕作面に当たる時期の土師器が擾乱された状況の出土状況が推定される。

ただ、破片であるが、回転台土師器の杯のようなものも存在する。上層 VIIa 層からの混入と推定しておきたい。

弥生土器についても北側に数点出土がある。縄文土器は北西側に若干出土する程度である。

**土器** 図 54 の 10・21 は口縁端部をややつまみ上げるように内傾する。やや端部が内側に肥厚する甕の口縁である。図 54 の 11 も端部がやや狭くなりややつまみ上げ加減である。図 54 の 14 は胴部内面に横方向のヘラケズリが残るもので器壁が 4mm でやや厚めである。いずれも弥生終末から古墳時代初頭にかけての特徴である。

図 54 の 13・15 とも布留式新段階併行期以降と推定できる。図 54 の 13 は縪部がやや細まりながら大きく内傾する。割れ口から甕の口縁と推定できる。図 54 の 15 も土師器の甕の底部で内面に指痕圧痕が残る。底部付近の厚みが 1cm 以上ある。

図 54 の 17 は須恵器杯身の体部である。底部にヘラ記号を持つ。図 54 の 16 は土師器杯である。外面に横方向の静止ヘラケズリが残存する。口縁端部がやや内傾し、胴部が張っている。高さも 4cm 程度で浅い。

また、図 54 の 18 は細片で不明であるが、土師器の皿と考えられる。図 54 の 19 は赤褐色(2~3mm)の胎土が緻密な土師器である。回転ナデによる整形でいわゆる「回転台土師器」である。9 世紀代か。

## オ 小結(図 31~33・54、Ph.8・9・19)

北側の区画が明確には検出されていないが、西側の検出できた区画を見ると、整然とした区画ではなく、不定形の小区画の水田と考えられる。

時期的には耕作面に伴う遺物はないが、この段階で VIIb 層の大畦畔による区画が変わり、杭等を伴う畦畔がなくなること。細片ではあるが、土師器の比率が下層の遺物より高まる。

また、VII層に須恵器が混入し、この層でも須恵器が出土していることから、古墳時代初頭から若干時期が下る古墳時代後期（須恵器のTK43型式を中心とする時期）の耕作面と考えたい。

なお、図54の18・19は上層からの混入品と考えておきたい。

なお、調査区の南西部で畦畔を平面的に検出できていない。

A0-A2'断面及びB0-B1の断面等を観察するとB0-B1に北西から南東に向かって伸びる畦畔が重なっている可能性も考えられる。また、南西部のそれに直交する区画については、南西区域に設定した土層観察のためのベルトに一部重なるように存在した可能性も提起しておきたい。

## 第8節 古代以降

**概要** 県道王名山鹿線調査時の隣接地ではV層段階で水田面を検出し、現段階で中世の年代を推定している。その下層面も区画は明確ではないが、水田面である可能性があると推測される。

今回は、調査期間が短く、V層段階の区画を検出できなかつた。

Vlc層段階から人力掘削をしたため、その上層の区画は解明できなかつた。

Vla層段階で水田面と推定できる区画の一部を検出した。また、Vlc層より上層から掘り込まれた溝を検出した。

### (1) 遺物包含層Vla層検出遺構

#### ア 概要（図36～40・54、Ph.9・19）

Vlc層に荒い砂が顕著に混じるためその砂が混じる層を除去する際に溝状の遺構及び畦畔状の高まりを検出した。北西部しか検出できていない。10m以上の区画と一部5mの区画といった具合で上層の耕作により明確には検出できていな。小区画水田とは言える。

### イ 畦畔（図36～40、Ph.9）

B3-B4の断面を観察すると01-SDの北西側には溝状のくぼみを検出できる。幅約60cm程の台形状の断面である。畦畔と推定して良いと思われる。B2-B3の断面にはやや高まりがあり、高まりの上が耕作もしくは踏み込みの跡がある部分がある。

平面でA12・13からZ12にかけてのグリッドで畦畔（03-SX）を検出した。B2-B3の断面に畦畔の高まりや踏み込み（耕作等）がわずかに反映している。

また、C2-C5の断面観察で02-SDの北西側に畦畔を想定で

きる。

さらにG-G'、F-F'に囲まれた区域で畦畔を検出した。Vla層上層からしか土層断面が残存しない部分のため平面でしか確認できなかつた。

溝と畦畔が十分復元できないが、01-SDと03-SDの間が約10～12m、Z14グリッドで検出された小畦畔と02-SDとの距離が約5mで、区画は5～12mくらいの規格を持つ小区画水田と考えられる。

### ウ 溝（図36・38・40、Ph.9）

① 01-SD Vlc層は灰色粘質土で砂粒を多く含み、洪水による堆積と粘土質の土が混じる。これらの土を除去していると、特に砂混じりが多い溝状の遺構を検出した。

B3-B4の断面ではB4から約1.7～2.2mの間で落ち込み状に観察できる。白色の粗砂が多く混じっている。

② 02-SD C2-C5の断面を観察すると幅約40cm、深さ4cmのわずかな凹みと北西側にわずかな高まりを検出した。

### エ 遺物出土状況（図54・Ph.19）

Z14グリッドで須恵器を1点確認している。外面を格子目タタキ、内面を平行タタキで調整していることから見て古代の奈良～平安時代のものと推定できる。（図54の23）

古代の土器類のような破片も存在するが、明確でない。古墳時代の遺物が大半と思われる。

**土器** 図54の20は弥生土器窯の脚部で、内面も丁寧にナデている。図54の21は甕の口縁で、口縁部を若干つまみあげている。弥生終末から古墳時代初頭の特徴を持つ。図54の23は須恵器の甕の胴部で外面が格子目タタキのちハケ目、内面は横方向の平行タタキである。奈良～平安時代の須恵器の胴部と推定できる。

### オ 小結

5～12mの小区画水田であり、Vlb層からVII層までの区画やVIIb層の区画とは方向はほぼ同じであるが、小区画の位置はそれまでとは異なる。

また、耕作面の年代であるが、直接に伴う土器はないが、図54の23や、図54の19（Vlb層下層出土土器）等を参考にして平安時代前期（9世紀頃）と推定したい。

## (1) 遺物包含層Vlc層検出遺構

### ア 概要（図41・38・54、Ph.9）

Vlc層の上層まで重機で掘削したため、Vlc層より上層は明確でない。ただ、南東から北西方向の溝を検出した。

B2-B3 の土層断面で確認できる。幅40 cm、深さ5 cm程である。

### イ 畦畔

畦畔は確認できない。

### ウ 溝

幅40 cm、深さ5 cm程で、5mの間だけ平面的に検出できた。

### エ 遺物出土状況

ほとんど遺物は出土していないが、図54の24の須恵器杯身が出土している。

### オ 小結

この面に対応する遺物は出土していない。ただ、Vla層には図54の23のような古代の須恵器の甕が出土していることや、図54の18のような土師器皿がVlb層に混入している点から、中世まで下る可能性を示唆したい。

## 第V章 まとめ

### 第1節 弥生時代から古墳時代の水田区画について

#### (1) 区画について

後に触れるが、Vlb層（弥生時代終末から古墳時代初頭で検出した大畦畔を中心に区画されている。その区画はIX層検出水田遺構で触れたが、IX層までさかのぼる可能性がある。

IX層段階では10m程の小区画であるが、Vlb層段階では、北東から南西に向けての大畦畔と小畦畔が4~8m幅で離れながら2条に伸び、その間が15m以上離れた直交の小畦畔で区切られる構造である。

Vlb層下層段階では、水田区画が全面にいたる。ただ、Vlb層の分布する南東側は、北東から南西方向の区画が検出できず、4m幅程の細長い区画しか検出できなかった。Vlb層下層は8m程の小区画は検出できている。Vlb層段階では同じく調査区北西で10m程の区画を検出している。

この段階までは、検出した限りでは、8~10m程の区画をベースに半分の4m程の細長いスペースも存在する。小区画をベースにしたものと考えられる。軟弱である区画部分は若干広めの細長い区画を意識している可能性がある。

Vlb層の段階では大畦畔は北西部については南西側に、南東部分は北西側に畦畔がはずれてやや区画方向が変わる。下層の擬似畦畔の可能性があるが、おおむね、下層段階の耕作面を意識していることも考えられる。

#### (2) 大畦畔について

区画の開始期はIX層段階であろうが、大規模な畦畔を造成しているのはVlb層の段階である。畦畔の両脇に杭を打ち、特に杭の上がぬかるんで沈む部分に、木の枝や細い木や木材等をクロス状に敷き詰めた簡易な敷粗朶技法とでも言えよう。

杭は自然面を1面持ち、断面が三角形（扇形）状を呈するもののほか、台形状や細い丸木を利用したものがある。

杭はやや幅等を変えながら、Vlb層段階からVlb層耕作面に相当する時期まで、杭を打った畦畔が利用されたと推定される。ただ杭の耐久年代を考えると露出していなかった可能性が高い。畦畔の南西方向に畦畔の端から70~80 cm離れ、もしくは溝の推定部分に0.8~1.1mの枝や木が出土している地点があることから、杭に横木を渡していて杭を補強していた可能性を考えたい。

#### (3) 水路や水口について

大畦畔部分のだめ押し調査が不備であったため、明確には

指摘できないが、X=6740m のラインと大畦畔が交わる付近、L-L'の付近に畦畔の真ん中に杭が見られる。一番北西側は敷粗朶技法に伴う杭の可能性があるが、手前の 2 本は畦畔に直交する水口等を補強するものであった可能性も考えられるのではないかと思われる。また、エ-エ'の断面を見ると粗朶の断面の下に 2 本の縱杭が見られる。(図 14) こうした杭は畦畔のただの補強と言うよりは、ある時期の水口等の痕跡と考えても良いのではないかと考えられる。ただし、だめ押し調査の不足は否めない。

#### (4) 杭列について

杭列はⅧb 層の段階からⅨ 層段階まで畦畔を補強していたと考えられる。杭列と層ごとの対応までの分析はいたっていない。畦畔に直交している断面を見ると、エ-エ' 及び L-L' のように内側の杭の長さ(深さ)が短い。(図 14)

タグ'、g-g' の杭の縱断面と平面の位置関係から見ると内側に並ぶ杭の長さが短い。(図 23)

これらは畦畔を耕作している内に畦畔の幅が若干短くなっているのではないかと推定できる。深い杭で標高約 3.8m まで打ち込まれているのに対し、浅いもので標高約 4.3m である。場所によって若干異なるが、Ⅷb 層の存在する地点では一般化できると推定できる。

また、北側で検出した杭は断面で見る限りは深さが標高約 4.3m ものも多い。Ⅷ 層～Ⅸ 層下段階に打ち込まれた可能性が高い。ただし、南東部分は軟弱なため、深い杭が打ち込まれた可能性もあり示唆にとどめたい。

杭の形状は小形の丸材の先端を尖らしたものもあるが、大半は木を薪のように割り、一辺は自然面で 2 片に切断面を持つものや、一辺は自然面で 3 片が切断面のものが一般的である。先端部は銳利に 2 面以上は加工している。統計的には表 3 を参照して頂きたい。熊本県報告第 218 集『柳町遺跡 II』で弥生時代中期として報告されている 6SX054 墓状構部材の杭は 4 類に分けられている。(1) 細い一本を利用し、下端は特に加工せず、伐採時のままのもの、(2) 半截丸材で下端は伐採時のままか、やや尖らせ気味にしたもの、(3) ミカン割り材を利用し、下端は伐採時のままで加工を特におこなっていないもの、(4) 板状に割ったミカン割り材を利用したものの、縱方向の下端を尖らせて打ち込みやすいように加工しているものなどである。

これらの分類に当てはめると今回出土の杭は大半が(4)に相当する。先の 6SX054 の調査者で報告者は、「下端は金属によるかと思われる加工がなされている」と記述している。

この遺構は後に補強されたりしたものがあったとして、今回報告する杭列の杭は大半が金属器で加工された可能性を持つ。すなわち、金属器の普及が不可欠であり、現在の熊本県玉名地域の金属器の出土状況等を勘案すれば、弥生時代後期後半までしかさかのぼらないのではないかと現在のところ推定したい。逆に言えば、弥生時代後期～古墳時代初頭にかけては熊本県の玉名平野では金属器の普及がかなり進んでいたと考えられよう。

#### (5) 検出遺構・遺物からみた集落の立地について

Ⅸ 層の耕作面がどこまでさかのぼれるか不明であるが、杭列を作っていないか、先の杭列の分類の(1)～(3)に属するものも少数あるので弥生時代後期後半以前にさかのぼる可能性もある。

玉名平野では九州新幹線玉名駅周辺整備事業に伴う調査Ⅲ区の調査で祭祀遺構として S-21 が報告されている。弥生時代終末から古墳時代にかけての遺物も混ざってはいるものの、中期後半と認定できる黒髮式土器の甕や壺が、土製勾玉や手づくね土器とともに出土している。

また同事業に伴う調査 I 区では、水田耕作に伴うであろう杭列が出土しており、杭列とともに板付式土器が出土している。杭列の放射性炭素年代測定では 1 世紀から 2 世紀であり、実年代は難しいが、弥生中期から後期にかけての年代であろう。

Ⅹ 層はそうした遺構に伴うかどうかの年代であろう。祭祀遺構が存在するため、集落は近くの微高地に存在すると推定できる。玉名平野条里跡古墳前地区的堅穴建物も後期後半であり関連遺跡と考えられる。

Ⅷb 層に伴う集落としては、柳町遺跡や玉名平野条里跡の微高地に存在する堅穴建物や井戸等が時期的には合う。周辺は微高地や谷や沼地等複雑にからみ合って地形を形成している。集落はすぐ近くに存在したと考えられる。

同じく、Ⅷ 層下層やⅨ 層段階では、同じく柳町遺跡や両追間日渡遺跡調査Ⅲ区の祭祀遺構 S-14 や S-18 や S-01 段階まで対応する可能性があり、関連が見られる。

出土した遺物の分布をみると、Ⅷb 層からⅨ 層では明らかに北側に分布が偏在する。全体的な地形の高低差ではあるが、北側に集落の存在を想定できる。

### 第 2 節 古墳時代後期の水田区画について

#### (1) 区画について

Ⅷb 層で形成された大畦畔が耕作により削平され、新たに

区画が作られる。ただし、南東部分は明確でない。

しかしながら、前代の区画の方向は若干西に振れる程度で、特に南側で検出された畦畔についてはIX層以来の区画をほぼ踏襲していると考えられる。

また、南東部分は明確でないが、A0-A2'、B0-B1、D3'-D3''の断面から南東方向にも畦畔が伸びている可能性が高い。

こうした点から、古墳時代初頭から後期までの間も層的には認識できないが、周辺を含めて継続的に水田が行われた可能性がある。

また、X14 グリッド、Z13 グリッドでは南西方向から北東方向の畦畔の一部が途切れた状況で平面的に検出されている。水口等の可能性も考えたい。

## (2) 検出遺構からみた集落及び墓の立地について

VIIb層は柳町遺跡 II で報告された 4SX038、九州新幹線玉名駅周辺整備事業に伴う両追間日渡遺跡 II 区、III 区では遺物包含層中から 6 世後半から 7 世紀にかけての遺物が出土している。また、1.5 km 以上北東の上小田宮の前遺跡でも、流路や遺物包含層から 6 世紀から 7 世紀にかけての遺物が見られる。

小岱山系の南の裾に 6 世紀前半から終末にかけての古墳が点在する。小路古墳、馬出古墳、永安路寺東古墳、永安寺西古墳、大坊古墳等が存在する。また同箱式石棺墓群や富尾には横穴群も存在する。また、玉名市教育委員会が作成した地図には、詳細が不明な古墳等が数多く分布している。こうした墓に眠っている人たちが営んでいた水田が周辺に広がっており、今回その一部を検出したと考えられる。

## 第3節 古代の水田面について

古代の土器は少数しか出土していない。VIIa層を古代の水田耕作面と推定したが、水田面に伴う遺物はなく、今後の周辺の調査や報告等類例を待ちたい。しかしながら、VIc層検出の構や上層の遺物包含層の状況から、大きく区画の方向が古代に変わっているという状況は伺えなかった。

この区域は玉名平野条里跡に想定されているが、現区画の地割りは少なくとも中世以降のある段階以降から作られた区画と考えられないかと想定している。

## 第4節 繩文時代晚期から弥生時代早期について

この時期の水田遺構は熊本では発見されていない。九州新幹線新玉名駅周辺整備事業に伴う両追間日渡遺跡 I 区で弥生中期をさかのぼると見られる杭列が出土している。杭列周辺で板付式土器も出土している。

縩文晚期から弥生早期についての小結（第III章第4節）で触れたように縩文晚期の黒色土器様式古闕式の段階・黒川式の段階等が特に IX 層以下の層で混じる割合が増えている。

目立つのは刻目凸帯文土器段階である。

刻目凸帯文様式の土器資料は、玉名地域では柳町遺跡群等で遺物包含層や杭列とともに出土しているが、様式を設定するには至っていない。熊本市江津湖遺跡群等比較的良好な遺跡はあるが、墓域であるため、精製土器と粗製土器との対応が難しい。

型式的に見れば、今回の調査では、①刻目凸帯文が指で調整し、口縁端部よりやや下に刻目凸帯文を付けているもの（図 50 の 2・15、図 49 の 5 等）②口縁端部やや下にヘラ状工具による刻目を施しているもの、③口縁端部とほぼ同じ面であり突出しない刻目凸帯を持つもの、④口縁端部とほぼ同じ面で 7 mm 以上突出したヘラ先等で刻目を施した凸帯文をもつもの（図 49 の 8）⑤屈曲して外反する口縁端部に刻目を持つもの（図 49 の 7）等に分けられる。

型式的に刻目凸帯文が口縁端部に組込まれ文様化する方向へ変化するとすれば、①から⑤に向かって新しくなる傾向が指摘できよう。今回調査で量的に多いのは、②、③であり、刻目凸帯文土器の夜臼式に相当する時期と考えられる。対応する精製土器は難しいが、図 51 の 4・5、図 48 の 15 等の壺形土器と思われるものの口縁、図 48 の 11・12・2・3・6 や図 51 の 8 などの浅鉢や黒川式土器の系統を引く土器群等が対応する可能性がある。

また、⑤に対応する土器は、1 点であるが、IX 層出土土器である。IX 層上層を弥生後期以前で中期を見据えるならその下層かほぼ同じ面に杭を作わない畦畔による水田耕作面を仮定できたのではないかと考えている。そのため、縩文土器のレイアウトを IX 層・X 層に分けてレイアウトしている。

それ以前の黒色磨研土器様式は IX 層以下の下層を面的に調査していないし、土層がかなりグライ化しているため、検出がさらに難しい。土器の出土地点を見てみると北側に多く、その方向に集落があった可能性も考えられる。そうすると隣接する谷地形を利用した生業を想定すべきで今後の課題であろう。

## 第5節 課題

九州新幹線新玉名駅周辺整備事業に伴う両追間日渡遺跡では、弥生時代中期にさかのぼる水田耕作に伴う施設（杭列）等が見つかっているが、今回はそれに次ぐ弥生時代終末から古墳時代初頭の時期の水田に伴う畦畔等の区画を検出した。

柳町遺跡やそれに隣接する集落の生産遺跡の可能性がある。大畦畔のみでなく、完全な形では検出できていないが、工業善通氏の分類で言えば、B類の「微高地の縁辺部から低湿地にかけての緩やかな傾斜地を利用したるもの、傾斜の度合いに応じて大小に区画され、その形は等高線に左右されて不定形になる事が多い。」に当たると考えられる。一見、A類の「高低差の少ない沖積地や扇状地に位置するもの、水田を小さく区切ることをしないもの、かなり大きな区画であることを特徴とする。」にも当てはまる地形ではあるが、県道玉名山鹿線改良工事や九州新幹線新玉名駅周辺整備事業の調査により、細かい谷等が入っている地形であり、微高地及び低地及び谷等が細かく入っていることが判明している。そのため、小区画の水田が一般化したのであろう。

今回畦畔部分の軟弱部分には木枝や木材（杭等）を斜交させ、砂や土を混ぜながら畦畔を形成していることが判明した。

畦畔のところで敷粗染技法と述べたものの、柳町遺跡で検出された1号大畦畔（奈良時代後半から平安時代前期）程整然としたものではない。土壤が不安定な部分に部分的に周辺にあった木材を使用して用いられた技法と考えられる。

また、VIIb層耕作面からVIIa層の耕作面までそれほど畦畔（区画）が変化しているわけではない結果となった。頭によぎるのは、検出された畦畔状の構造がわずかな高まりであり、上層や下層の影響によるいわゆる「擬似畦畔」の可能性がないとは言えない。周辺の調査や自然科学的分析等によってより良い検証方法を模索することも大切だと思われる。

今回植物珪酸体分析では、イネの植物珪酸体量が通常の水田面の量より少なかった。土壤の保全状況や環境変化によるものであろうが、今後の資料の積み重ねも待ちたい。

また、施設面では、水路や水口等の構造が解明するには至らなかった。断面で多少観察することができたり、木や杭の出土状況で推測できるものもあったが、今後の課題である。柳町遺跡IIで報告の6SX054堰状構造構造等のようなものが周辺で検出できるかどうか注意を要する。

また、敷粗染技法のようなものが、技術的に柳町遺跡I区の1号大畦畔の技術までどう発展したのか、古墳時代中期から後期・古代にかけての大畦畔の形成も条里制の区画がどこまでさかのぼれるかも課題である。

また、弥生中期及び前期にかけての水田耕作面の有無には課題が残った。グライ化した土層の調査方法にも工夫がいると思われる。

細かいところでは、弥生終末の土器の幅年が様式としてとらえられていないため、細かい時期区分ができなかつた。弥

生土器系の在地の土器と畿内系や北部九州系の土器との併行関係や土器の時期区分の細分化も必要であろう。こうしたこととで玉名平野における古墳時代の展開がどこから伝わりどう展開していくかを解き明かす大きな一步となろう。

#### （参考引用文献）

- ・荒木 隆宏編『両迫間日渡遺跡』  
玉名市文化財調査報告第19集 2009
- ・高谷 和生編『柳町遺跡I』  
熊本県文化財調査報告第200集 2001 熊本県教育委員会
- ・坂田 和弘『柳町遺跡II』  
熊本県文化財調査報告第218集 2004 熊本県教育委員会
- ・廣田 静学『上小田宮の前・養寺遺跡』  
熊本県文化財調査報告第255集 2010 熊本県教育委員会
- ・長谷部 善一『玉名平野条里跡（古闕前地区）』  
熊本県文化財調査報告第261集 2011 熊本県教育委員会
- ・別府大学考古学研究室『古保山・古闕・天城』1980
- ・熊本県文化財調査報告第47集 1980
- ・工業 善通『水田の考古学』1991
- ・春成 秀爾『弥生時代の始まり』1990
- ・小林 達雄編『絶賛 繩文土器』2008
- ・野田 拓治「古式土器の成立と展開」  
『森貞次郎博士古希記念古文化論集』1982

表 1 石器類別表

図面 番号	遺物 番号	遺物名	遺物種類	出土層位	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考		測定 番号	測定 番号	測定 番号	
											法量	法量				
43	1 C11	-	-	包埋層	石盤	黒曜石	2.05	1.55	0.30	0.6	S1	87	10	S2	34	10
43	2 C12	-	-	包埋b層	石盤	黒曜石	2.00	1.80	0.40	1.0	S16	113	10	S16	113	10
43	3 B14	杭周辺	-	包区層	石盤	安山岩	(1.60)	2.00	0.50	1.3	一部欠損			S8	-	10
43	4 Y15	杭周辺	-	包区層	石盤	黒泥片岩	12.00	5.10	0.50	53.3	孔径 3.5 mm	S8	-	S11	164	10
44	1 D11	杭周辺	-	包区層	石盤	黒泥片岩	2.30	2.25	0.70	1.8	S12	184	10	S12	184	10
44	2 B12	地中層シダ内	-	包埋b層	石盤	黒曜石	2.60	3.50	0.55	5.3	S11	164	10	S11	164	10
44	3 B12	地中層シダ内	-	包埋b層	石盤	黒曜石	3.10	2.30	0.55	3.6	S21	294	10	S21	294	10
44	4 Z15	-	-	包埋層下層	石盤	黒曜石	4.50~	3.75~	1.10~	11.6	S21	294	10	S21	294	10
44	5 A14	-	-	包埋層上面	石盤	黒曜石	1.60	1.15	0.20	0.5	S9	231	10	S9	231	10
44	6 A13	-	-	包埋b層	石盤	黒曜石	2.80	2.00	0.55	2.2	S10	251	10	S10	251	10
45	1 C14	杭列 S	-	包区層	石盤	黒曜石	1.60~	2.80~	0.20~	6.1	S20	-	11	S19	121	11
45	2 B13	-	-	包区層	石盤	黒曜石	2.50~	3.30	1.20	9.8	S13	204	11	S13	204	11
46	1 A15	-	-	包区層上面	石盤	安山岩	3.50	6.70	2.70	13.4	S22	69	11	S22	69	11
46	2 C11	-	-	包区層下層	石盤	黒曜石	2.30~	2.20	1.20	10.8	S7	35	11	S7	35	11
47	1 C12	-	-	包埋b層	石盤	黒曜石	2.00	1.20	0.50	1.0	S3	125	11	S3	125	11
47	2 B13	杭列上	-	包埋層下層	石盤	黒曜石	(2.65)	(2.20)	0.60	4.1	S6	247	11	S6	247	11
47	3 A13	-	-	包区層上層	石盤	黒曜石	4.25	2.20	0.80	5.9	S4	205	11	S4	205	11
47	4 A15	-	-	包区層下層	石盤	黒曜石	(3.40)	1.80	0.65	3.2	アセ上か? 下部欠損	S15	-	S15	-	11
47	5 C11	杭列	大挂群	包埋b層	石盤	安山岩	3.40	4.90	0.80	11.1	S19	46	11	S19	46	11
47	6 C11	-	下アセ内	包埋b層(シダ付質土)	石盤	安山岩	4.90~	3.40~	1.90~	6.5	S17	82	11	S17	82	11
47	7 C11	杭列	大挂群	包埋b層	石盤	安山岩	4.20	2.50	1.00	9.7	S14	48	11	S14	48	11

表2-1 土器類別表

測定 番号																	
48	1	Y13	包X層	陶鉢	口縁	内底	縁	縁	縁	縁	角形石、灰石	角形石、灰石	角形石、灰石	-x 1/10下	87	360	11
48	2	B11	包X層上面	陶鉢	口縁	内底	縁	縁	縁	縁	角形石、灰石	角形石、灰石	角形石、灰石	1/10下	68	191	12
48	3	A14	包X層	陶鉢	口縁	内底	縁	縁	縁	縁	角形石、灰石	角形石、灰石	角形石、灰石	1/10下	96	215	12
48	4	A12	包X層	陶鉢	口縁	内底	縁	縁	縁	縁	角形石、灰石	角形石、灰石	角形石、灰石	1/10下	87	255	12
48	5	柱状	234	包X層	陶鉢	口縁	内底	縁	縁	縁	角形石、灰石	角形石、灰石	角形石、灰石	1/10下	88	206	-
48	6	A14	包区層	陶鉢	口縁	内底	縁	縁	縁	縁	角形石、灰石	角形石、灰石	角形石、灰石	1/10下	76	220	12
48	7	杭周辺	014	包区層	陶鉢	口縁	内底	縁	縁	縁	角形石、灰石	角形石、灰石	角形石、灰石	1/10下	91	111	12
48	8	浮石田 里	010	包区層	陶鉢	口縁	内底	縁	縁	縁	角形石、灰石	角形石、灰石	角形石、灰石	1/10下	76	97	13
48	9	A15	包区層上面	陶鉢	口縁	内底	縁	縁	縁	縁	角形石、灰石	角形石、灰石	角形石、灰石	1/10下	115	203	13

表2-2 土器觀察表

表2-3 土器觀察表

層位 標示	通名	タガバ 土器	土器形 態	輪幅 (mm)	輪厚 (mm)	縫合 (6)	施土	色調	質地	種類	度量 番号	部品番号	Photo
S9 14 松林通 B14	名古屋	輪外 浅鉢	輪外 浅鉢	—	—	1.9~ ナナ	ナナ	黄	良 内(外)面 内(外)色	六角 内(外)面	1/104下 下	62 115	14
S9 15 —	—	—	口縁 浅鉢	口縫	—	3.0~ ナナ	ナナ	黄	良 内(外)面 内(外)色	六角 内(外)面	1/104下 下	20 438	14
S1 1 C12 芭田通	芭田通	輪外 浅鉢	輪外 浅鉢	—	—	0.8~ ナナ	ナナ	黄	良 内(外)面 内(外)色	六角 内(外)面	1/104下 下	26 35	15
S1 2 C12 芭田通	芭田通	輪外 浅鉢	輪外 浅鉢	—	—	1.1~ ナナ	ナナ	黄	良 内(外)面 内(外)色	六角 内(外)面	1/12×1/5	34 37	15
S1 3 B12 芭田通	芭田通	輪外 浅鉢	輪外 浅鉢	—	—	1.1~ ナナ	ナナ	黄	良 内(外)面 内(外)色	六角 内(外)面	1/104下 下	35 162	16
S1 4 朝通	—	芭田通	芭田通	口縫	—	3.1~ ナナ	ナナ	黄	良 内(外)面 内(外)色	六角 内(外)面	1/12×1/50	33 412	16
S1 5 松林通 C13 芭田通	芭田通	輪外 浅鉢	輪外 浅鉢	口縫	—	2.5~ ナナ	ナナ	黄	良 内(外)面 内(外)色	六角 内(外)面	1/104下 下	22 6	15
S1 6 B12 芭田通	芭田通	輪外 浅鉢	輪外 浅鉢	口縫	—	2.1~ ナナ	ナナ	黄	良 内(外)面 内(外)色	六角 内(外)面	1/12×1/15	31 182	16
S1 7 —	芭田通	輪外 浅鉢	輪外 浅鉢	口縫	—	4.4~ ナナ	ナナ	黄	良 内(外)面 内(外)色	六角 内(外)面	1/8×1/10	45 81	15
S1 8 B12 芭田通 B12 芭田通	芭田通	輪外 浅鉢	輪外 浅鉢	口縫	—	4.3~ ナナ	ナナ	黄	良 内(外)面 内(外)色	六角 内(外)面	1/21×1/2	1 159	16
S1 9 B12 芭田通 B12 芭田通	芭田通	輪外 浅鉢	輪外 浅鉢	口縫	—	4.3~ ナナ	ナナ	黄	良 内(外)面 内(外)色	六角 内(外)面	1/21×1/2	2 159	16
S1 10 C12 芭田通	芭田通	輪外 浅鉢	輪外 浅鉢	口縫	—	2.1~ ナナ	ナナ	黄	良 内(外)面 内(外)色	六角 内(外)面	1/104下 下	11 23	15
S1 11 A13 芭田通 A13 芭田通	芭田通	輪外 浅鉢	輪外 浅鉢	口縫	—	1.1~ ナナ	ナナ	黄	良 内(外)面 内(外)色	六角 内(外)面	1/104下 下	61 240	15
S1 12 A13 芭田通	芭田通	輪外 浅鉢	輪外 浅鉢	口縫	—	2.7~ ナナ	ナナ	黄	良 内(外)面 内(外)色	六角 内(外)面	1/104下 下	42 244	—
S1 13 Y15 芭田通 Y15 芭田通	芭田通	輪外 浅鉢	輪外 浅鉢	口縫	—	3.0~ ナナ	ナナ	黄	良 内(外)面 内(外)色	六角 内(外)面	1/104下 下	100 322	16
S1 14 駒通上 216 駒通上	駒通上	駒通上	駒通上	口縫	—	4.3~ ナナ	ナナ	黄	良 内(外)面 内(外)色	六角 内(外)面	1/104下 下	—	—
S1 15 B13 芭田通	芭田通	輪外 浅鉢	輪外 浅鉢	口縫	—	3.1~ ナナ	ナナ	黄	良 内(外)面 内(外)色	六角 内(外)面	1/2.0 里 X 1/1.8	63 137	16
S1 16 B13 芭田通	芭田通	輪外 浅鉢	輪外 浅鉢	口縫	—	4.2~ ナナ	ナナ	黄	良 内(外)面 内(外)色	六角 内(外)面	—	—	—
S1 17 Y14 芭田通	芭田通	輪外 浅鉢	輪外 浅鉢	口縫	—	11.0~ ナナ	ナナ	ナナ	ナナ	ナナ	1/2.4×1/10	34 367	15
S1 18 —	—	—	—	—	—	3.0~ ナナ	ナナ	黄	良 内(外)面 内(外)色	六角 内(外)面	1/104下 下	100 428	15
S2 1 駒通上 B12 芭田通	駒通上	駒通上	駒通上	口縫	—	4.4~ ナナ	ナナ	黄	良 内(外)面 内(外)色	六角 内(外)面	1/8×1/10	150 367	16
S2 2 駒 大森新 B12 芭田通	芭田通	芭田通	芭田通	口縫	—	3.0~ ナナ	ナナ	黄	良 内(外)面 内(外)色	六角 内(外)面	1/104下 下	42 464	—
S2 3 C11 芭田通 G12 芭田通	芭田通	芭田通	芭田通	口縫	—	2.6~ ナナ	ナナ	黄	良 内(外)面 内(外)色	六角 内(外)面	1/2.0 里 X 1/1.8	91 269	16
S2 4 G12 芭田通	芭田通	芭田通	芭田通	口縫	—	4.3~ ナナ	ナナ	黄	良 内(外)面 内(外)色	六角 内(外)面	1/2.0 里 X 1/1.8	107 58.55	20
S2 5 B12 A12 C12 芭田通 B12 芭田通	芭田通	芭田通	芭田通	口縫	—	14.2~ ナナ	ナナ	黄	良 内(外)面 内(外)色	六角 内(外)面	1/104下 下	68.13	20
S2 6 B12 芭田通	芭田通	芭田通	芭田通	口縫	—	2.4~ ナナ	ナナ	黄	良 内(外)面 内(外)色	六角 内(外)面	1/104下 下	150 325	21
S2 7 —	—	—	—	—	—	2.0~ ナナ	ナナ	黄	良 内(外)面 内(外)色	六角 内(外)面	1/104下 下	68.35 44	21
S2 8 B12 芭田通	芭田通	芭田通	芭田通	口縫	—	4.4~ ナナ	ナナ	黄	良 内(外)面 内(外)色	六角 内(外)面	1/104下 下	14 162	16
S2 9 B12 芭田通	芭田通	芭田通	芭田通	口縫	—	3.0~ ナナ	ナナ	黄	良 内(外)面 内(外)色	六角 内(外)面	1/19×1/10	110 44.71	16
S2 10 B12 芭田通	芭田通	芭田通	芭田通	口縫	—	2.1~ ナナ	ナナ	黄	良 内(外)面 内(外)色	六角 内(外)面	1/104下 下	21 36	16
S2 11 G12 芭田通	芭田通	芭田通	芭田通	口縫	—	4.4~ ナナ	ナナ	黄	良 内(外)面 内(外)色	六角 内(外)面	1/104下 下	25 58.171	17
S2 12 C13 B12 芭田通	芭田通	芭田通	芭田通	口縫	—	2.1~ ナナ	ナナ	黄	良 内(外)面 内(外)色	六角 内(外)面	1/104下 下	20 36	17
S2 13 C10 芭田通	芭田通	芭田通	芭田通	口縫	—	2.1~ ナナ	ナナ	黄	良 内(外)面 内(外)色	六角 内(外)面	1/104下 下	48 36	13
S2 14 C12 芭田通	芭田通	芭田通	芭田通	口縫	—	2.1~ ナナ	ナナ	黄	良 内(外)面 内(外)色	六角 内(外)面	1/8×1/10	23 23	16

表2-4 土器觀察表

表3-1 木構造表

部品番号	部品名	部品寸法	部品寸法	先端部		側面		部品番号	部品名
				高さ (cm)	幅 (cm)	高さ (cm)	幅 (cm)		
55 1 33 53	BR(005)7.1(17)中	75.6(39.3)	8.5(5.7)大	17.5	41(13)	1	68.5	21(3)	1(1) 四角つまみ三脚 輪郭の形状が逆につく分かれている。大形三角脚(左)
55 2 31 317	BR(005)6.2	66.5(39.3)	8.5(5.7)大	12.0	41(13)	0(0)	49.5	22(2)	1(1) 四角つまみ三脚 輪郭の形状が逆につく分かれている。大形三角脚(右)
55 3 34 36	BR(005)7.1(17)中	75.6(39.3)	8.5(5.7)大	26.5	52(22)	0(0)	54.5	33(3)	0(0) 四角つまみ三脚 輪郭の形状が逆につく分かれている。大形三角脚(左)
55 4 6 42	BR(005)6.2	66.5(39.3)	8.5(5.7)大	18	61(2)	1(1)	26.2	22(2)	1(1) 四角つまみ三脚 輪郭の形状が逆につく分かれている。大形三角脚(右)
55 5 3 42	BR(005)7.1(17)中	75.6(39.3)	8.5(5.7)大	7	61(2)	0(0)	21.5	2(1)	1(1) 輪郭の形状が逆につく分かれている。大形三角脚(左)
55 6 22 52	BR(005)6.2	66.5(39.3)	8.5(5.7)中	17.5	41(12)	0(0)	38.7	22(2)	1(1) 輪郭の形状が逆につく分かれている。大形三角脚(右)
55 7 22 52	BR(005)7.1(17)中	75.6(39.3)	8.5(5.7)中	1	51(15)	1(1)	31.0	22(2)	1(1) 三角脚(一筋脚) 輪郭の形状が逆につく分かれている。中形三角脚
55 8 24 22-11	BR(005)6.2	66.5(39.3)	8.5(5.7)大	23.3	52(26)	0(0)	25.1	2(2)	1(1) 四角つまみ三脚 輪郭の形状が逆につく分かれている。中形三角脚(左)
55 9 4 203	BR(005)7.1(17)中	75.6(39.3)	8.5(5.7)大	17.0	41(4)	0(0)	30.5	2(1)	1(1) 四角つまみ三脚 輪郭の形状が逆につく分かれている。中形三角脚(右)
55 1 17 205	BR(005)6.2	66.5(39.3)	8.5(5.7)中	21.2	51(3)	0(0)	19.3	2(3)	1(1) 四角つまみ三脚 輪郭の形状が逆につく分かれている。中形三角脚(左)
55 2 15 15	BR(005)7.1(17)中	75.6(39.3)	8.5(5.7)大	16.5	41(2)	0(0)	23.0	2(2)	1(1) 四角つまみ三脚 輪郭の形状が逆につく分かれている。中形三角脚(右)
55 3 9 27-5	BR(005)6.2	66.5(39.3)	8.5(5.7)大	10.5	41(2)	0(0)	20.9	2(2)	1(1) 三角脚 輪郭の形状が逆につく分かれている。中形三角脚(左)
55 4 21 200	BR(005)7.1(17)中	75.6(39.3)	8.5(5.7)中	15.0	61(9)	0(0)	23.0	4(3)	0(0) 三角脚 輪郭の形状が逆につく分かれている。中形三角脚(右)
55 5 20 200	BR(005)6.2	66.5(39.3)	8.5(5.7)中	21.3	70(6)	0(0)	65.5	1(4)	0(0) 三角脚 輪郭の形状が逆につく分かれている。中形三角脚(左)
55 6 27 24-2	BR(005)7.1(17)中	75.6(39.3)	8.5(5.7)大	21.3	42(20)	0(0)	39.3	2(2)	2(1) 両方脚 輪郭の形状が逆につく分かれている。大形四脚
55 7 12 2	BR(005)6.2	66.5(39.3)	8.5(5.7)大	3.5	71(11)	0(0)	36.1	4(3)	0(0) 両方脚 輪郭の形状が逆につく分かれている。大形四脚
55 8 10 213	BR(005)4.85	3.4(5.0)小	14.2	70(6)	1(0)	20.6	24(4)	0(0)	1(1) 四角脚 輪郭の形状が逆につく分かれている。小形四脚
55 9 18 22	BR(005)4.7	3.8(3.2)小	14.7	52(25)	0(0)	20.2	23(3)	1(1)	1(1) 四角脚 輪郭の形状が逆につく分かれている。小形四脚
55 10 20 26	BR(005)4.85	3.6(5.0)中	14.5	71(10)	1(1)	42.5	23(3)	1(1)	1(1) 四角脚 輪郭の形状が逆につく分かれている。中形四脚
55 11 2 29	BR(005)7.1(17)中	59.8(37.6)	4.6(5.4)大	13.3	61(4)	0(0)	44.8	4(3)	0(0) 三角脚 輪郭の形状が逆につく分かれている。中形三角脚(左)
55 12 3 19 21	BR(005)6.2	59.8(37.6)	4.6(5.4)中	18.5	61(4)	0(0)	35.9	4(3)	0(0) 三角脚 輪郭の形状が逆につく分かれている。中形三角脚(右)
55 13 4 26 21-1	BR(005)3.1	4.5(4.2)小	15.2	81(15)	0(0)	38.1	2(3)	0(0)	1(1) 両角脚 輪郭の形状が逆につく分かれている。両角脚
55 14 5 23 59	BR(005)2.4	4.7(24.75)	5.4	20.3	61(7)	0(0)	21.3	4(3)	0(0) 両角脚 輪郭の形状が逆につく分かれている。両角脚
55 15 6 20 101	BR(005)6.0	4.3(4.0)中	14.0	61(6)	0(0)	38.8	3(4)	0(0)	1(1) 四角脚 輪郭の形状が逆につく分かれている。中形四脚
55 16 7 32 50	BR(005)4.85	3.8(3.2)中	14.7	51(11)	0(0)	57.4	4(3)	0(0)	1(1) 四角脚 輪郭の形状が逆につく分かれている。小形四脚
55 17 8 25 102	BR(005)4.85	3.8(3.2)中	14.5	71(10)	1(1)	55.5	6(10)	0(0)	1(1) 四角脚 輪郭の形状が逆につく分かれている。中形四脚
55 18 9 36 56	BR(005)3.1	4.5(5.0)中	10.0	50(12)	0(0)	21.5	3(3)	1(1)	1(1) 両角脚 輪郭の形状が逆につく分かれている。両角脚
55 19 10 5 57	BR(005)2.4	4.0(11.7)	7.2(7.5)大	21.0	61(2)	0(0)	23.1	3(3)	1(1) 両角脚 輪郭の形状が逆につく分かれている。両角脚
55 20 1 2 21-2 26 77	BR(005)2.4	4.0(11.7)	7.2(7.5)大	6.5	61(4)	0(0)	1(3)	1(1)	1(1) 両角脚 輪郭の形状が逆につく分かれている。両角脚
55 21 2 1 311	BR(005)2.4	4.0(11.7)	7.2(7.5)大	9	61(4)	0(0)	41.5	3(3)	1(1) 両角脚 輪郭の形状が逆につく分かれている。両角脚
55 22 3 7 24	BR(005)0.9	0.5(1.0)小	13.0	41(8)-6(5)	0(0)	28.0	2(2)	1(1)	1(1) 三角脚 輪郭の形状が逆につく分かれている。小形三角脚
55 23 4 8 200	BR(005)0.9	0.5(1.0)中	10.4	9	1	21.0	2	1(1)	1(1) 両角脚 輪郭の形状が逆につく分かれている。小形四脚
55 24 5 16 1-5	BR(005)1.5	2.2(2.0)中	6	54(6)	0	25.4	4(3)	1(1)	1(1) 両角脚 輪郭の形状が逆につく分かれている。中形四脚
55 25 6 14 1-3	BR(005)2.4	4.3(5.4)中	10.5	50(12)	1	16.2	3(2)	1(1)	1(1) 両角脚 輪郭の形状が逆につく分かれている。中形四脚
55 26 7 11 10-2	BR(005)2.4	3.5(3.2)中	4.8	44(4)	1	15.6	3(1)	1(1)	1(1) 両角脚 輪郭の形状が逆につく分かれている。中形四脚
55 27 8 13 12-18	BR(005)2.4	2.8(2.7)中	9.3	61(1)	0	12.8	0(0)	1(1)	1(1) 両角脚 輪郭の形状が逆につく分かれている。中形四脚
55 28 9 1 10-3 23	BR(005)2.4	3.3	3	1	6.0	3	1	1(1)	1(1) 両角脚 輪郭の形状が逆につく分かれている。中形四脚
55 30 3 7 24	BR(005)0.9	0.5(1.0)小	13.0	41(8)-6(5)	0(0)	20.4	2	1(1)	1(1) 両角脚 輪郭の形状が逆につく分かれている。小形三角脚
55 31 4 8 200	BR(005)0.9	0.5(1.0)中	10.4	9	1	14.1	1(1)	1(1)	1(1) 両角脚 輪郭の形状が逆につく分かれている。小形四脚
55 32 5 16 1-4	BR(005)1.5	2.2(2.0)中	5	33(3)	3	1	1(1)	1(1)	1(1) 両角脚 輪郭の形状が逆につく分かれている。中形四脚
55 33 6 20 1 2-2	BR(005)2.4	4.3(5.4)中	2.7	20(1)	2	20.1	4	0	1(1) 両角脚 輪郭の形状が逆につく分かれている。中形四脚
55 34 7 11 2-3 16 27	BR(005)2.4	3.5	7	1	7.5	3	1	1(1)	1(1) 両角脚 輪郭の形状が逆につく分かれている。中形四脚
55 35 8 13 2-4 23.4	BR(005)2.4	4.3	7.2	5	2	16.2	1	2	1(1) 両角脚 輪郭の形状が逆につく分かれている。中形四脚

表3-2 木枕調査表

調査箇所(施設・実験場等) 等級No./ 番号	全長 (mm)	幅大図 (mm)	実績歴		被寄生		備考	調査 箇所名 (PnMa)
			最高 (mm)	加工・敷設 箇所数	最高 (mm)	加工・敷設 箇所数		
3-3	25	2.8	13.3	10	0	22.4	4	17-1
4-2	14.2	2.5	6.7	3	2	11.5	1	17-1
4-2	10.4	2.1	2.7	4	0	7.7	1	17-1
4-3	21.5	3.1	7.4	7	0	24.1	3	17-1
5-1	13.0	2.6	5.5	5	2	7.5	3	17-1
6-2	20.2	3.3	11.8	6	0	8.4	4	24-1
6-1	9.6	2.5	5.6	4	0	0	0	24-1
7-1	22.4	1.3	5.6	1	3	16.0	0	24-1
7-2	25.2	7.5	10.2	7	1	25.0	2	24-1
8-1	25.6	5.5	9.5	7	0	15.1	4	24-1
8-3	22.5	4.9	14.4	5	0	10.4	2	24-1
9-1	27.2	4.5	12.4	10	2	14.8	0	31-1
9-1	9.8	4.3	25.1	0	9.8	1	2	31-1
9-2	27.2	4.5	12.4	10	2	14.8	0	31-1
9-2	9.8	4.3	25.1	0	9.8	1	2	31-1
10-1	21.9	4.0	13.5	9	0	8.4	3	31-1
11-1	29.8	4.5	20.4	7	0	19.4	3	31-1
11-4	55.3	3.4	12.3	5	1	43.0	3	16-1
11-5	48.4	4.3	13.2	9	0	35.2	3	16-1
11-6	43.5	7.2	16.3	6	0	22.2	2	16-1
11-6	51.3	4.4	11.3	6	0	40.0	4	16-1
11-9	12.4	1.2	5.2	4	0	7.2	6	16-1
11-10	23.6	4.6	12.4	5	0	21.2	2	16-1
11-11	35.7	4.6	12.4	4	0	23.3	3	16-1
12-1	10.2	2.0	21.1	0	10.2	4	0	16-1
12-1	7.0	2.9	6.5	0	7.0	3	0	16-1
12-2	25.8	3.5	6.9	9	1	17.3	3	16-1
12-3	27.5	3.4	11.8	4	1	15.7	1	16-1
13-1	11.4	1.0	1.1	4	0	10.3	4	17-1
13-2	25.2	6.4	10	4	0	25.2	0	17-1
14-1	8.7	1.9	6.2	4	1	3.5	3	24-1
14-2	16.0	1.1	0	0	16.0	0	3	24-1
14-3	12.5	1.5	0	0	12.5	0	2	24-1
15	8.2	1.7	0	0	9.2	0	2	24-1
15	7.8	1.7	0	0	7.8	1	1	24-1
15-1	16.6	3.0	4.1	6	1	12.7	3	24-1
15-2	23.5	6.5	18.0	4	1	15.5	2	24-1
16-2	21.4	2.7	0	0	21.4	0	3	24-1
17	18.2	2.6	0	0	18.2	3	1	24-1
17-1	26.0	3.2	11	7	0	25.0	3	24-1
17-2	24.7	2.9	10	7	0	17.2	2	24-1
17-3	16.8	4.4	14	6	1	4.8	1	24-1
17-4	6.3	2.6	21.1	0	6.3	0	4	24-1
17-5	18.1	0.8	21.1	0	6.1	1	2	24-1
17-6	35.1	10.8	13	2	0	7.2	2	24-1
18-1	18.5	4.3	10.8	4	0	8.9	4	31-1

表3-2

表3-3

表3-4 太行明月春

表3-5 木枕別要表

用材種類・断面形状・寸法(単位mm)	等級番号	全長 (cm)	最大幅 (cm)	先端部		頭部		脚部		規格 等級番号 (Ph No.)
				高さ (cm)	加工面積 (cm <sup>2</sup> )	高さ (cm)	加工面積 (cm <sup>2</sup> )	高さ (cm)	加工面積 (cm <sup>2</sup> )	
角柱	83	28.8	4.0	14.4	4	0	14.4	4	0	1-1-2
	84	71.2	4.3	13.0	6	1	57.4	1	3	1-1-2
	85	47.7	5.5				41.7	2	1	1-1-2
	86									4-2
	87	65.5	4.2	24.0			45.5	2	1	3-3角形
	88	5.4	2.0	2.0	3	1	4.4	2	1	不規則形
	89	20.0	2.0	7	5	0	13.0	4	0	不規則形
	90	48.8	2.8	13	7	0	41.5	3	1	不規則形
	91	27.5	2.2	24.0			27.5	3	1	圓柱形
	92	43.7	4.5				43.7	2	2	正方形
	93	36.6	7.2	4.5	1	2	32.1	1	2	三角形
	97	6.8	6.9	24.0			6.8	3	1	扁平長方形
	100	8.1	2.0	24.0			8.1	3	1	扁平長方形
	101	58.0	5.7	18.5	6	0	36.5	3	1	三角形
	102	15.1	3.2				15.1	2	1	下と側一體化
	102	7.7	2.0				7.7	3	1	二方複合
	103-1	24.2	4.8				3			上と側一體化
	103-2	15.5	3.5				1	2		三角形
	104	38.0	2.0	4.1	3	1	33.9	3	1	不規則形
	105-2	65.9	6.5	18.7	3	1	46.2	1	3	半円形
	106	34.3	8.0				3			西角ついた三角形
	107	92.0	10.0	10	2	2	52.2	3	1	四角形
	108	23.1	4.7	20.0	7	0	23.0	3	1	丸に近い不規則形
	110	18.6	7.1	13.3	5	1	5.3	3	1	扇形
	111	44.8	4.8	13.7	5	2	21.1	2	2	扇形
	112	45.3	2.6	13.9	2	1	20.4	2	1	扇形
	113	39.8	2.6	42.1			36.8	3	1	四角形
	114	27.7	4.0	10.4	3	1	17.3	3	1	不定形
	115	30.7	3.4				30.7	2	1	不規則形
	116	70.5	5.4	24.0			70.5	1		扇形
	201	74.4	6.8	19.8	4	1	54.6	2	1	三角形
	202	79.7	2.7	14	3	0	19.7	3	1	三角形
	204	42.5	4.5	3.5	8	0	33.0	4	0	正方形
	205	4.0	4.1	8.6	4	0	8.0	4	0	三角形(一部割合)
	206	15.4	3.7	4.6	5	0	15.4	3	0	三角形
	207	13.7	4.0				12.7	3	0	上と側一體化
	208	28.1	5.2	11.0	4	0	11.1	4	1	三角形(一部割合)
	209	59.2	5.0	16.3	6	1	12.9	3	1	三角形(一部割合)
	210	31.4	6.1	16.0	6	1	22.4	4	0	四角形
	211	36.5	8.5	14.8	5	0	21.7	3	1	四角形
	212	17.2	3.4	24.0			17.2	3	1	扇形

第3-6章 抗衰老

標本番号	学名	日本名	英名	外観				触角				触手				標本番号 (Pn No.)
				全長 mm	頭部 mm	胸脚 mm	腹部 mm	左側表面 mm	右側表面 mm	頭部 mm	左側表面 mm	右側表面 mm	頭部 mm	左側表面 mm	右側表面 mm	
212	34.5	4.9	29.3	7	0	5.3	3	1	1	屬平	半分に割れている。	1-2				
213	56.8	4.4	25.2	6	0	31.1	3	1	1	三角形	半分に割れている。	4-2				
214	48.2	6.6	12.0	5	0	36.2	3	1	1	三角形	半分に割れている。	4-2				
215	26.0	3.6	4.3	4	0	21.7	1	3	1	三角形	半分に割れている。	4-2				
216	39.0	2.2	10.5	7	0	28.1	3	1	1	三角形	半分に割れている。	4-2	Pn.24			
217	19.5	3.8	6.6	4	1	15.9	3	1	1	台形	半分に割れている。(小三角形)	1-2				
218	26.9	4.7	14.0	7	1	15.9	3	1	1	台形	半分に割れている。	1-2				
219	29.6	3.8	10.3	10	0	19.3	3	1	1	台形	半分に割れている。	1-2				
220	52.7	3.6	22.5	9	2	30.2	2	2	2	不規則	無し。	1-2				
301	25.0	2.7	8.7	5	1	19.3	0	1	1	丸	無毛。	1-2				
302	43.1	5.6	14.3	9	1	28.8	3	1	1	台形	無毛。	1-2				
303	26.0	5.5	14.0	9	0	14.0	3	1	1	台形	先端が削れてある。少し尖るもの。	1-2				
304	20.9	3.0	8.4	3	1	12.5	3	1	1	台形	先端が削れてある。	1-2				
305	17.4	4.6	8.5	9	0	8.9	2	2	2	三角形	先端が削れてある。	1-2				
307	10.7	2.8	5.6	4	0	6.1	3	1	1	台形	先端が削れてある。	1-2				
308	23.5	2.8	5.6	6	1	16.1	2	1	1	三角形	先端が削れてある。	1-2				
309	23.7	4.4	14	5	0	9.7	4	0	1	圓形	頭の部分が削れていても、	1-2				
310	31.3	5.4	12.7	8	1	18.8	1	3	1	三角形	頭の部分が削れていても、	1-2				
312	31.2	5.0	11.4	5	0	21.8	2	1	1	三角形	頭の部分が削れていても、	1-2	Pn.24			
314	34.3	3.7	14	11	0	20.3	3	1	1	不規則	頭の部分が削れていても、	1-2				
315	32.4	4.9	14.0	2	1	18.4	3	1	1	台形	頭の部分が削れていても、	1-2				
316	45.3	3.3	25.0	5	0	20.3	2	1	1	三角形	頭の部分が削れていても、	1-2				
318-1	41.4	5.3	22.3	17	0	18.7	3	1	1	圓形	頭の部分が削れていても、	1-2				
318-2	34.4	3.8	15.6	11	1	18.8	2	2	2	圓形	頭の部分が削れていても、	1-2				
319-1	45.9	4.7	12.2	4	0	33.8	3	1	1	台形	先端が途中で折れていても、少しきず。	4-2				
319-2	33.5	3.0	6.2	5	0	27.3	2	2	2	圓形	先端が途中で折れていても、少しきず。	3-2	Pn.24			
320	36.2	5.2	18.0	6	0	18.2	2	1	1	台形	先端が途中で折れていても、少しきず。	3-2				
321-1	24.2	4.7	8.5	5	0	15.7	4	0	1	三角形	先端が途中で折れていても、少しきず。	3-2				
321-2	26.5	7.7	16.0	5	0	17.6	2	1	1	三角形	先端が途中で折れていても、少しきず。	3-2				
322-1	61.2	4.2	12.7	4	0	38.8	2	1	1	三角形	先端が途中で折れていても、	4-2				
322-2	29.9	4.0	20.3	14	1	9.8	3	1	1	圓形	先端が途中で折れていても、少しきず。	3-2				
323	46.2	3.8	16.0	6	0	36.2	3	1	1	三角形	先端が途中で折れていても、少しきず。	4-2				
324	26.6	5.4	11.4	4	1	17.2	3	1	1	三角形	先端が途中で折れていても、少しきず。	4-2				
325	31.3	5.9	12.5	8	0	21.3	2	1	1	三角形	先端が途中で折れていても、少しきず。	4-2	Pn.27			
326	21.6	4.0	13.4	7	0	14.2	2	2	2	台形	先端が途中で折れていても、少しきず。	4-2				
327	25.6	4.2	14	9	0	15.6	4	0	1	三角形	先端が途中で折れていても、少しきず。	4-2				
328	9.3	5.2	—	—	—	9.3	3	0	1	圓形	先端が途中で折れていても、少しきず。	4-2				
329	8.6	2.8	—	—	—	8.6	4	0	1	圓形	先端が途中で折れていても、少しきず。	4-2				
330	23.5	6.0	16.0	4	0	10.1	4	0	1	圓形	先端が途中で折れていても、少しきず。	4-2				
331	59.3	4.8	22.3	5	0	24.4	2	2	2	圓形	先端が途中で折れていても、少しきず。	4-2				
332	29.4	4.2	11	5	1	28.4	2	2	2	圓形	先端が途中で折れていても、少しきず。	4-2	Pn.23			
333	53.7	4.9	16.6	12	2	43.0	2	2	2	圓形	先端が途中で折れていても、少しきず。	4-2				
334-1044	29.7	4.9	16.6	12	2	43.0	2	2	2	圓形	先端が途中で折れていても、少しきず。	4-2				

表3-7 木抗拉强度

表3-7

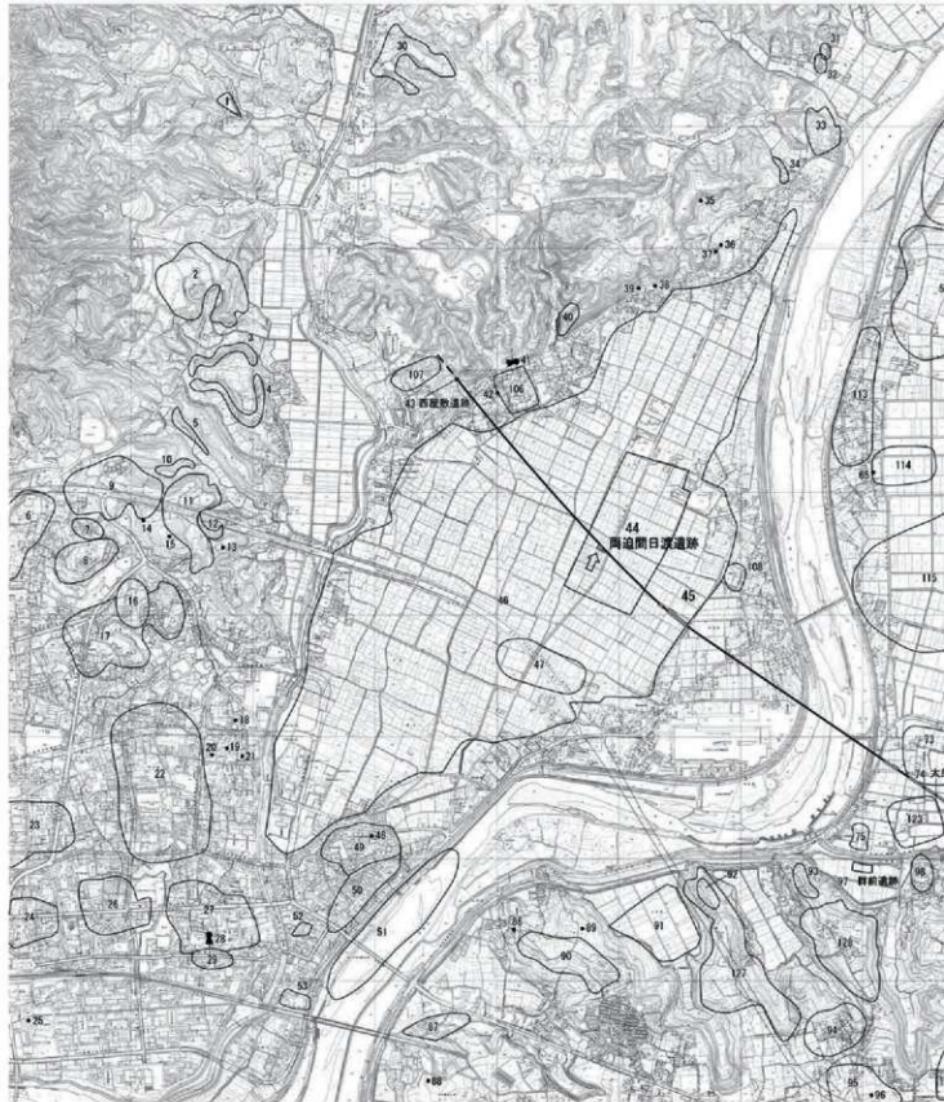




図2 玉名平野周辺の地図と調査区位置図(1/10,000)

(玉名市教育委員会 2009 「両迫間日渡遺跡」第32図より転載・加筆)

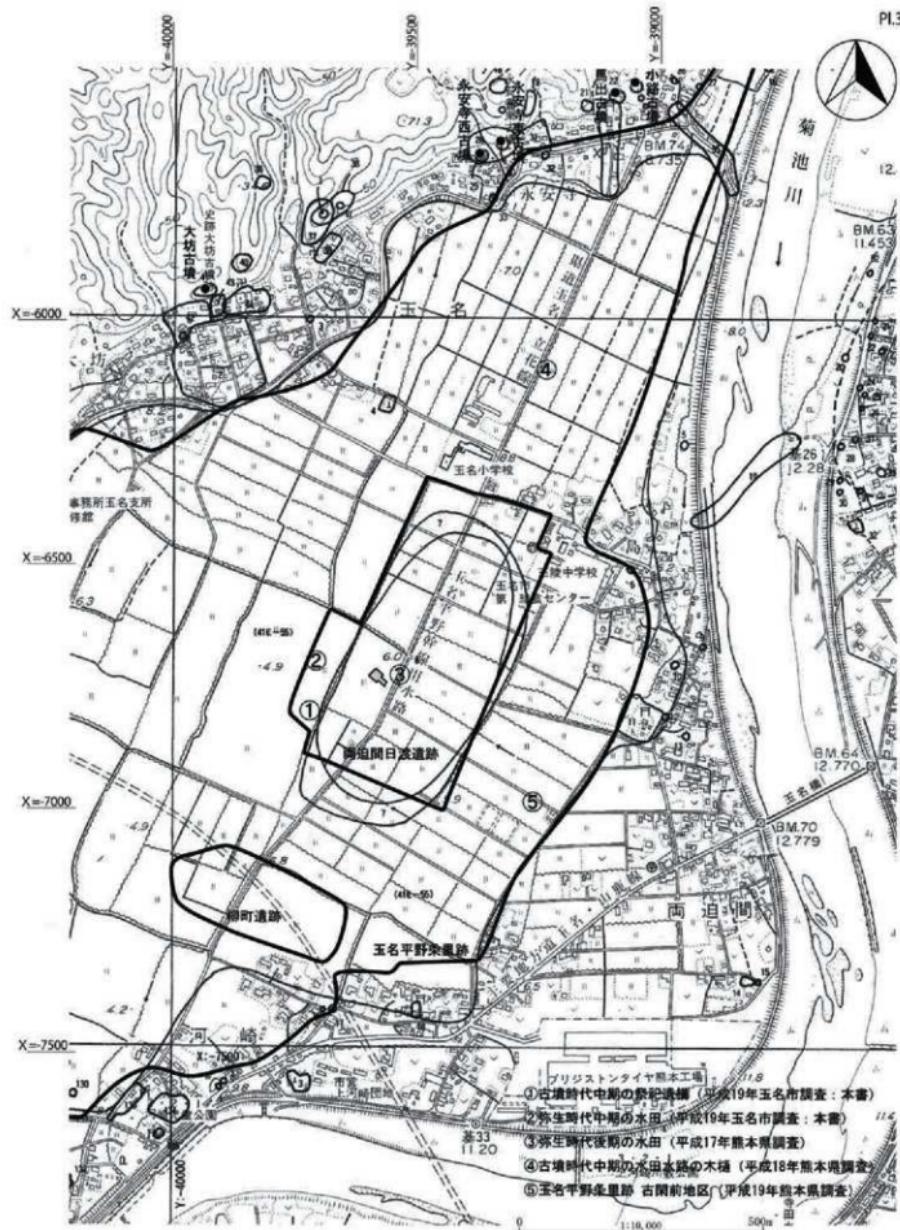


図3 両迫間日渡遺跡と玉名平野の遺跡(1/10,000)

(玉名市教育委員会 2009『両迫間日渡遺跡』第7図より転載・加筆)

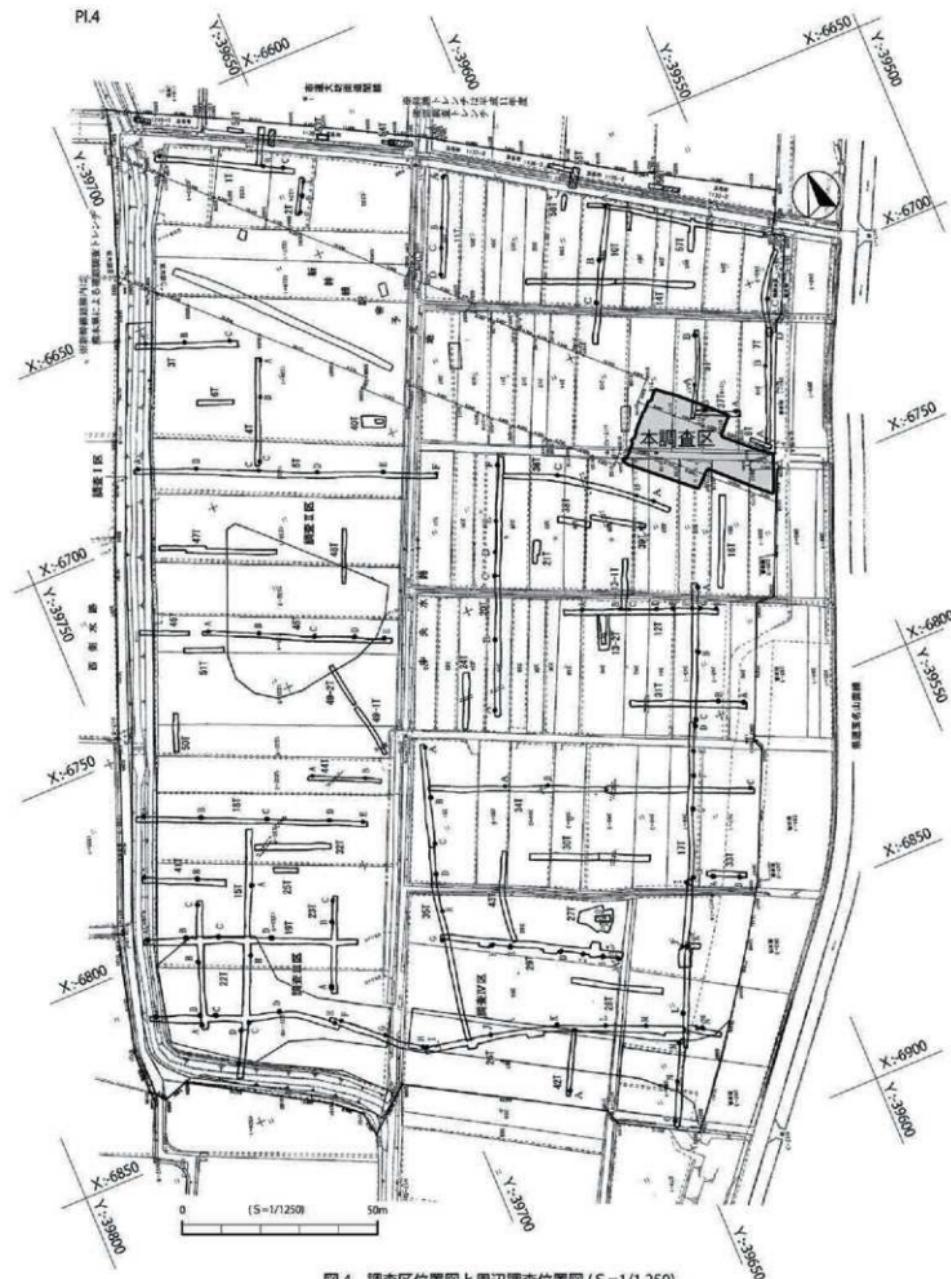


図4 調査区位置図と周辺調査位置図 ( $S=1/1,250$ )

(玉名市教育委員会 2009 「両泊間日渡遺跡」第8・33図より転載・加筆・改編)

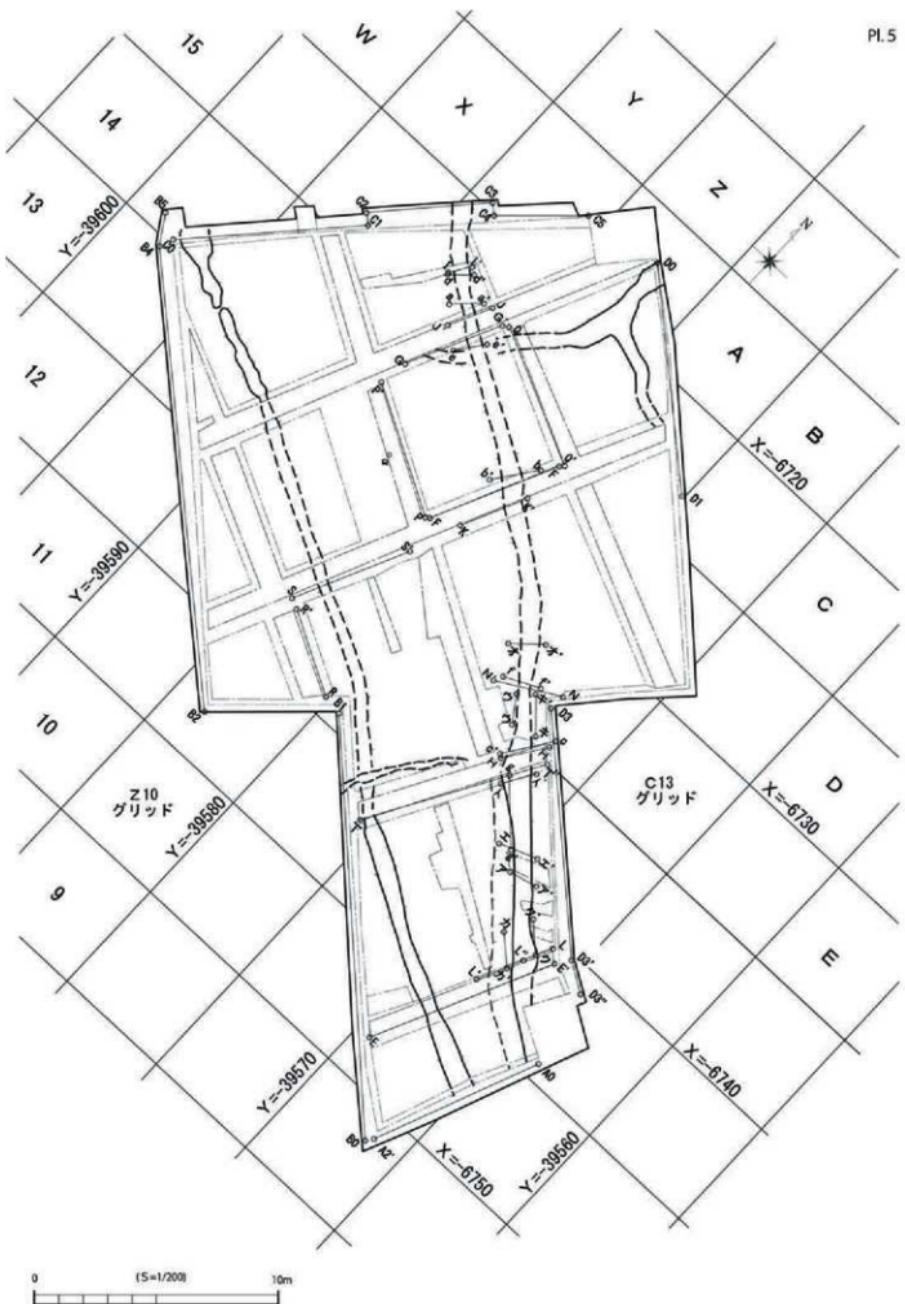


図5 IX層 遺構平面図(桂畔ほか) (1/200)

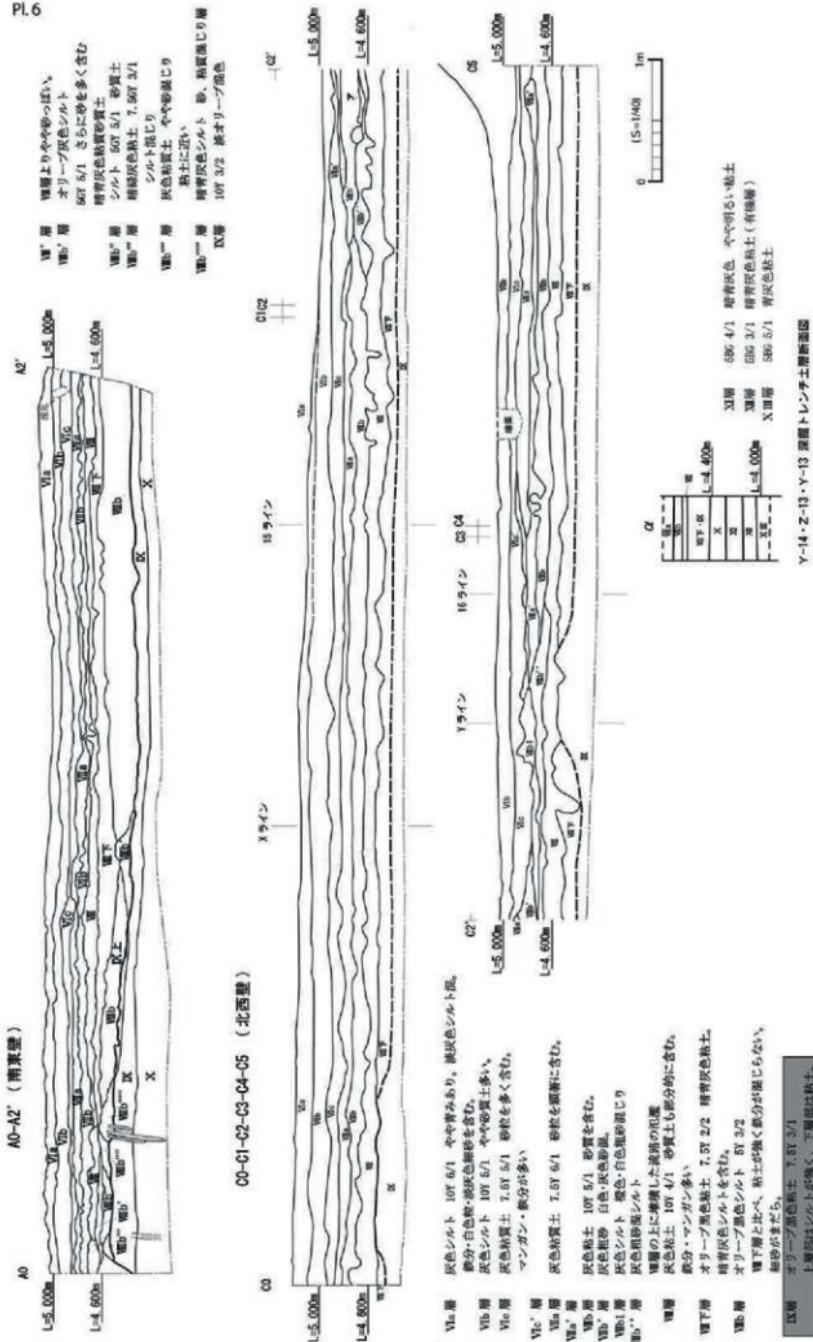


図6 IX層 基本土層図1(南東・北西壁)・Y-14・Z-13・Y-13深掘トレンチ土層断面図 (1/40)

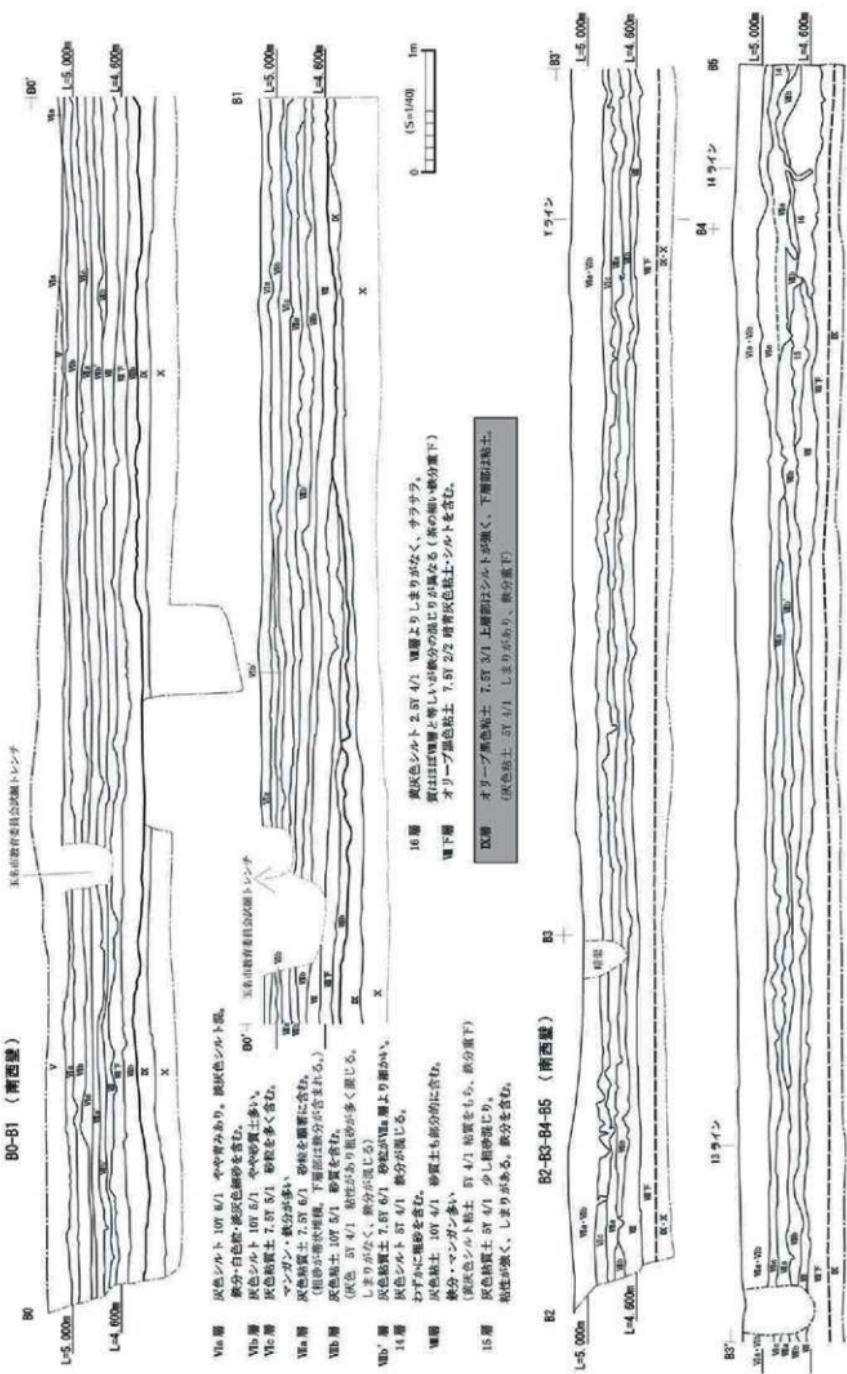


図7 IX層 基本土層図2(南西壁) (1/40)

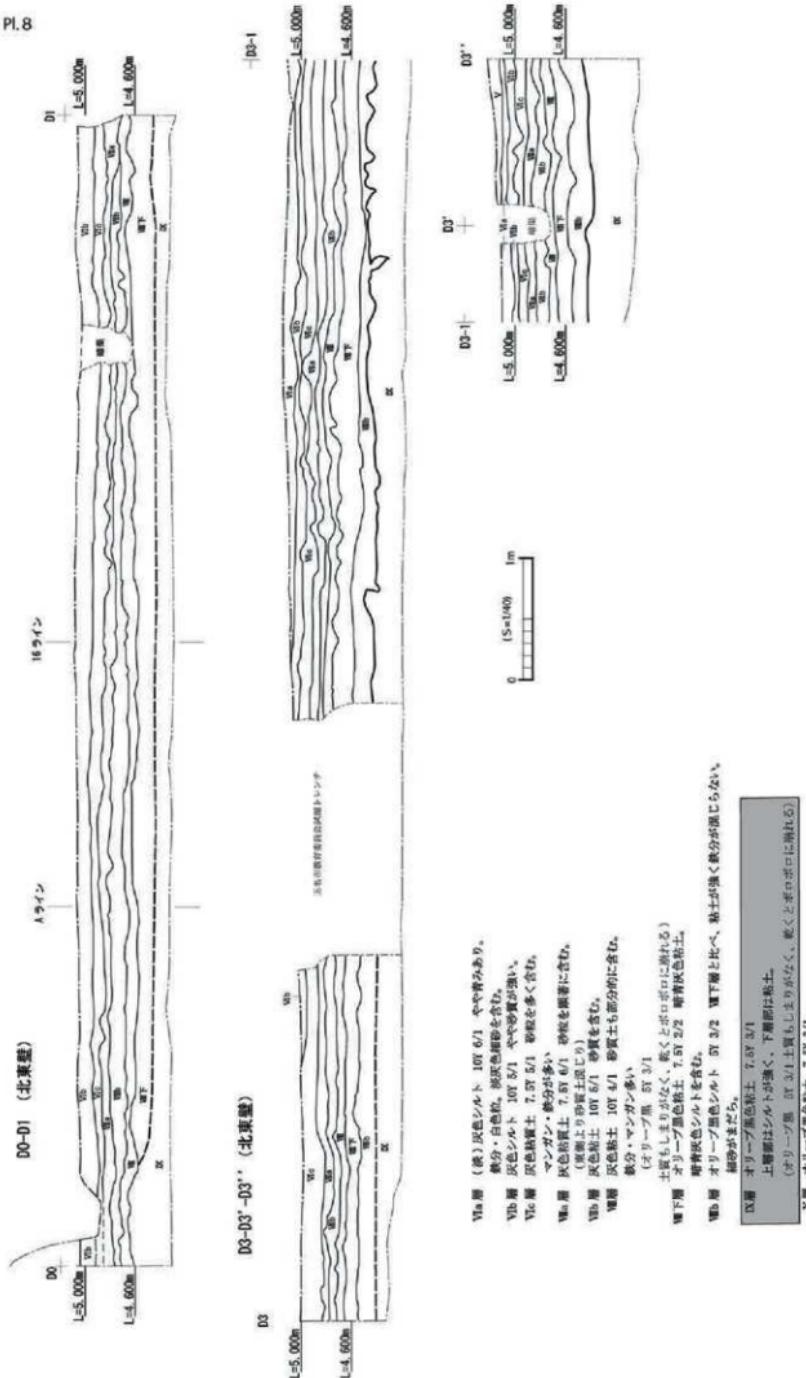


図8 IX層 基本土層図3（北東壁）（1/40）

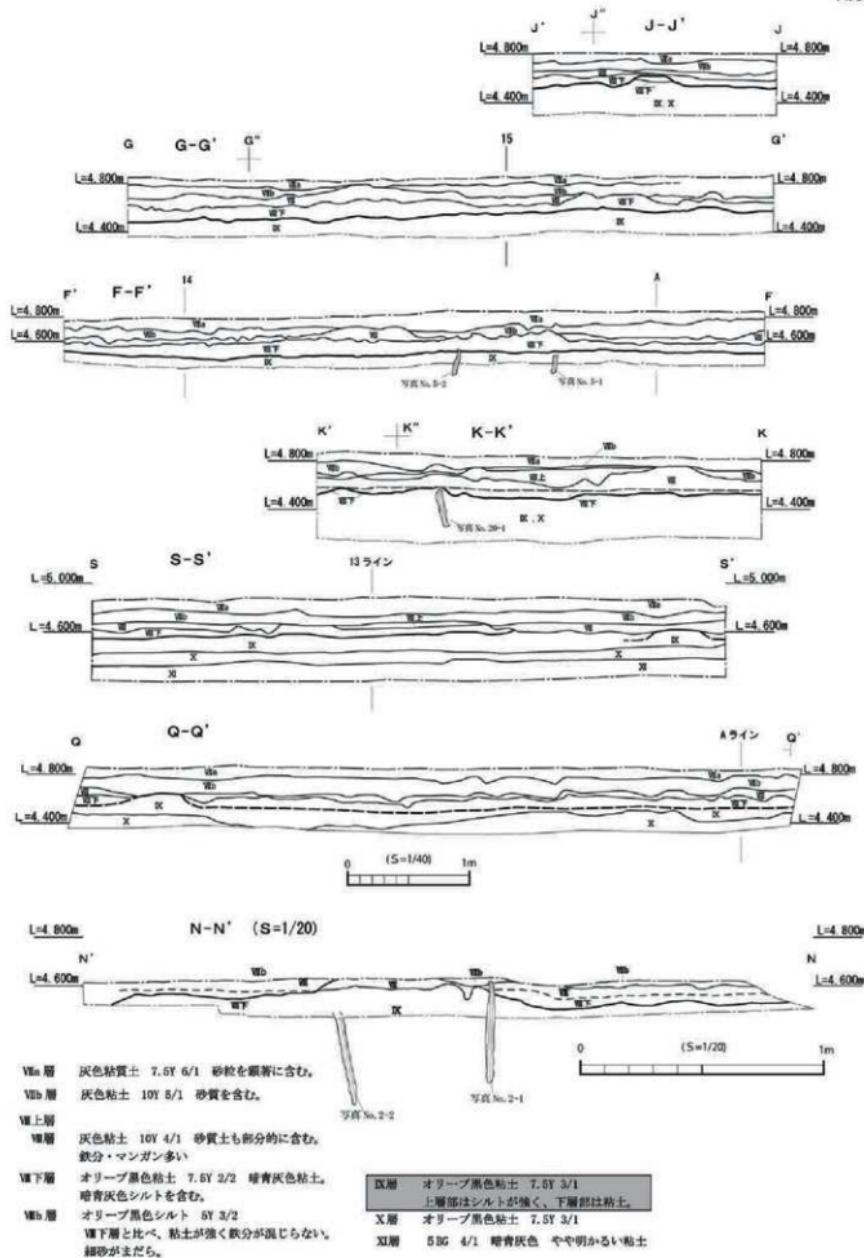
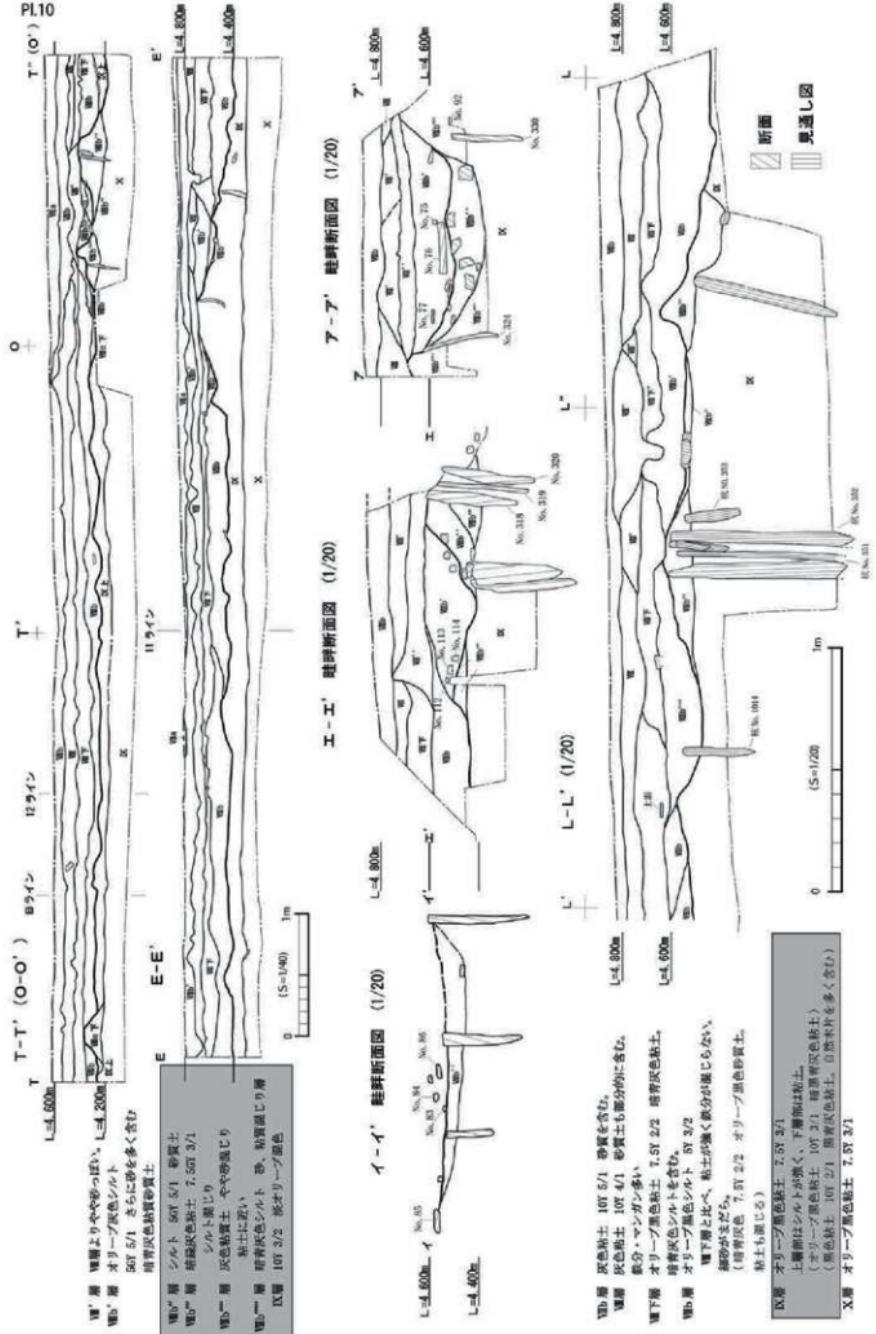


図 9 IX層 畦畔 (関連) 断面図 1 (1/40) (1/20)



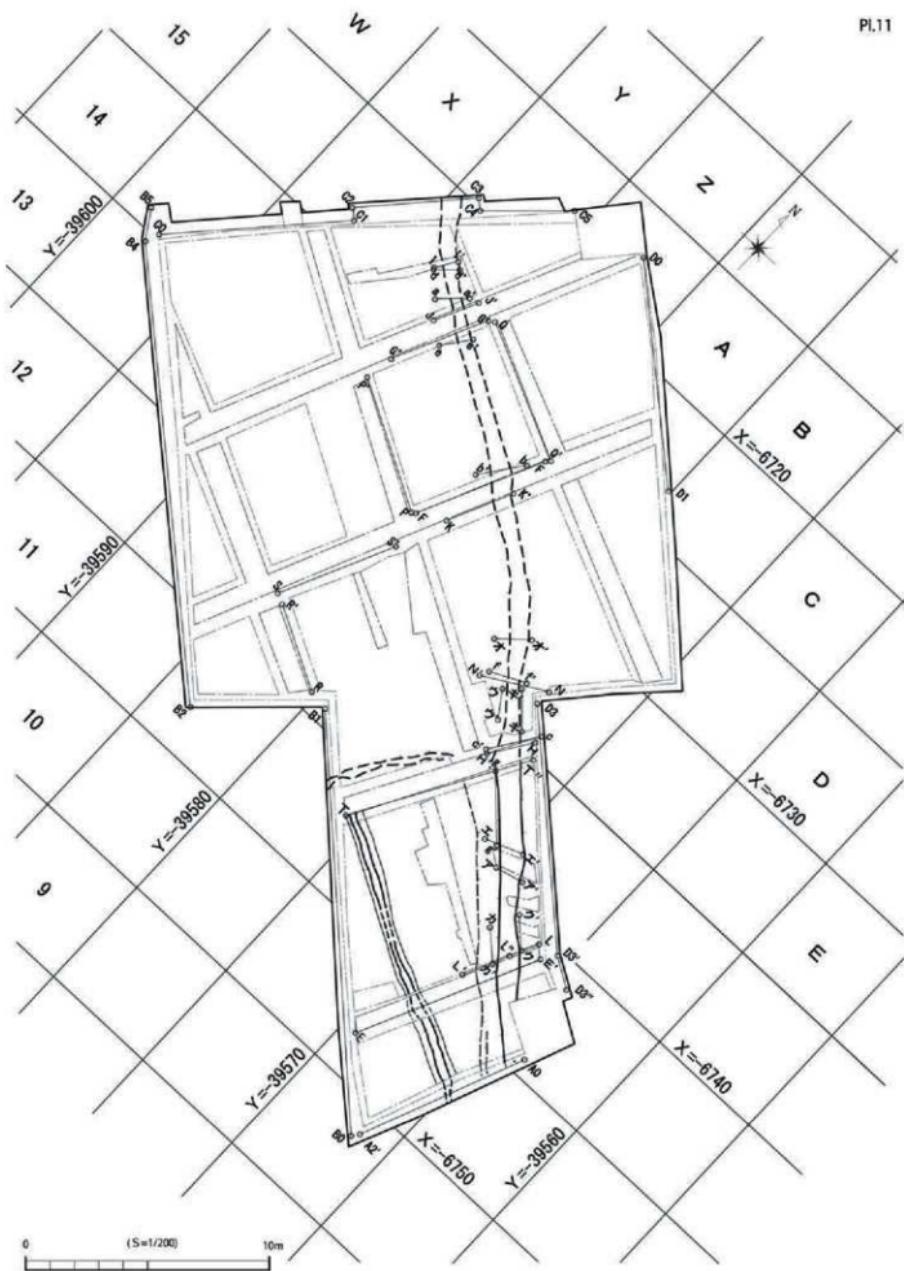


図 11 VIIIb 層 遺構平面図(畦畔ほか) (1/200)

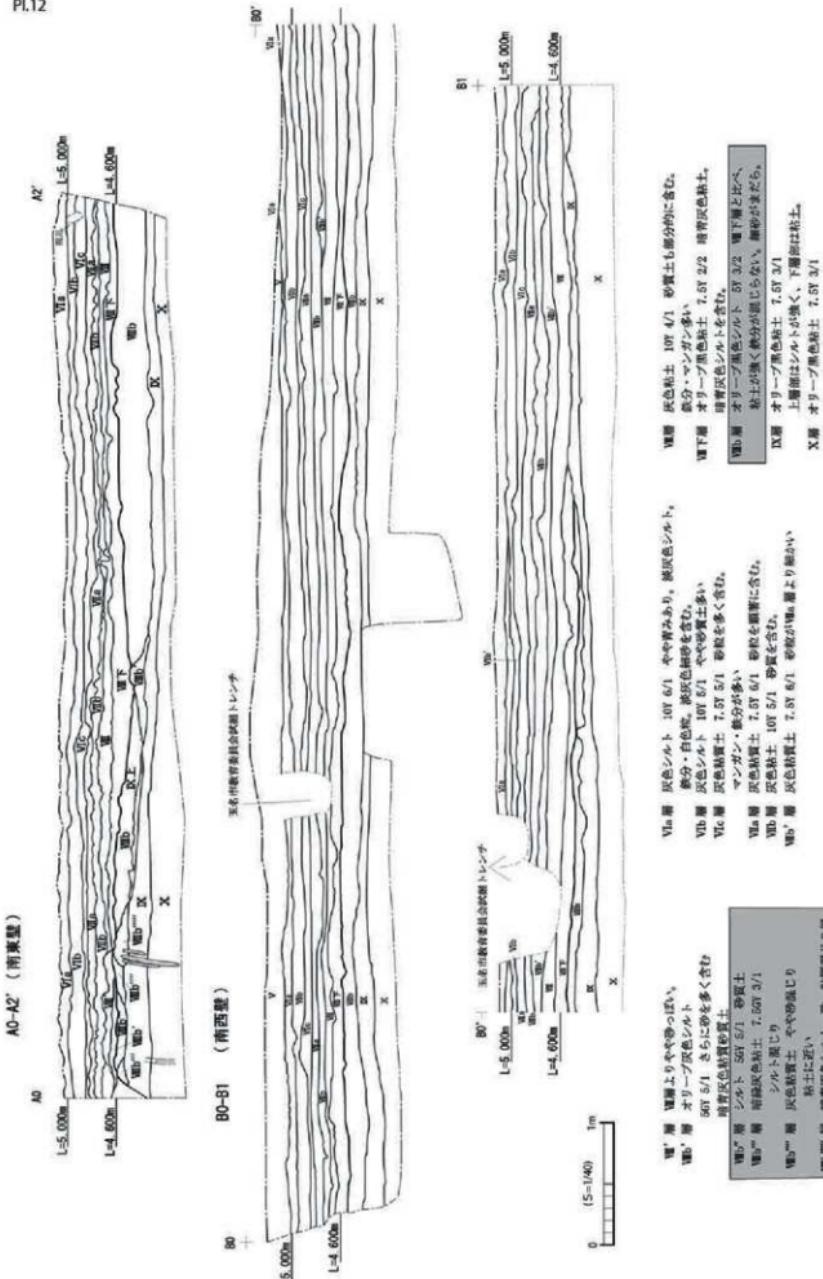


図 12 Wb 層 基本土層図 1 (南東壁・南西壁) (1/40)

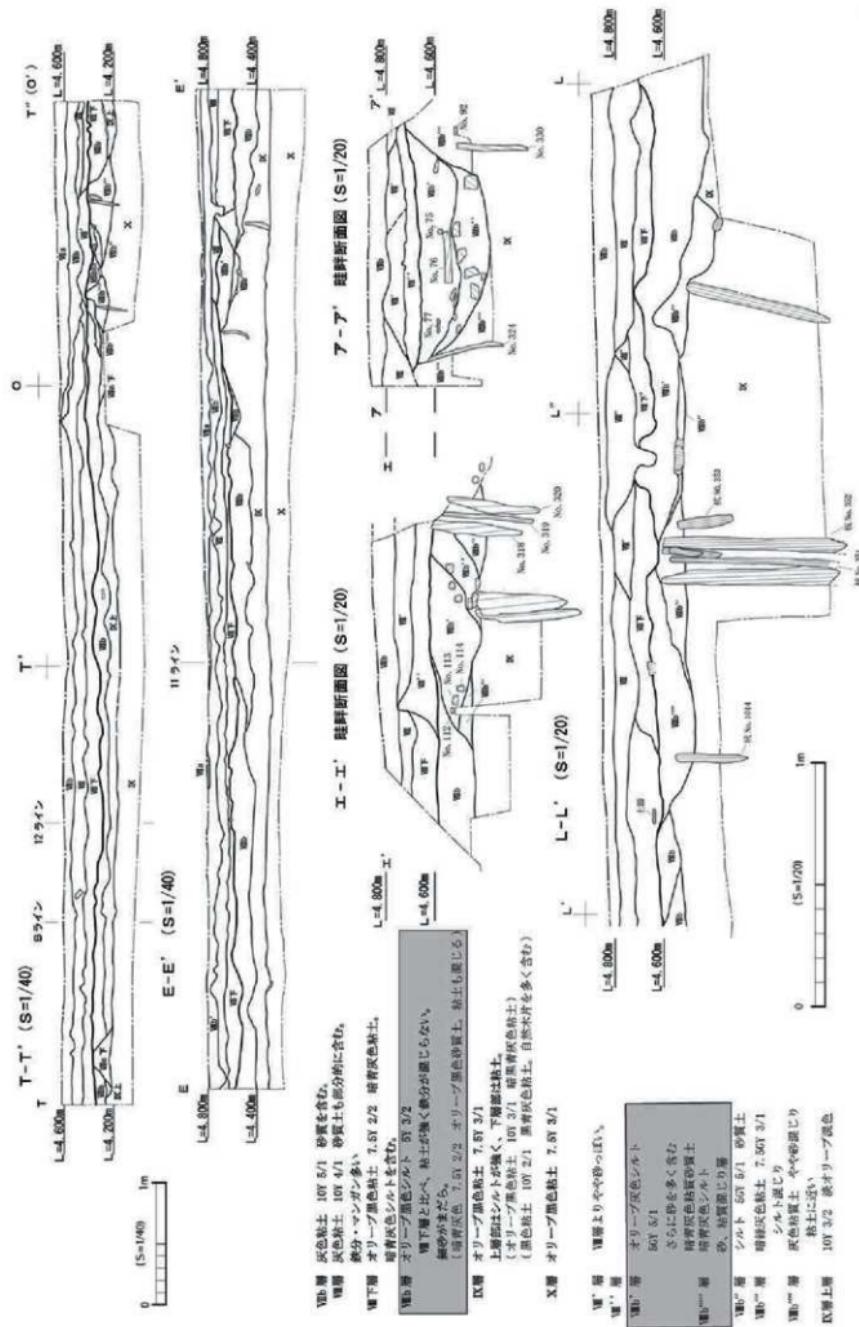


图 13 Vib 层 喷薄 (喷逸) 断面图 1 (1/40) (1/20)

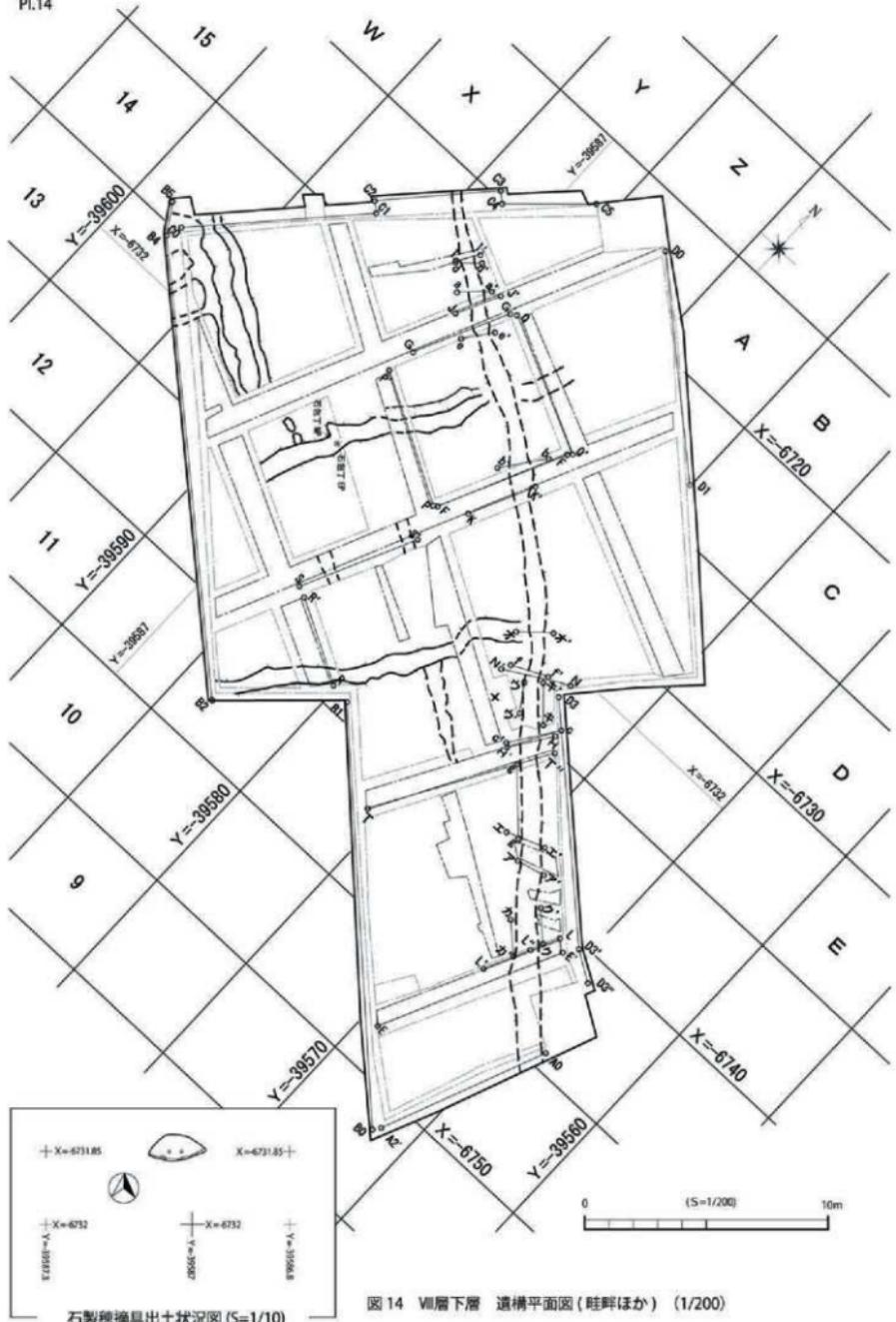


図 14 VII層下層 遺構平面図(畦畔ほか) (1/200)

石製穂摘具出土状況図 (S=1/10)

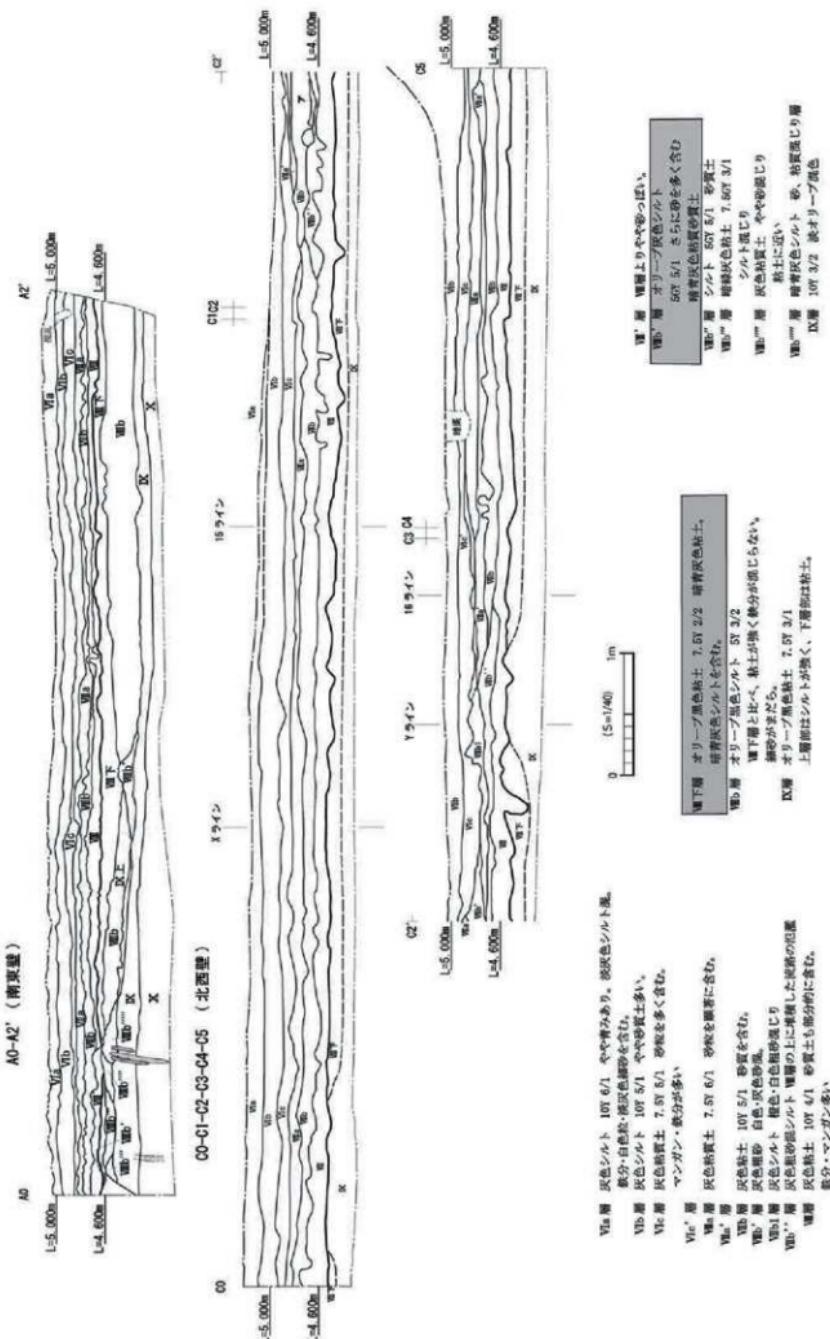


図15 Ⅲ層下層 基本土層図1(南東・北西壁) (1/40)

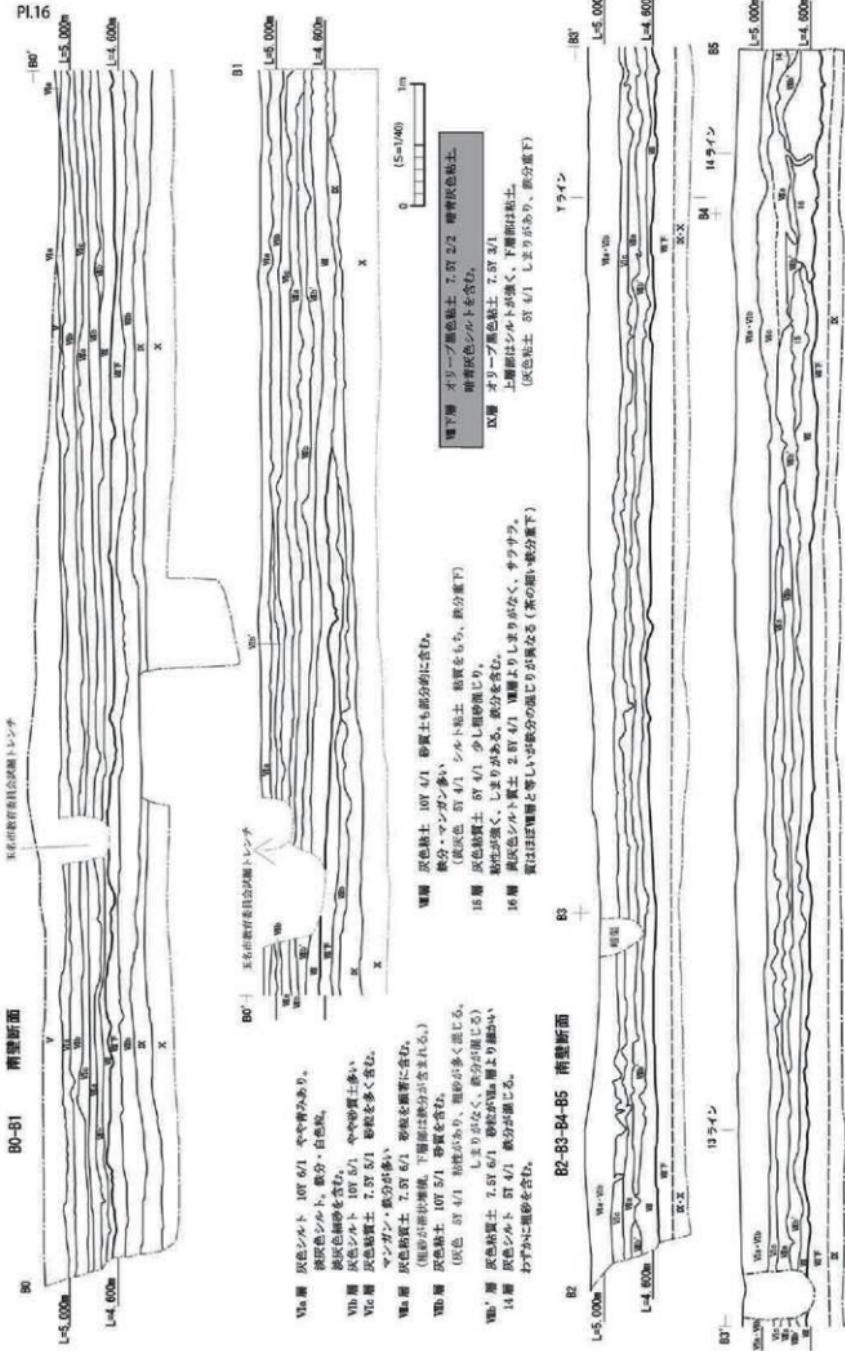


図 16 VIII層下層 基本土層図2(南西壁) (1/40)

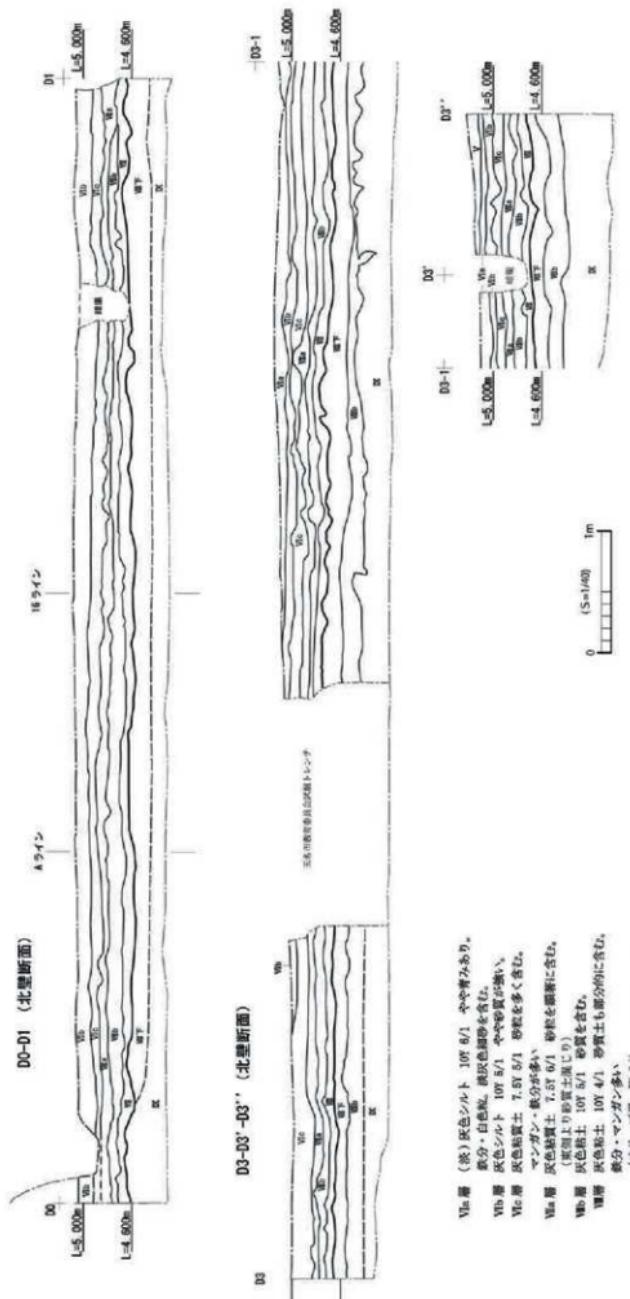


図 17 Vn層下層 基本土層図3(北里壁) (1/40)

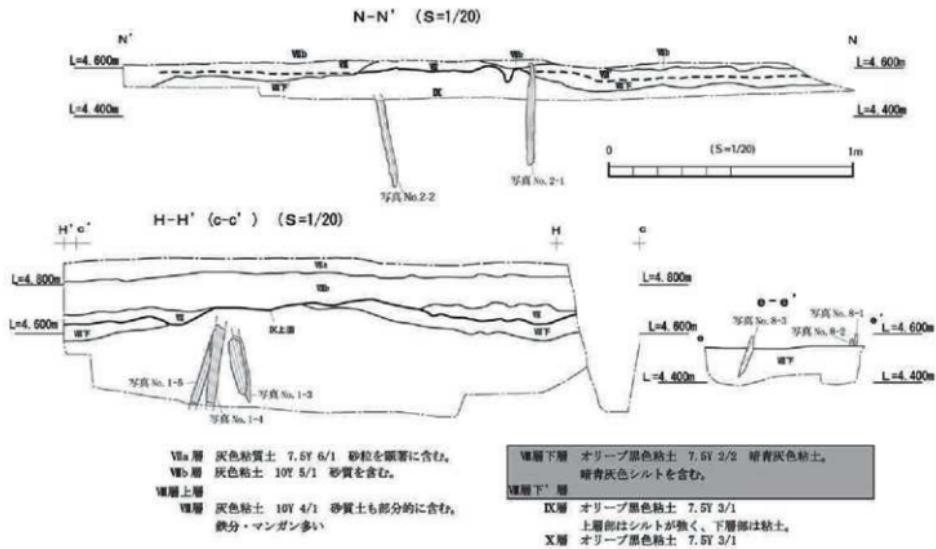
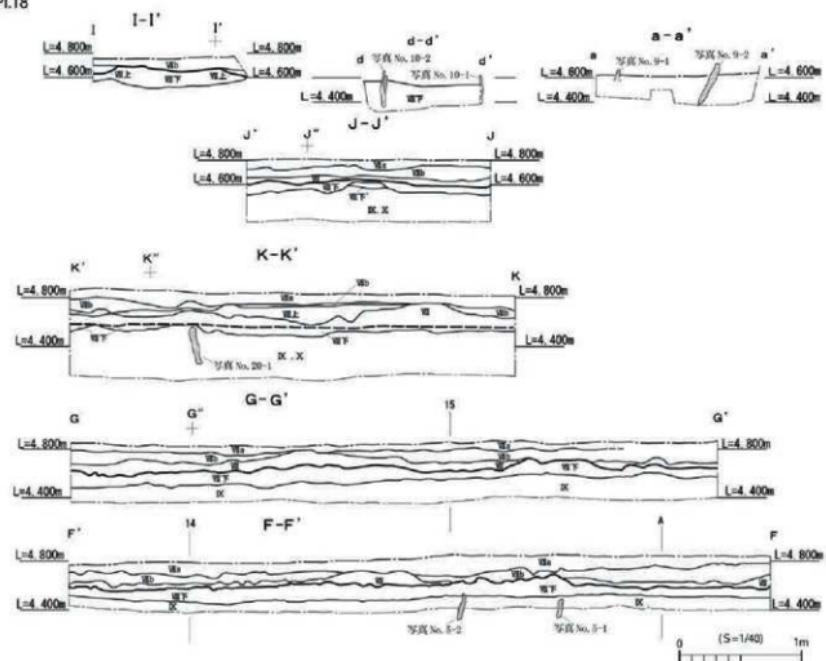


図 18 VII層下層 咲畔 (関連) 断面図 1 (1/40) (1/20)

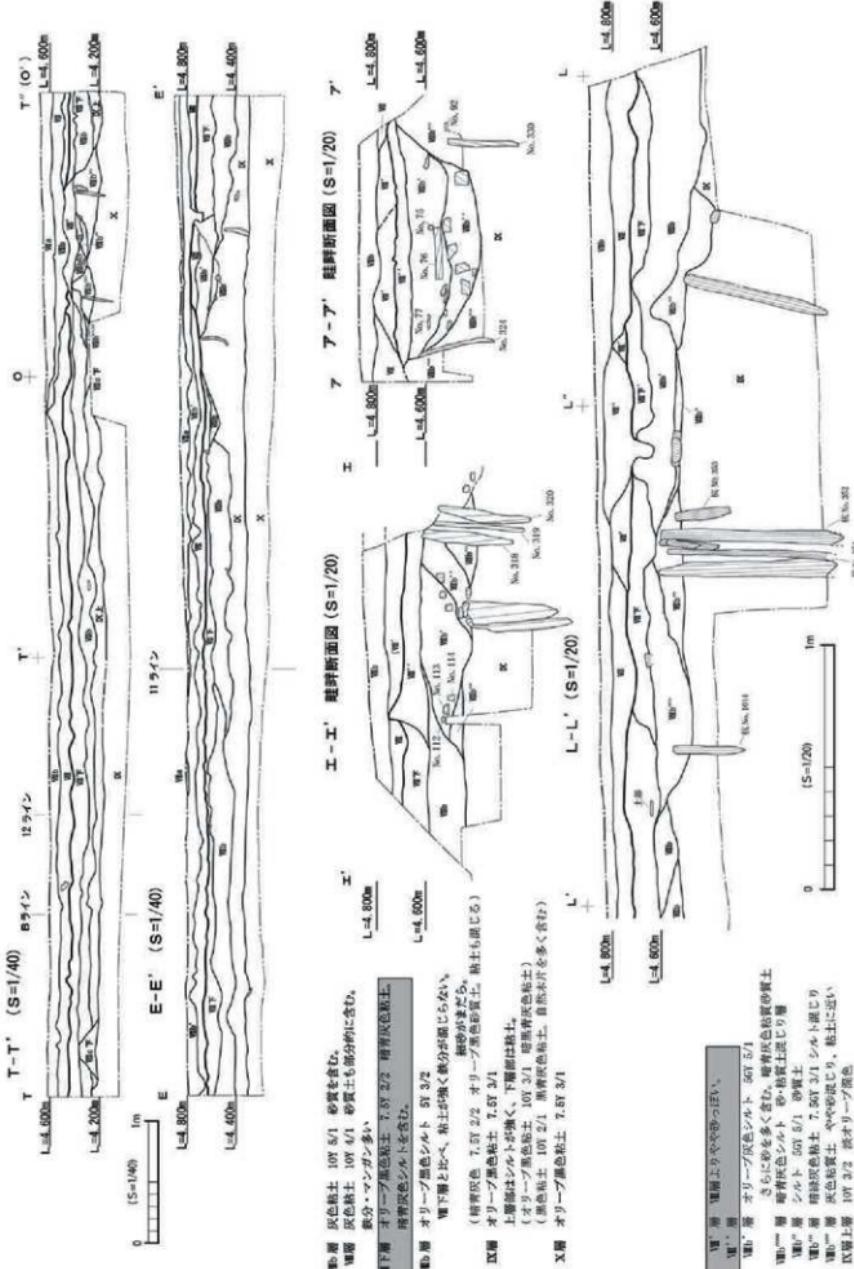


图 19 咽下层 (咽迷) 断面图 2 (1/40) (1/20)

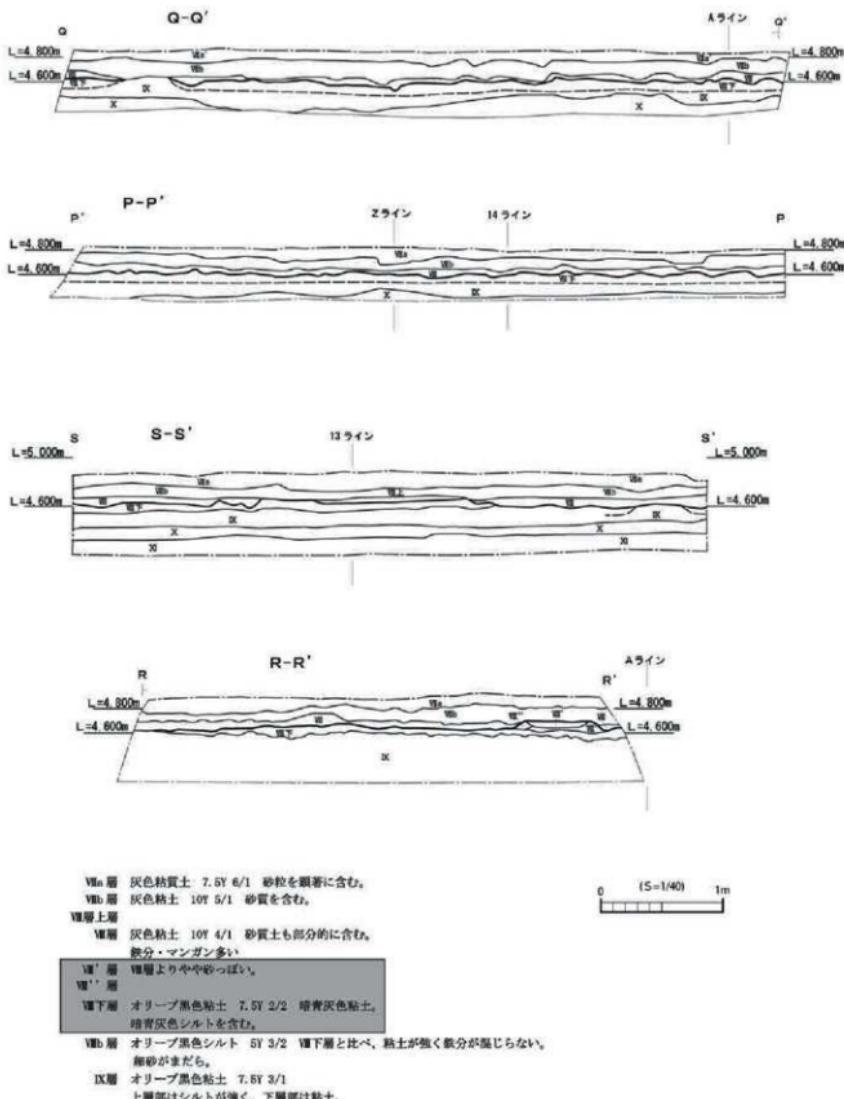
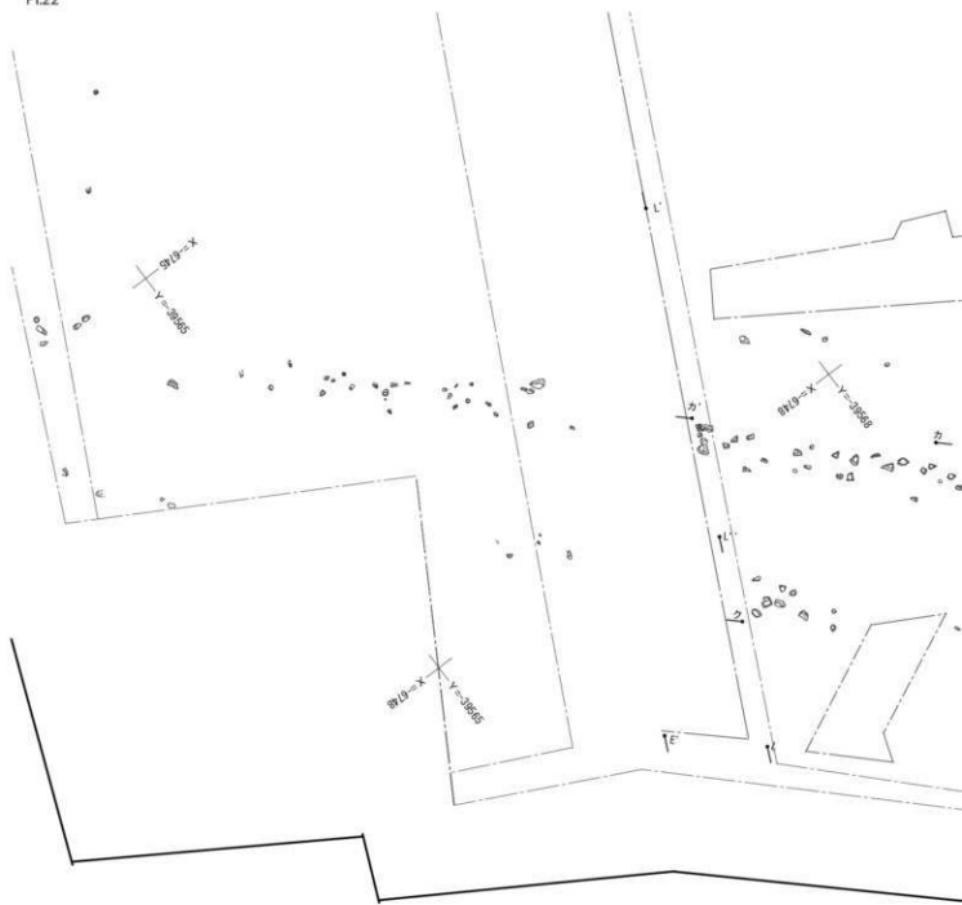


図 20 VII層下層 眇畔 (関連) 断面図 3 (1/40)





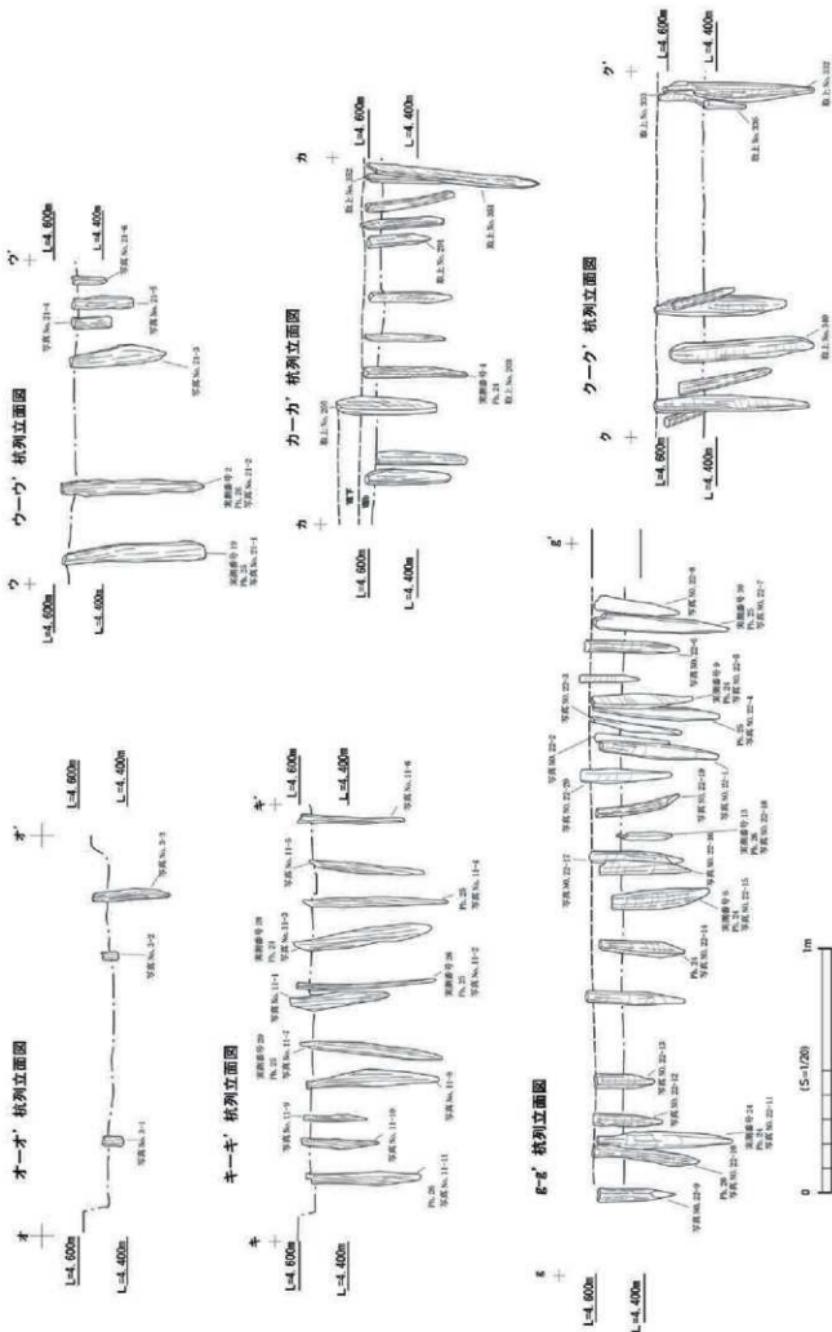


図 23 VIII層下層・VIIb層ほか杭列立面圖 (1/20)

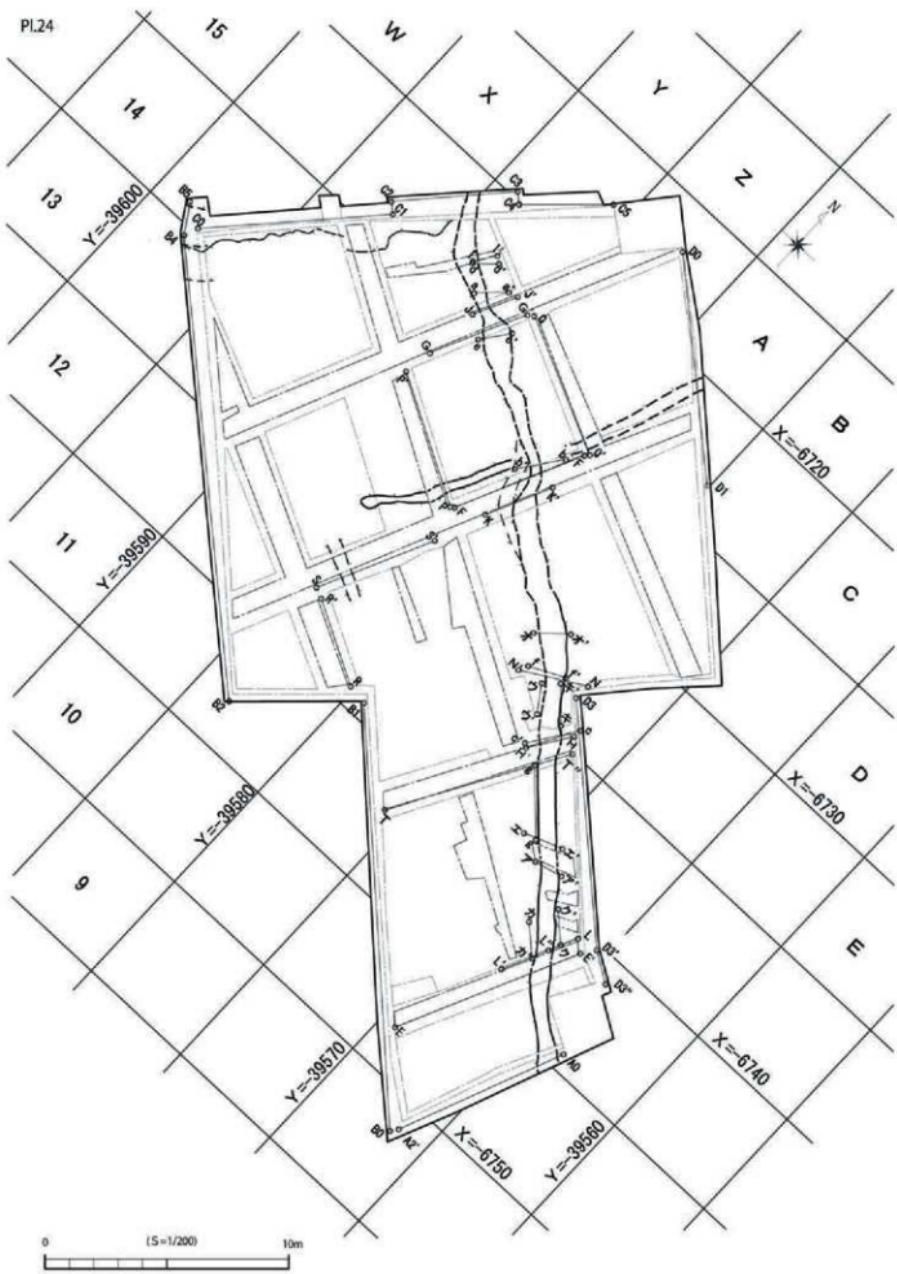


図 24 VII層 遺構平面図(珪畔ほか) (1/200)

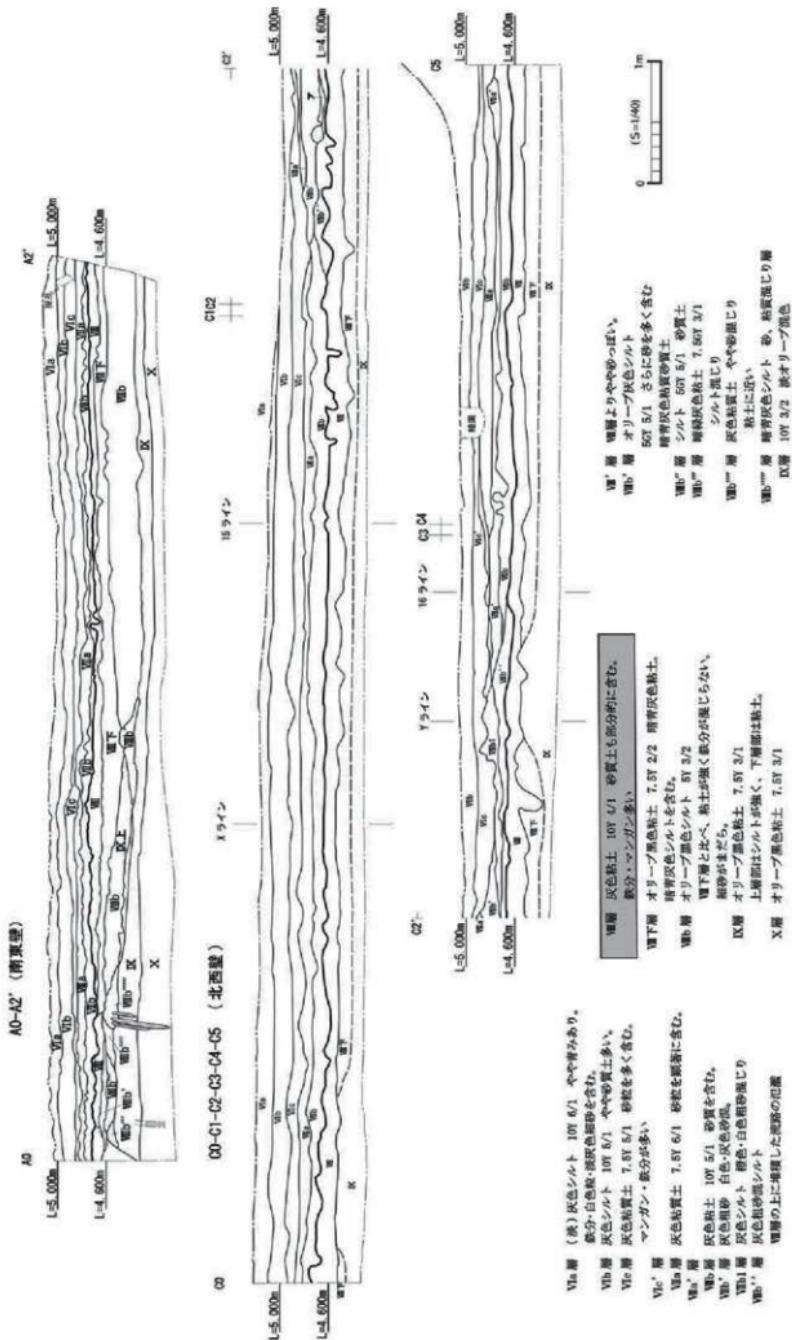


圖 25 VIII 層 基本土層圖 1 (南東・北西鑿) (1/40)

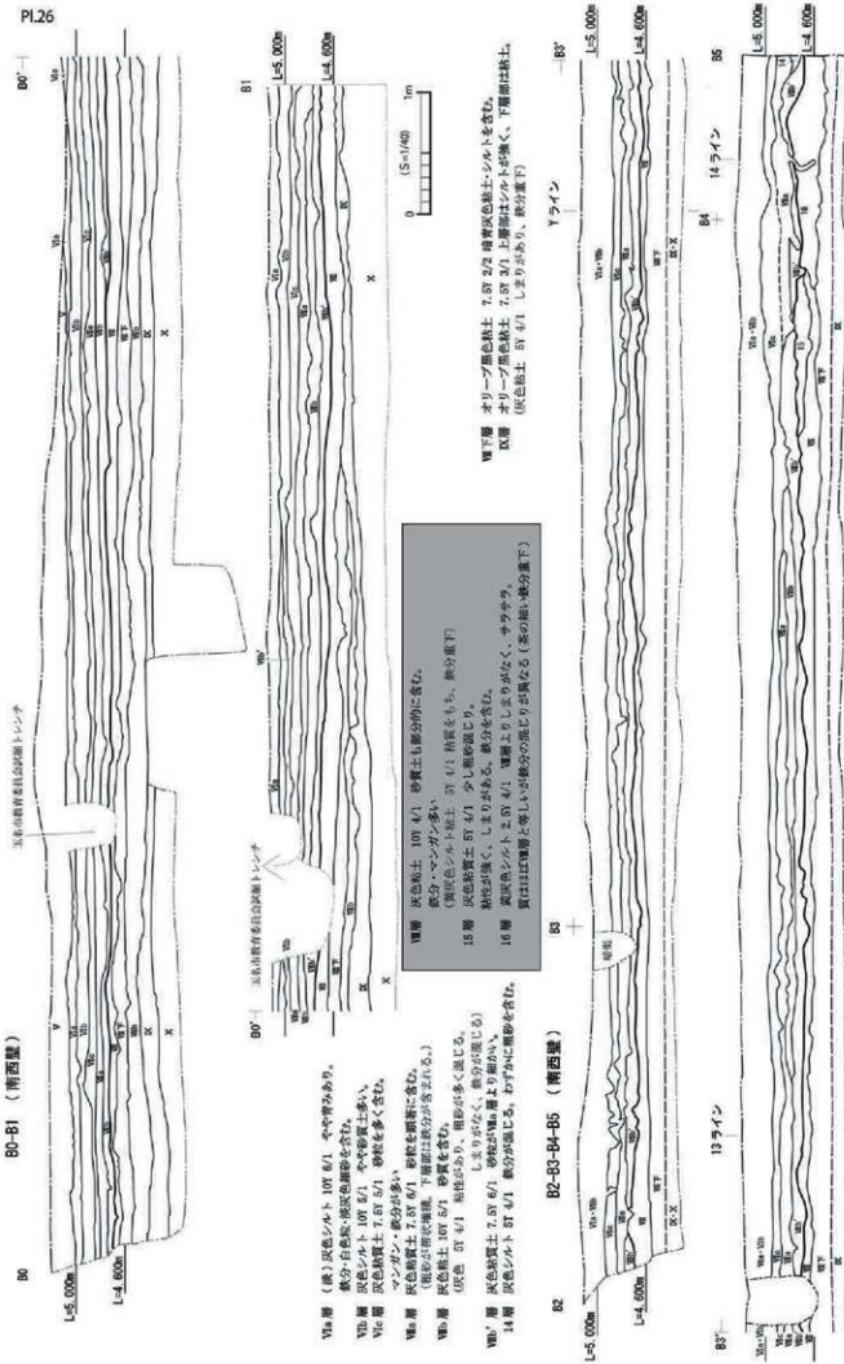


図 26 VIII 層 基本土層図 2 (南西壁) (1/40)

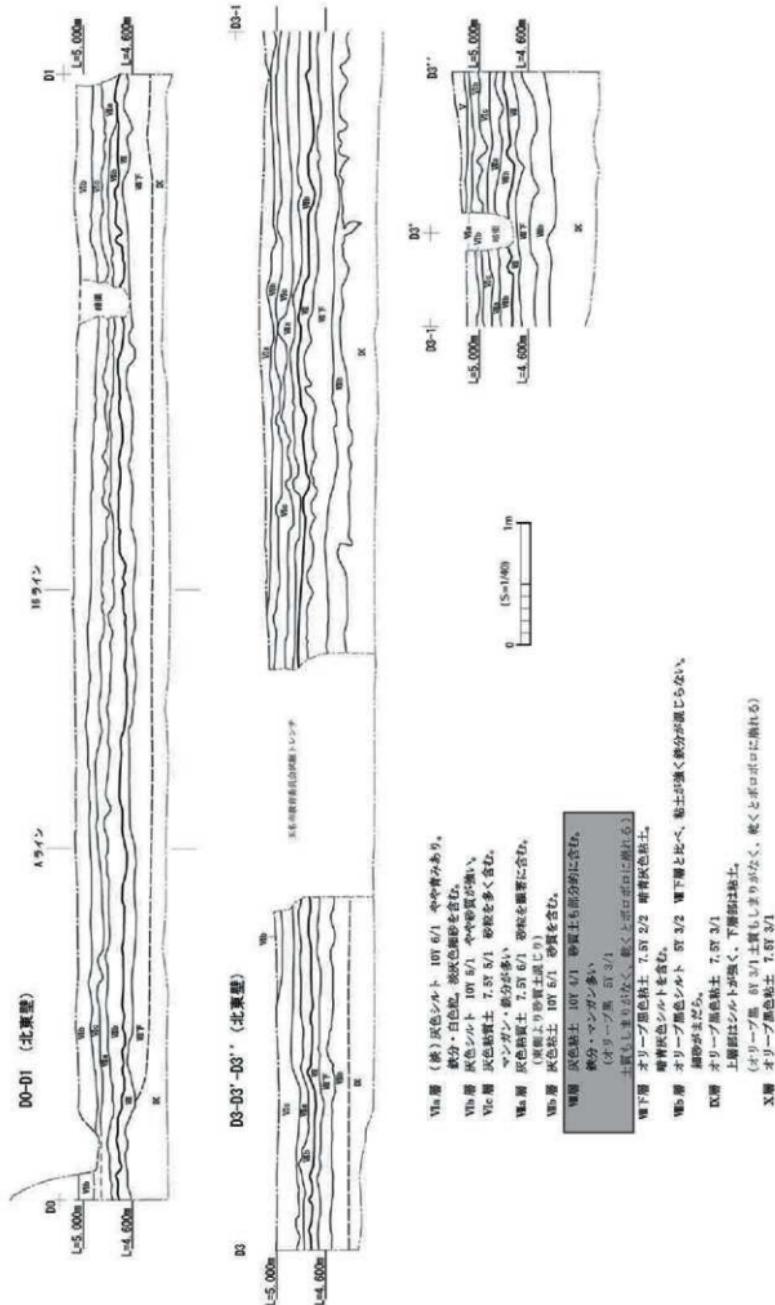
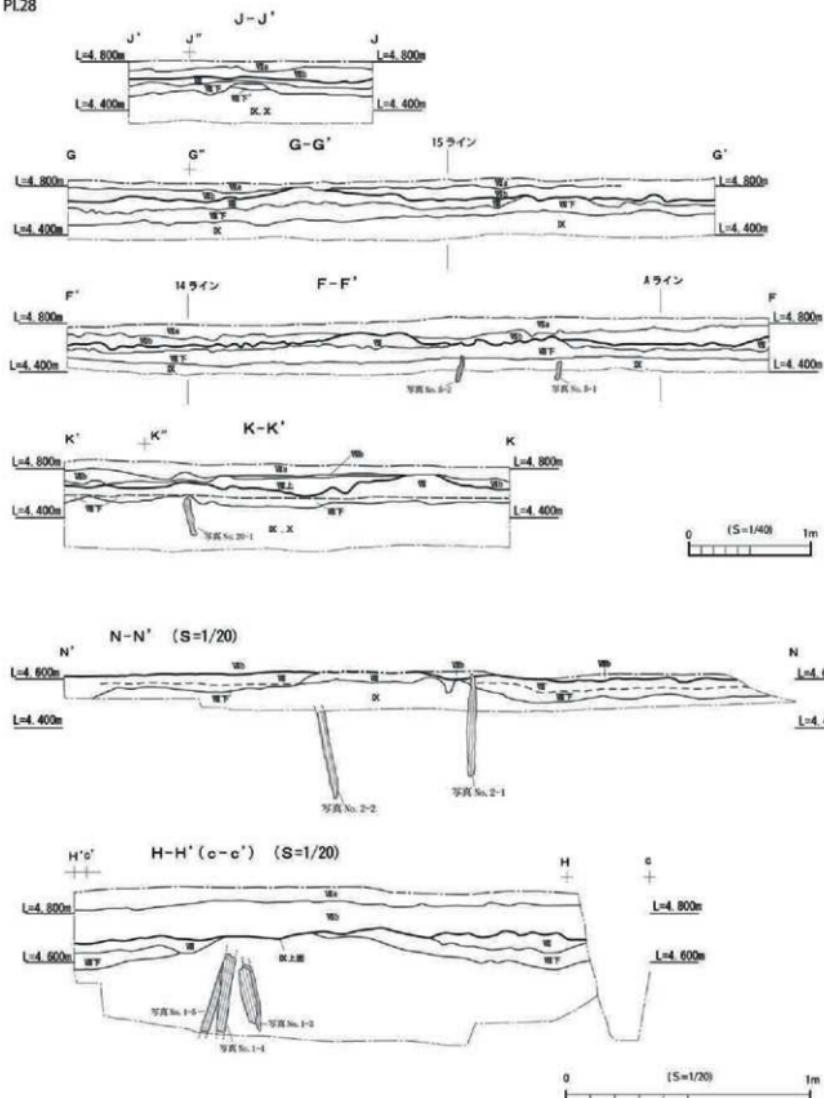


図 27 VI圖 基本土層図 3 (北東壁) (1/40)



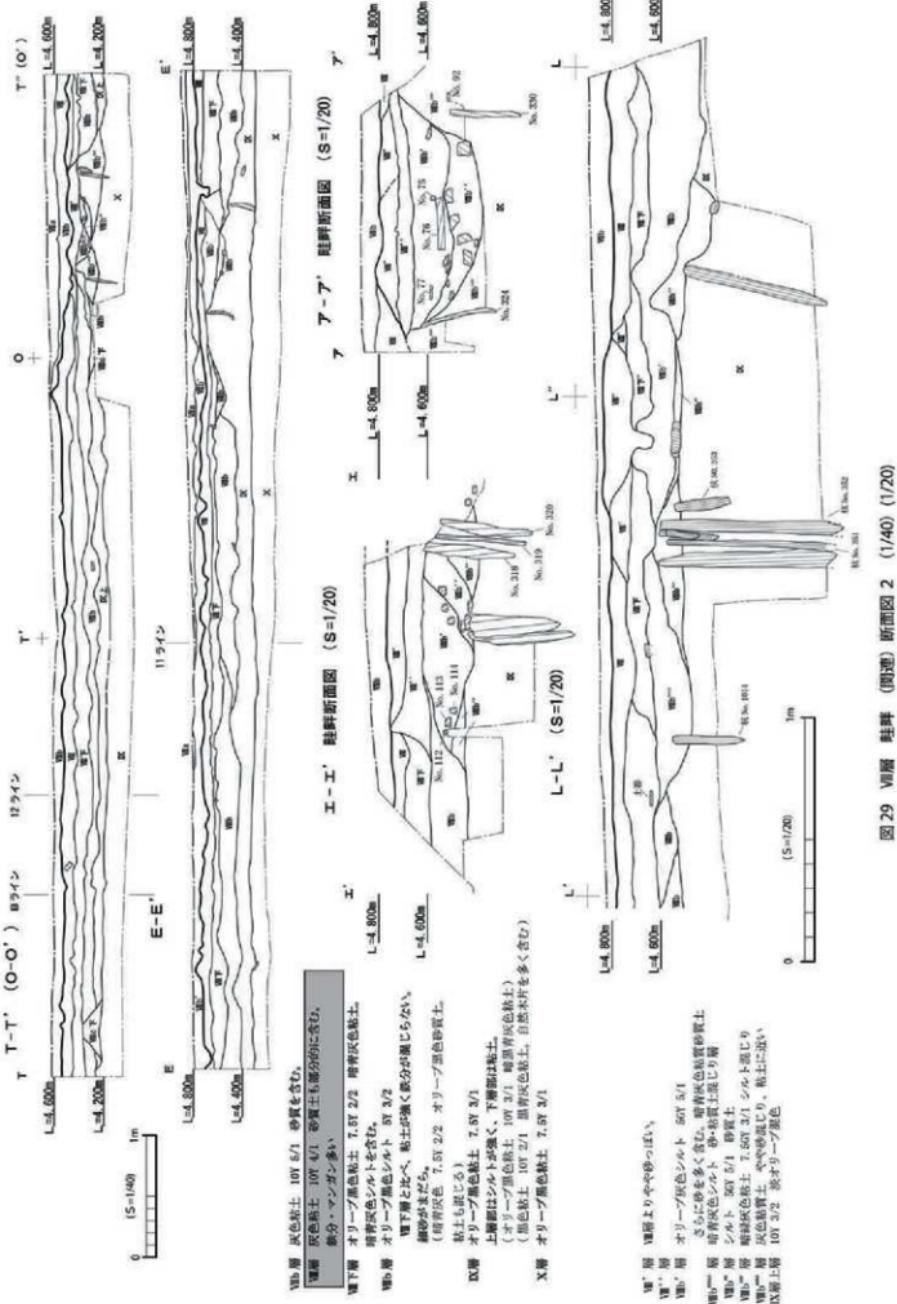
VIIa 層 灰色粘質土 7.8Y 6/1 砂粒を顆粒に含む。  
VIIb 層 灰色粘土 10Y 5/1 砂質を含む。

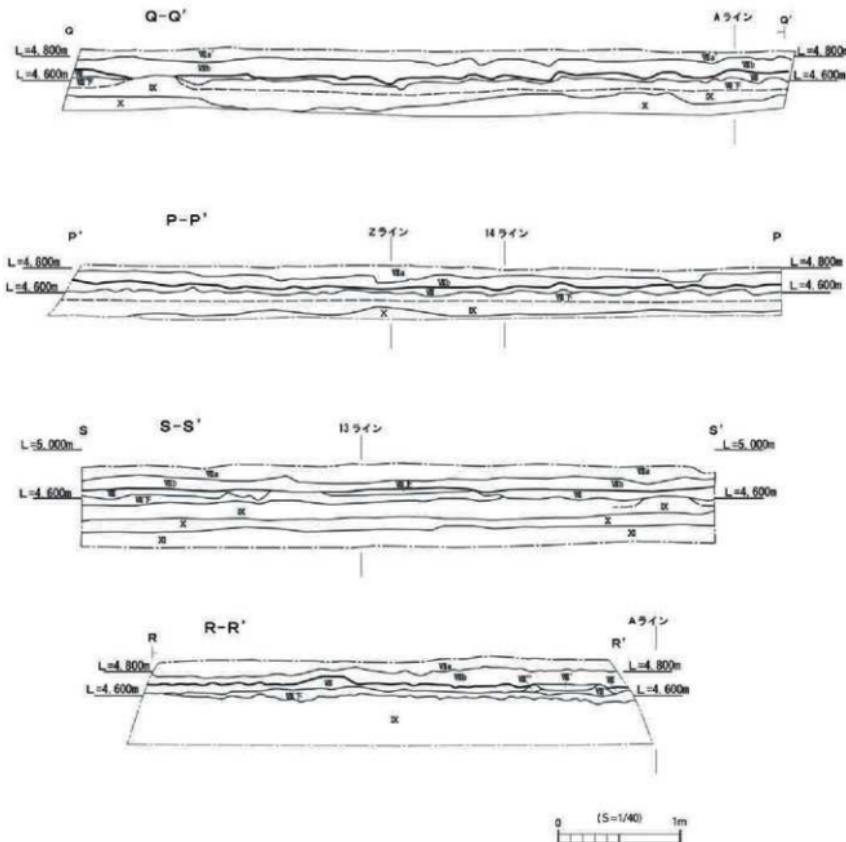
Ⅶ層 上層 灰色粘土 10Y 4/1 砂質も部分的に含む。  
鉄分・マンガン多い。

VIIa 層 オリーブ黒色粘土 7.8Y 2/2 増青灰色粘土。  
暗青灰色シルトを含む。

VIIb 層 下層  
Ⅶ層 下層  
Ⅷ層 オリーブ黒色粘土 7.8Y 3/1  
上層部はシルトが強く、下層部は粘土。  
X 層 オリーブ黒色粘土 7.8Y 3/1

図 28 VII層 哇畔 (関連) 断面図 1 (1/40) (1/20)





- VII 層 灰色粘質土 7.5Y 6/1 砂粒を顕著に含む。  
 VIIb 層 灰色粘土 10Y 5/1 砂質を含む。
- |        |                                            |
|--------|--------------------------------------------|
| VII層上層 | VII層 灰色粘土 10Y 4/1 砂質土も部分的に含む。<br>鉄分・マンガン多い |
|--------|--------------------------------------------|
- VII'' 層 VII層よりやや砂っぽい。  
 VII下層 オリーブ黒色粘土 7.5Y 2/2 暗青灰色粘土。  
暗青色シルトを含む。
- |        |                                                    |
|--------|----------------------------------------------------|
| VIIb 層 | オリーブ黒色シルト 5Y 3/2 VII下層と比べ、粘土が強く鉄分が混じない。<br>細砂がまだら。 |
|--------|----------------------------------------------------|
- IX層 オリーブ黒色粘土 7.5Y 3/1  
 上層部はシルトが強く、下層部は粘土。

図 30 VII層 畦畔 (関連) 断面図 3 (1/40)

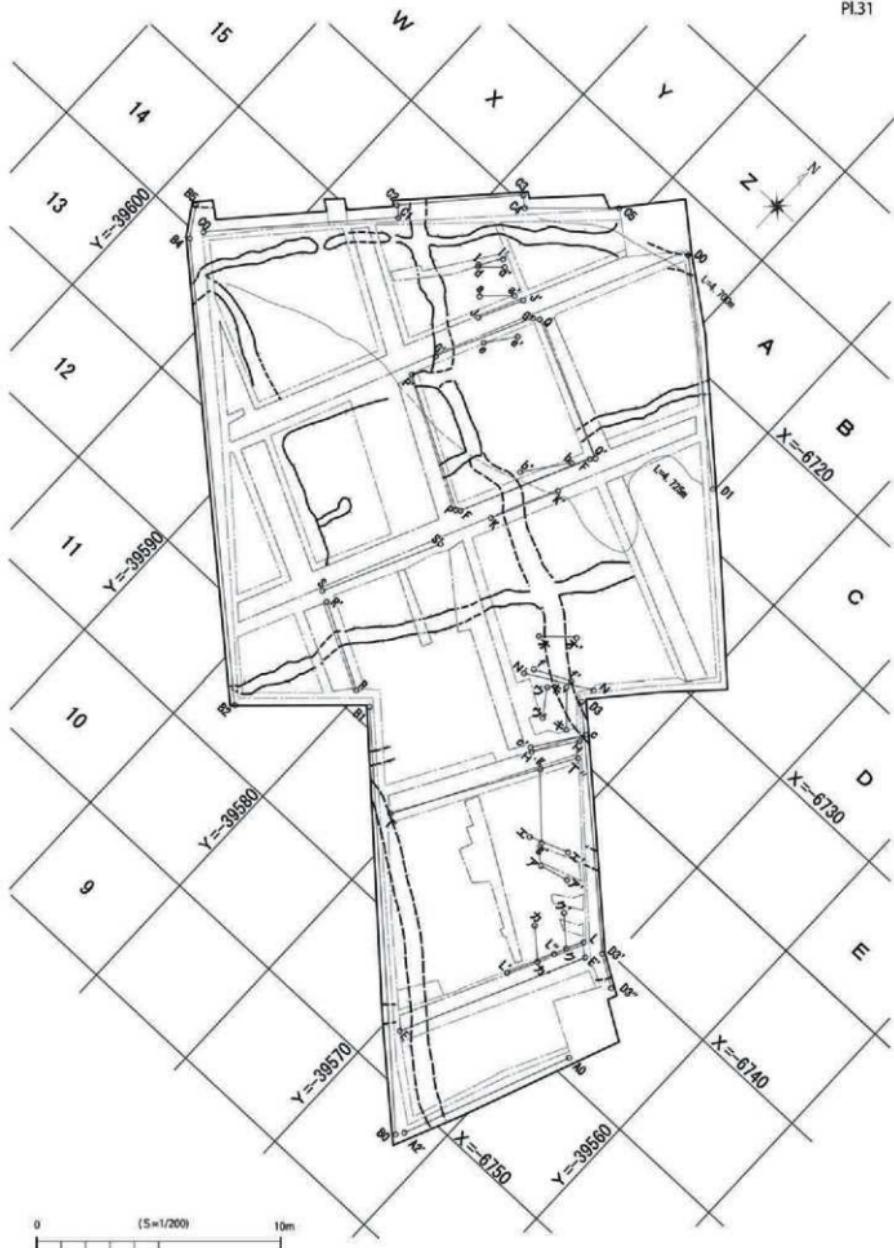


図 31 VIIb 層 遺構平面図 (蛙群ほか) (1/200)

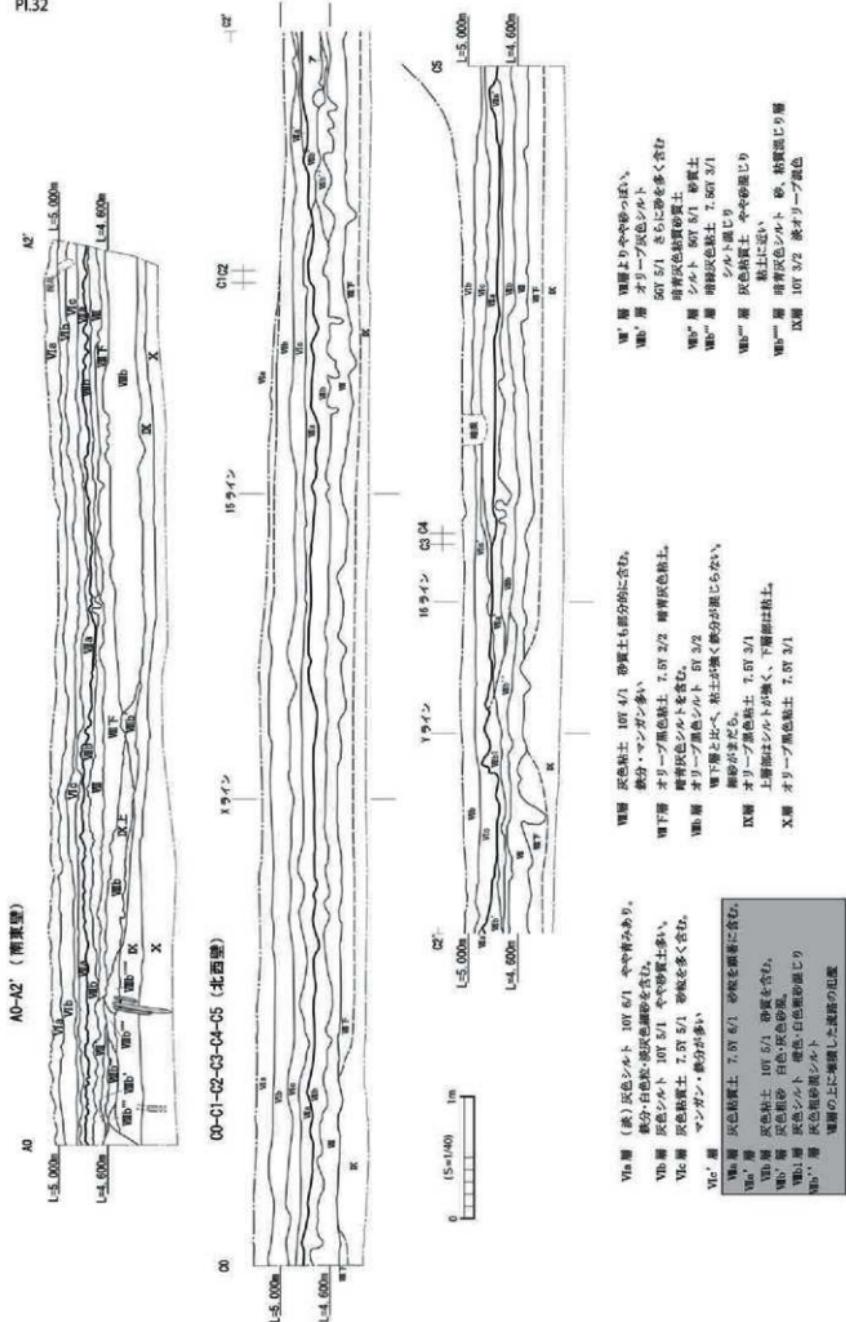


図 32 Vib 層 基本土層図 1 (南東・北西壁) (1/40)

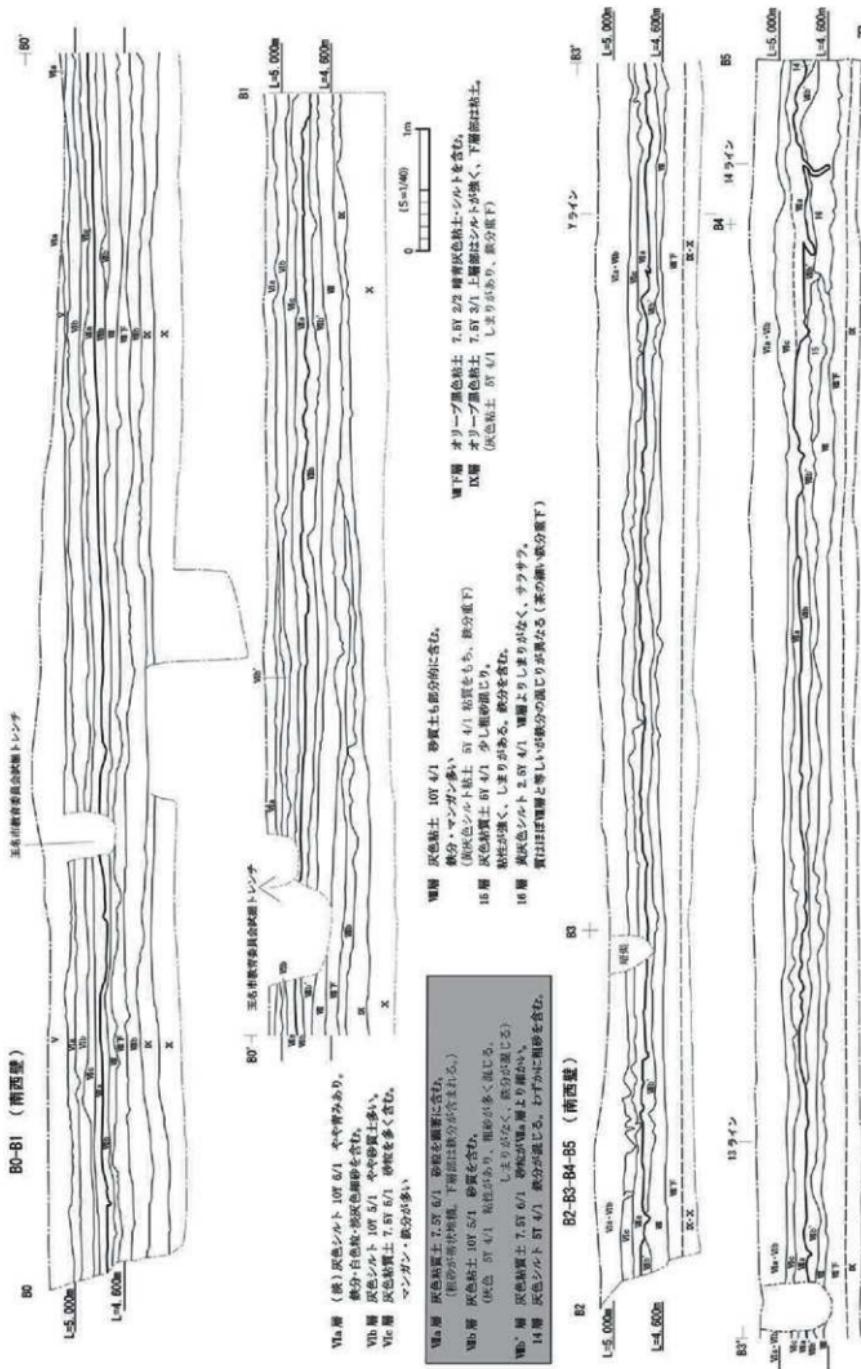


図33 Vib層 基本土層図2(南西壁) (1/40)

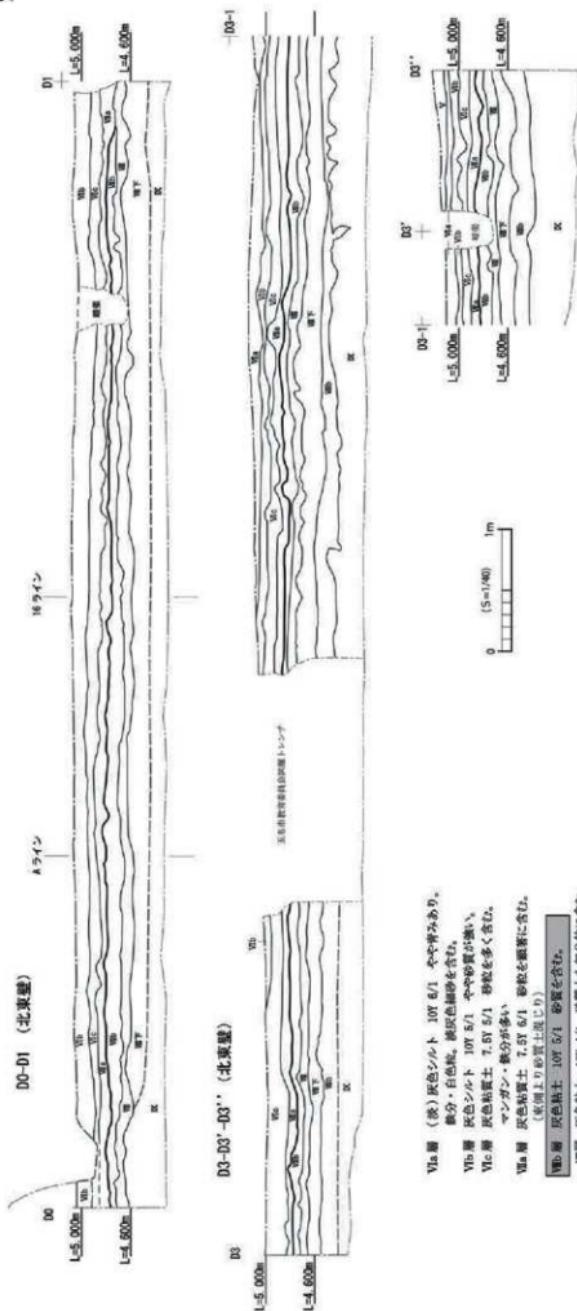


図 34 VIIb 層 基本土層図 3 (北東壁) (1/40)

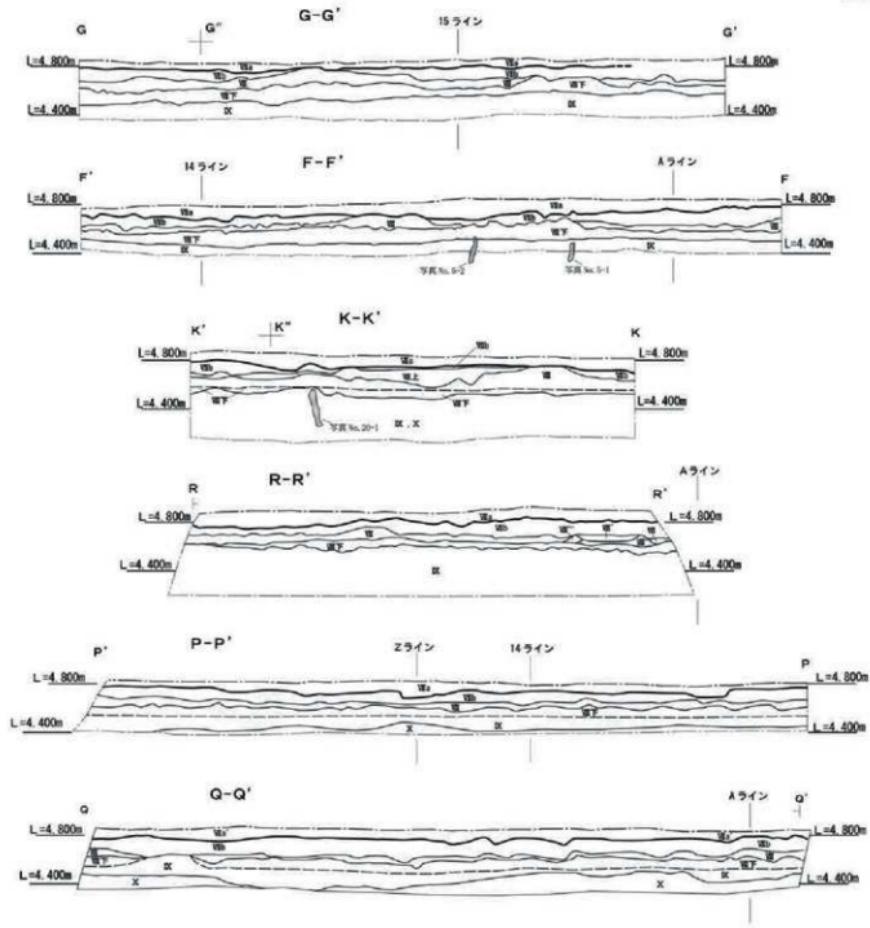


図 35 VIIb 層 胎畔 (関連) 断面図 1 (1/40)

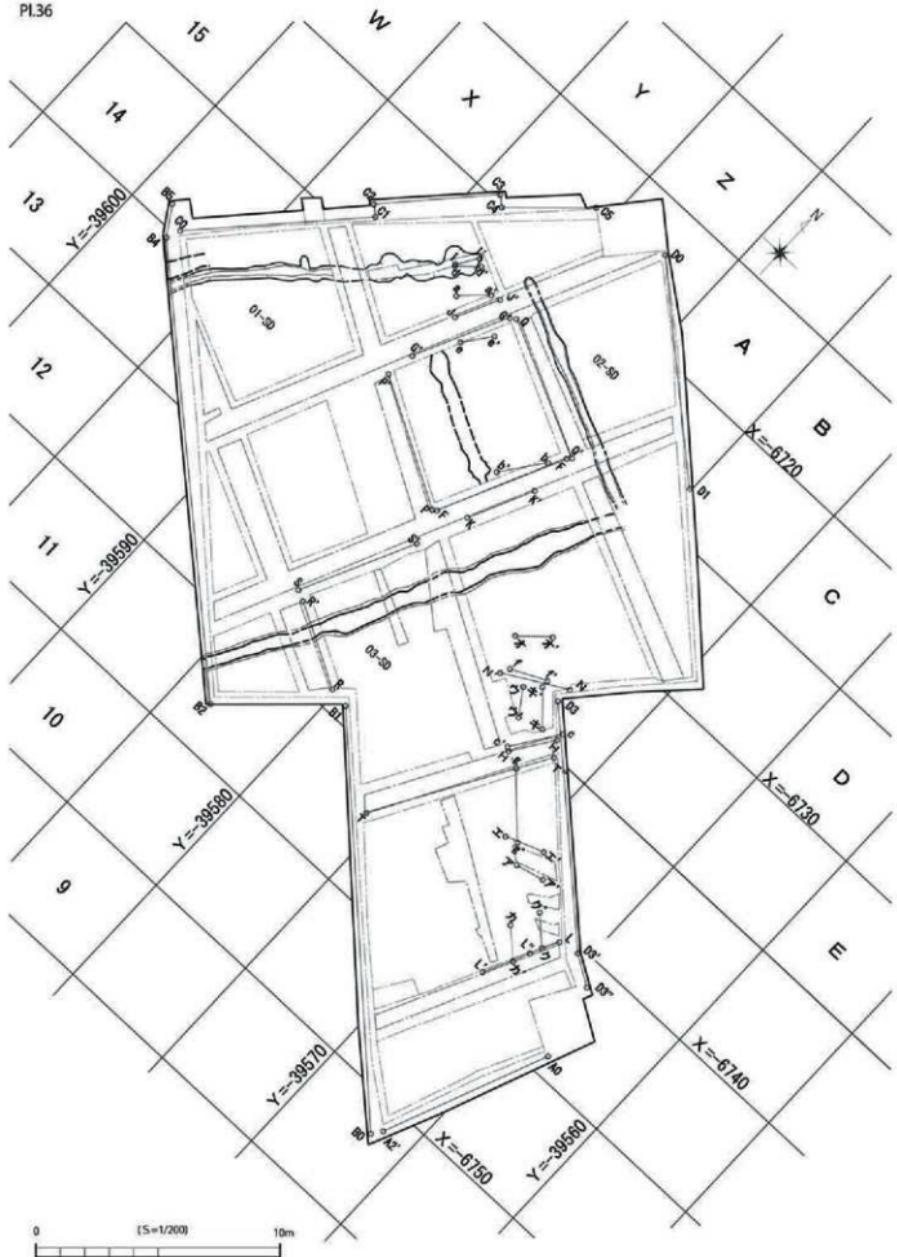


図 36 Villa 層 造構平面図 (畦畔ほか) (1/200)

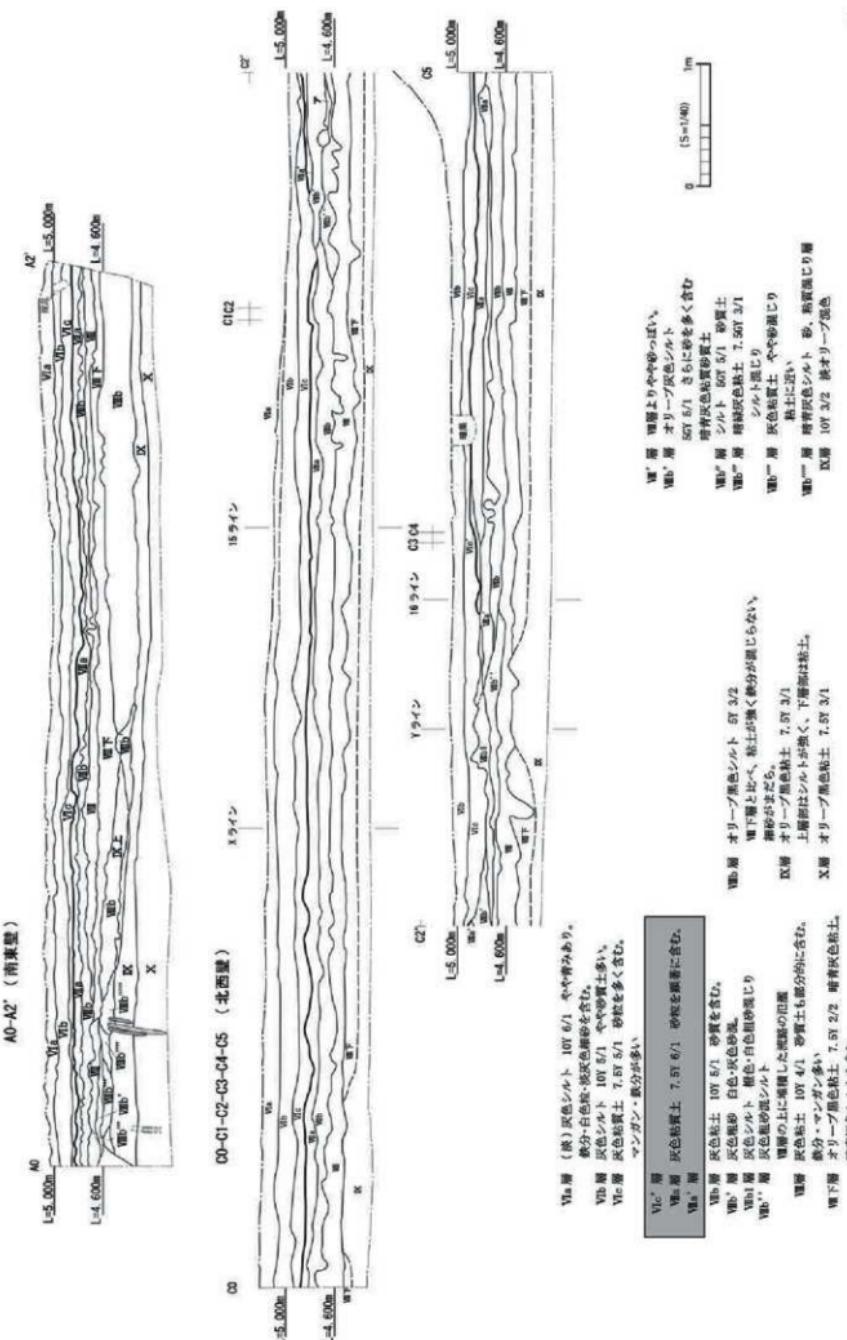


圖 37 Villa 層 基本土層圖 1 (南東・北西壁) (1/40)

## 主な岩層名と其の特徴トレース

B0-B1 (南西壁)

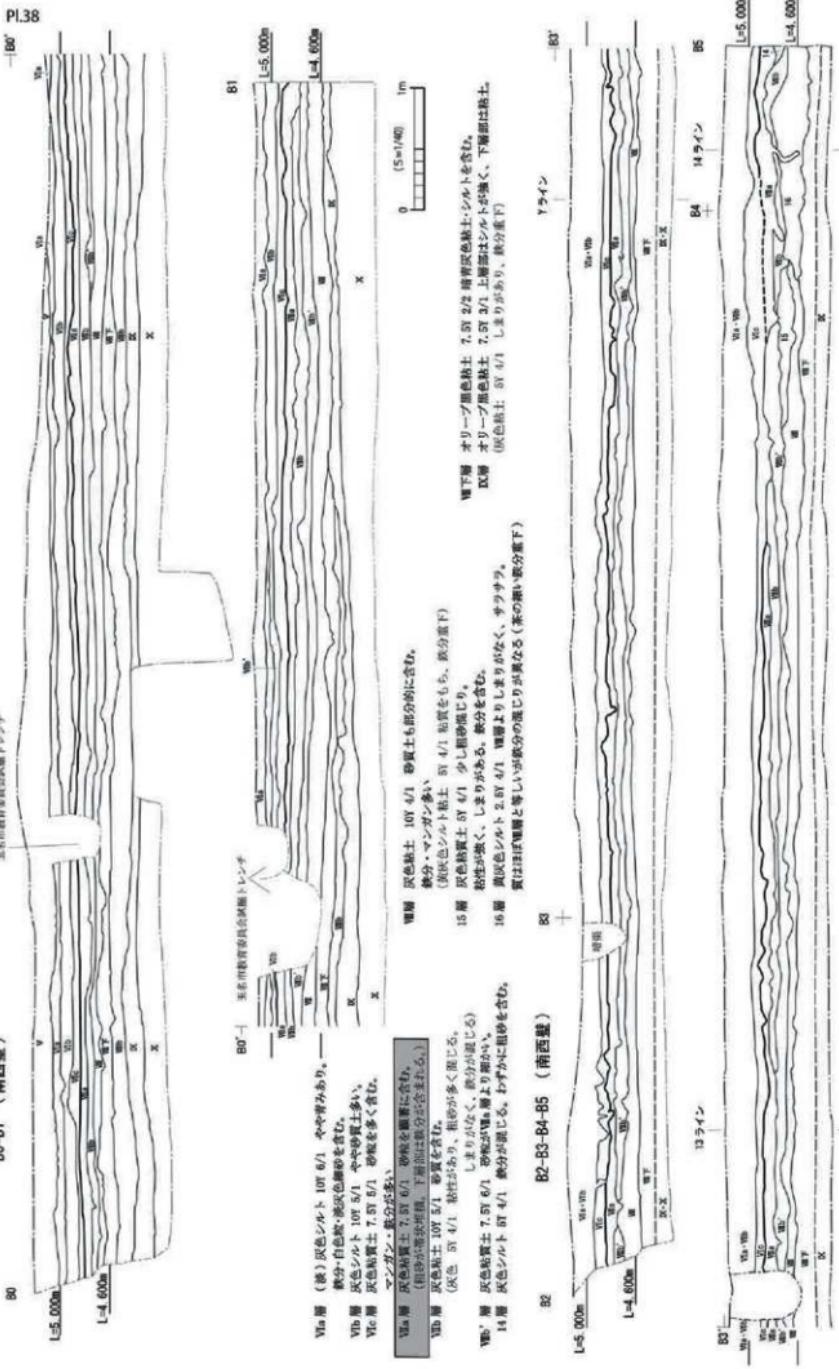


図 38 Vila 層 基本土層図 2 (南西壁) (1/40)

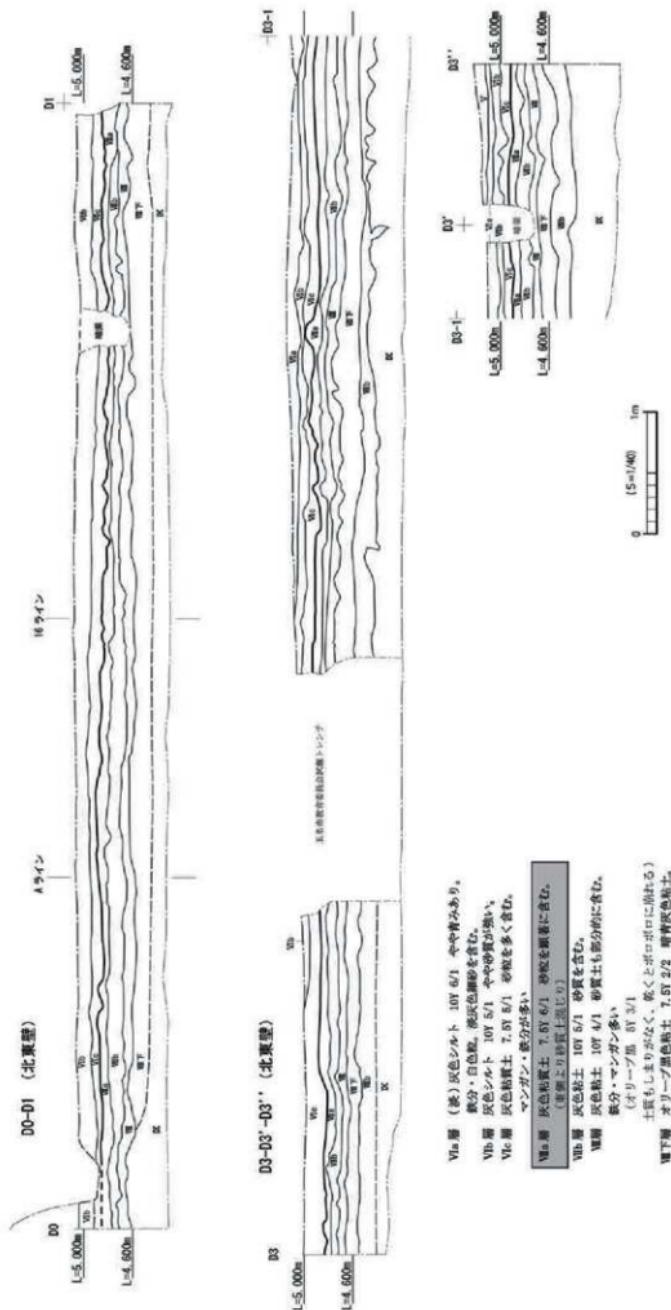
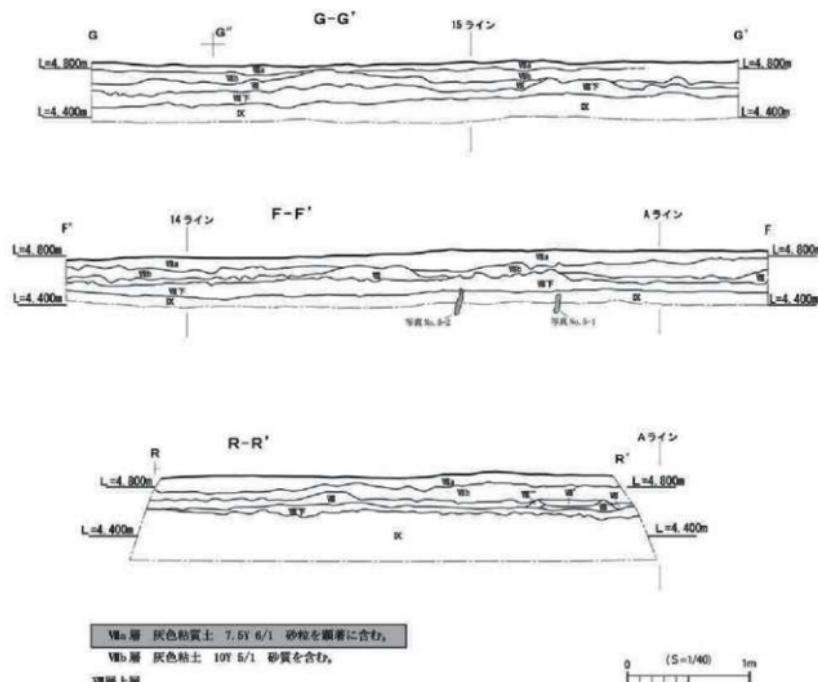


図 39 Vila 層 基本土層図 3 (北東壁) (1/40)



VIIa 層 灰色粘質土 7.5Y 6/1 砂粒を顕著に含む。

VIIb 層 灰色粘土 10Y 5/1 砂質を含む。

Ⅶ層上層  
堆積 灰色粘土 10Y 4/1 砂質土も部分的に含む。  
鉄分・マンガン多い。

Ⅶ' 層  
Ⅶ'' 層  
Ⅶ''' 層  
Ⅶ下層  
Ⅷ上層  
Ⅷ下層  
Ⅸ層  
Ⅹ層

Ⅶ下層 オリーブ黒色粘土 7.5Y 2/2 増青灰色粘土。  
暗青灰色シルトを含む。

Ⅷ上層 オリーブ黒色シルト 5Y 3/2 Ⅶ下層と比べ、粘土が強く鉄分が混じらない。  
細砂がまだら。

Ⅸ層  
Ⅹ層  
上層部はシルトが強く、下層部は粘土。

Ⅹ層 オリーブ黒色粘土 7.5Y 3/1

0 (S=1/40) 1m

図 40 VIIa 層 猫耳 (関連) 断面図 1 (1/40)

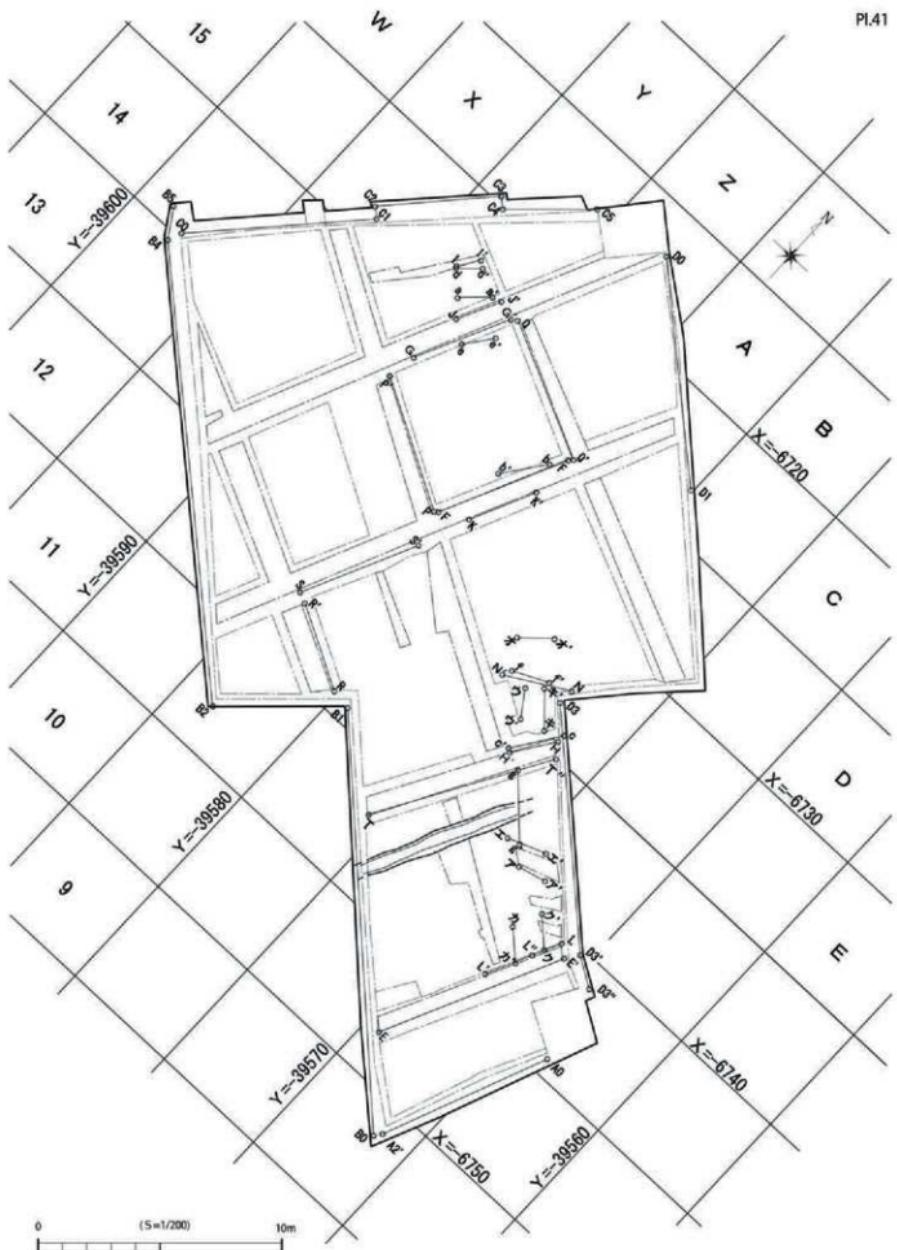


図 41 Vlc 層 造構平面図（珪畔ほか）（1/200）

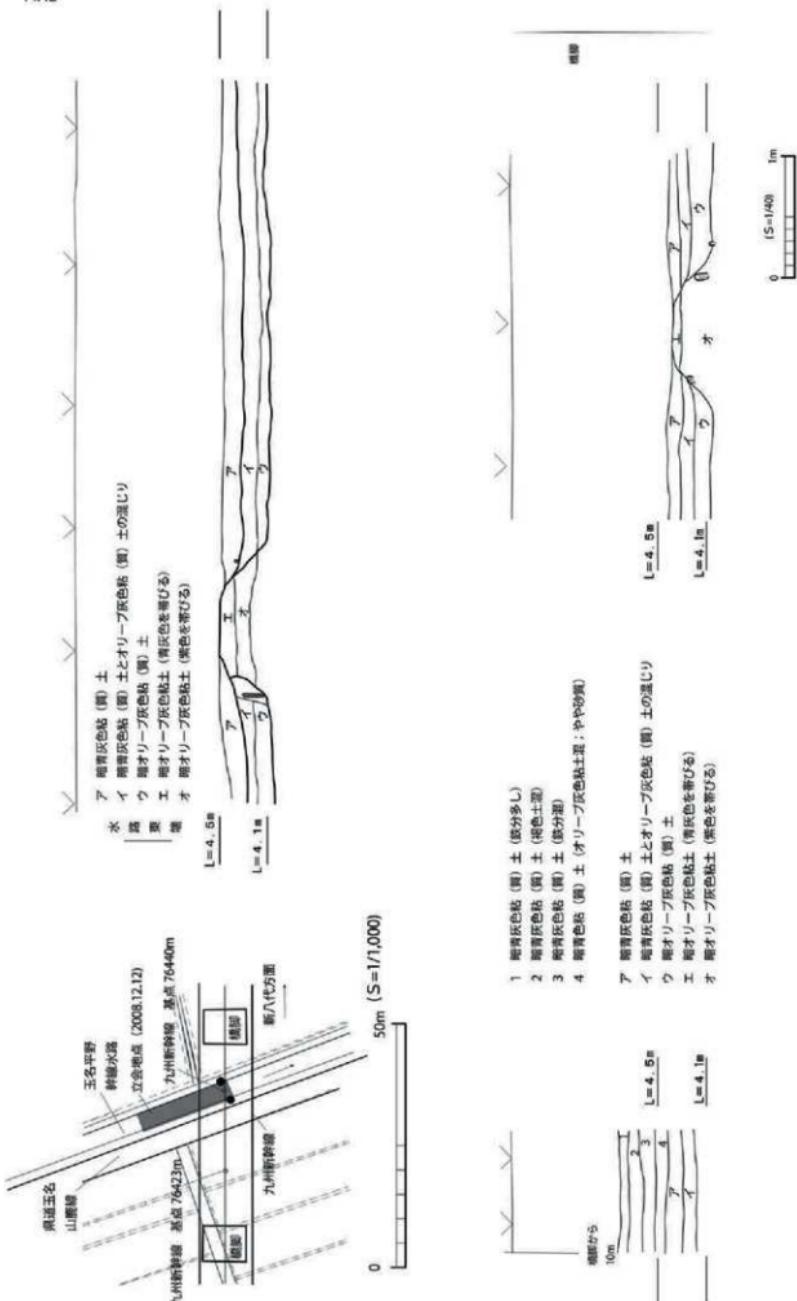


図 42 玉名平野幹線 水路立ち会い調査位置図 (1/1000) 断面図 (1/40)

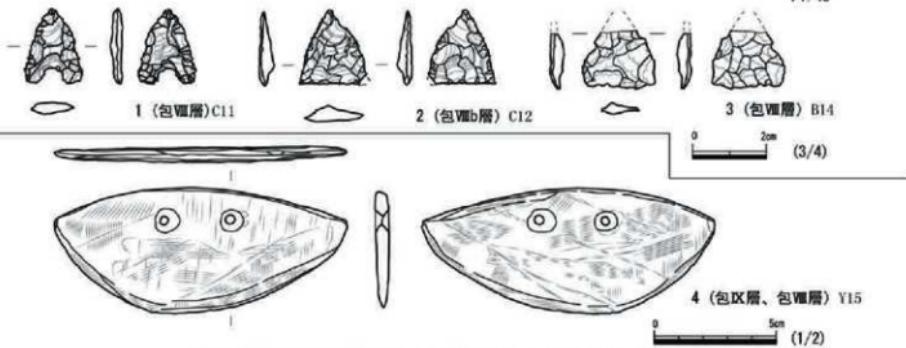


图43 包VII层·包VIIb层出土石器 (打制石器 3/4 · 石刮削器 1/2)

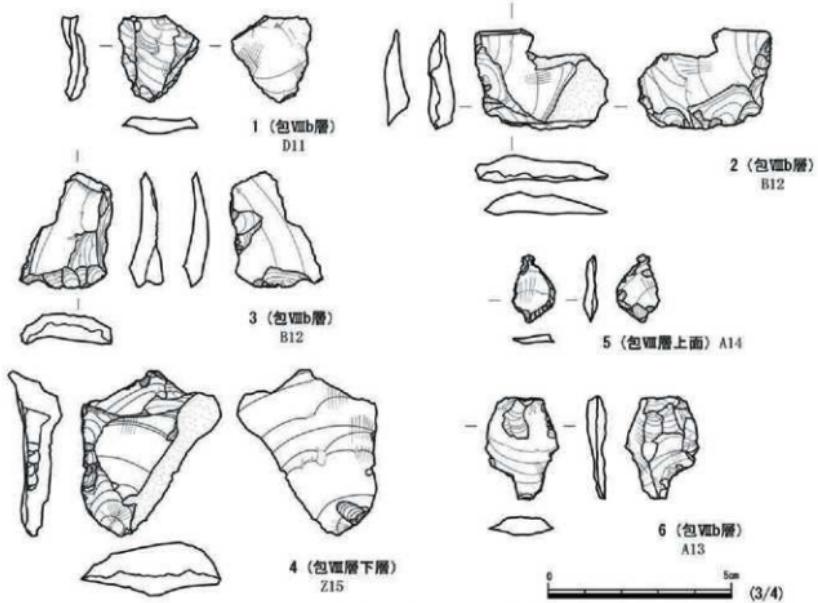


图44 包VIIb~包VIIb层出土石器 (スクレイバー等 3/4)

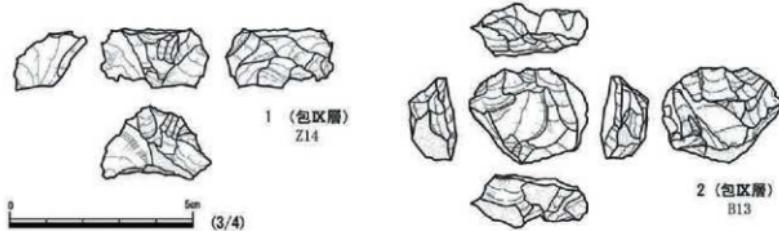


图45 包VII层出土 (石核等 3/4)

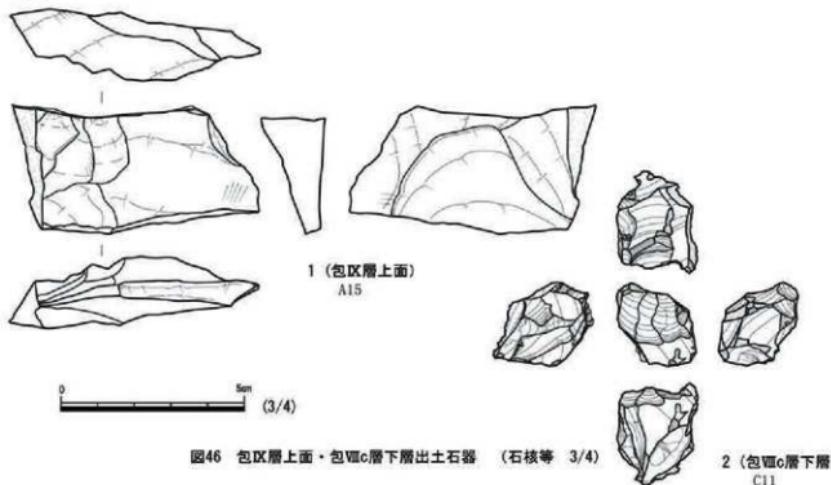


图46 包区层上面·包区c层下层出土石器 (石核等 3/4)

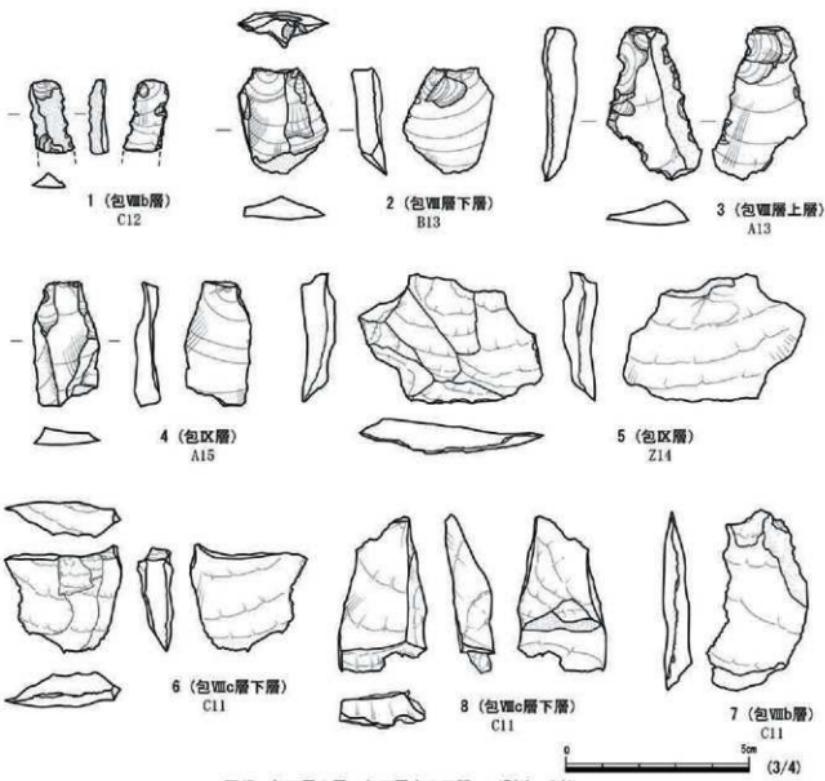
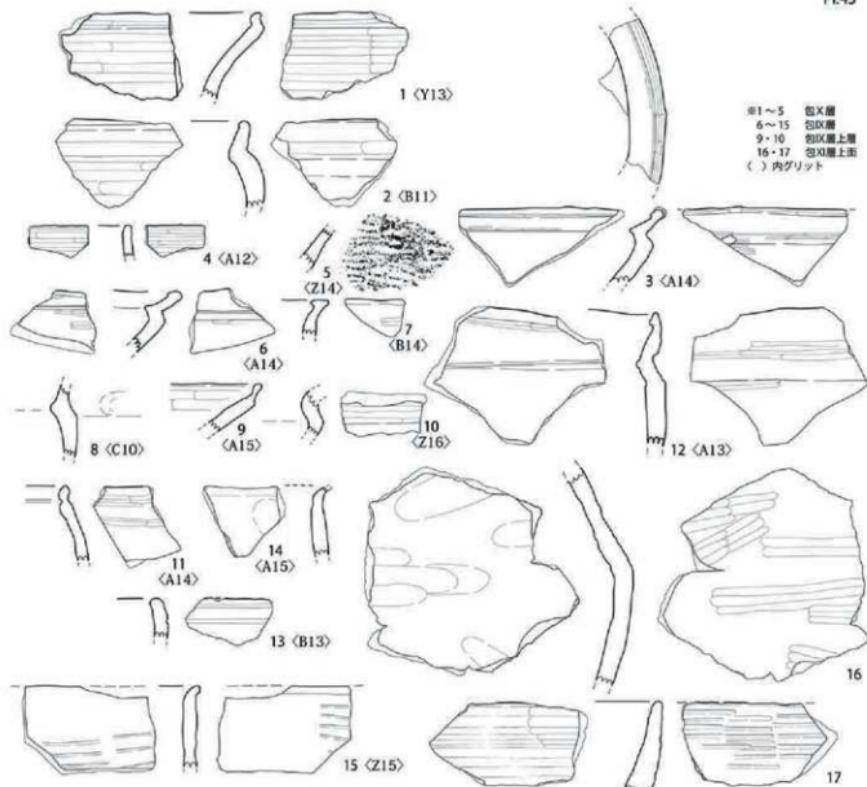
1 (包区层上面)  
A15  
2 (包区c层下层)  
C11

图47 包区层上层~包区层出土石器 (剥片 3/4)

0 5cm (3/4)



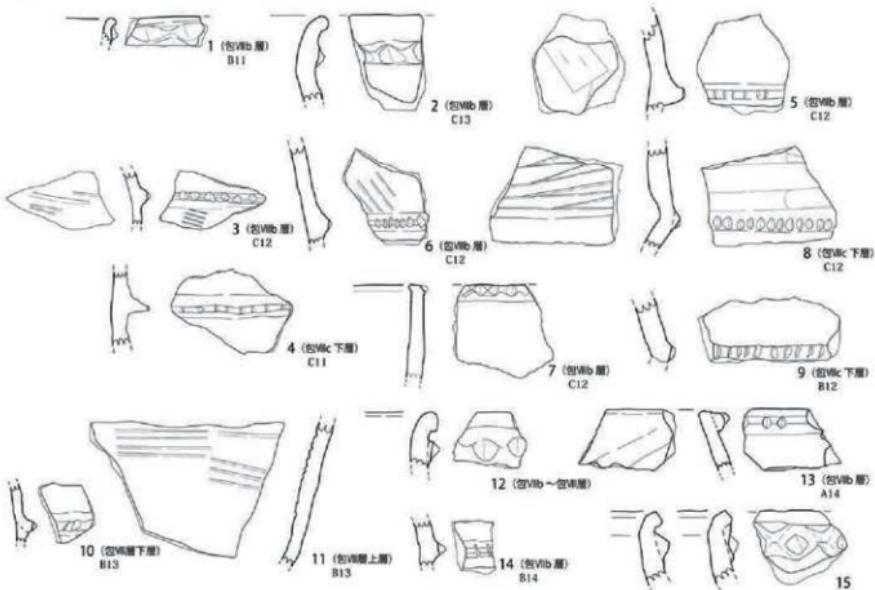


図 50 包Vlb層・包Vlc層・包VIIc層・包Vlb層ほか出土 繩文土器（粗製土器）ほか（1/2）

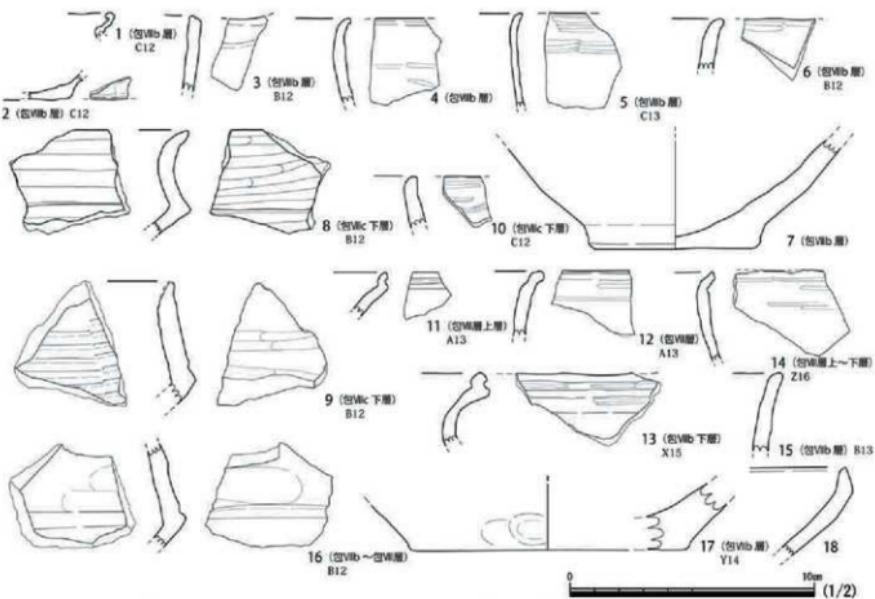


図 51 包Vlb層・包Vlc層・包VIIc層・包Vlb層ほか出土 繩文土器（精製土器）ほか（1/2）

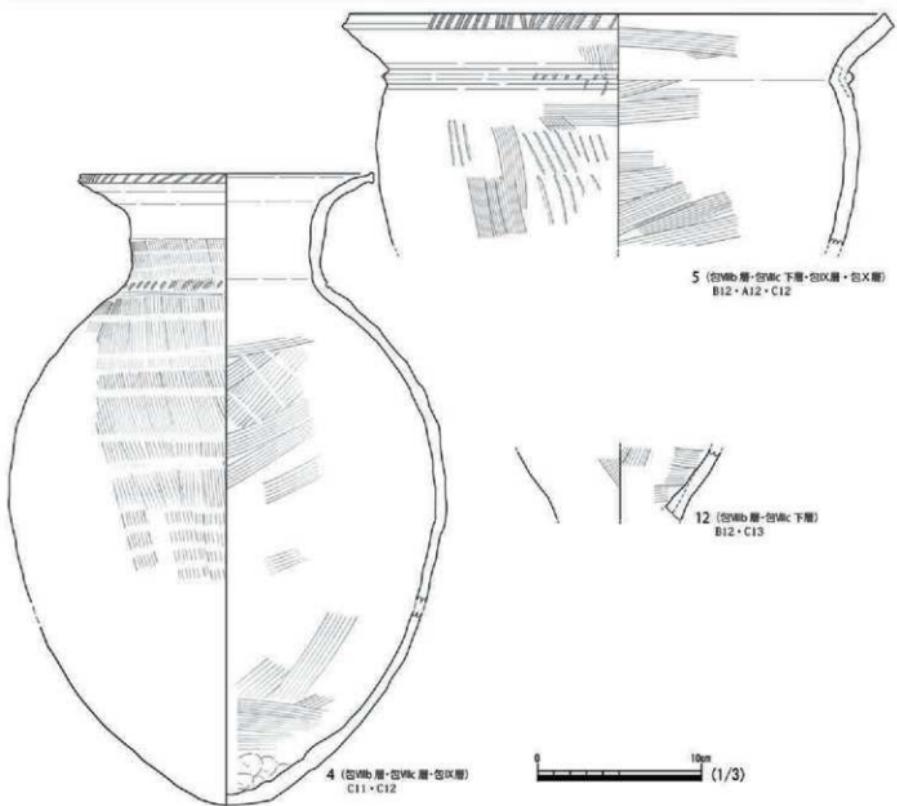
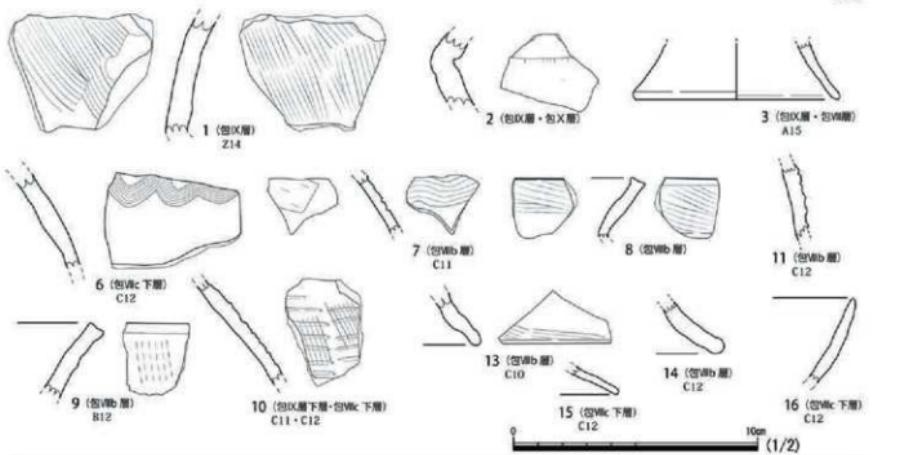


図52 包IX層・包VIIb層・包VIIc層出土 弥生土器(1/2・1/3)

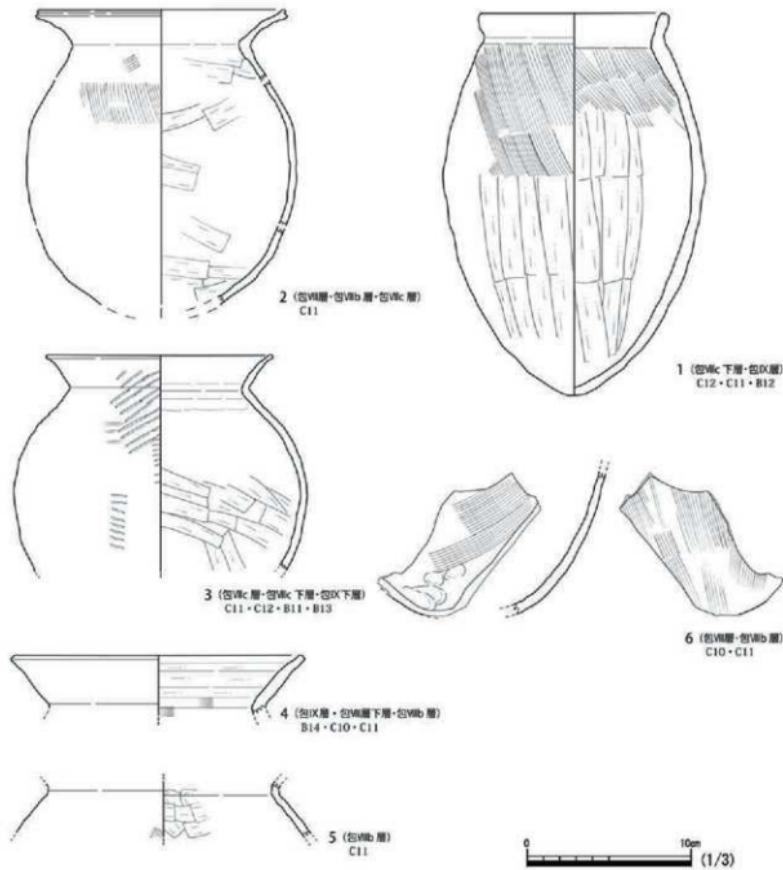


図 53 包VIIc層・包VIIb層ほか出土土器（弥生終末～古墳時代初頭）実測図（1/3）

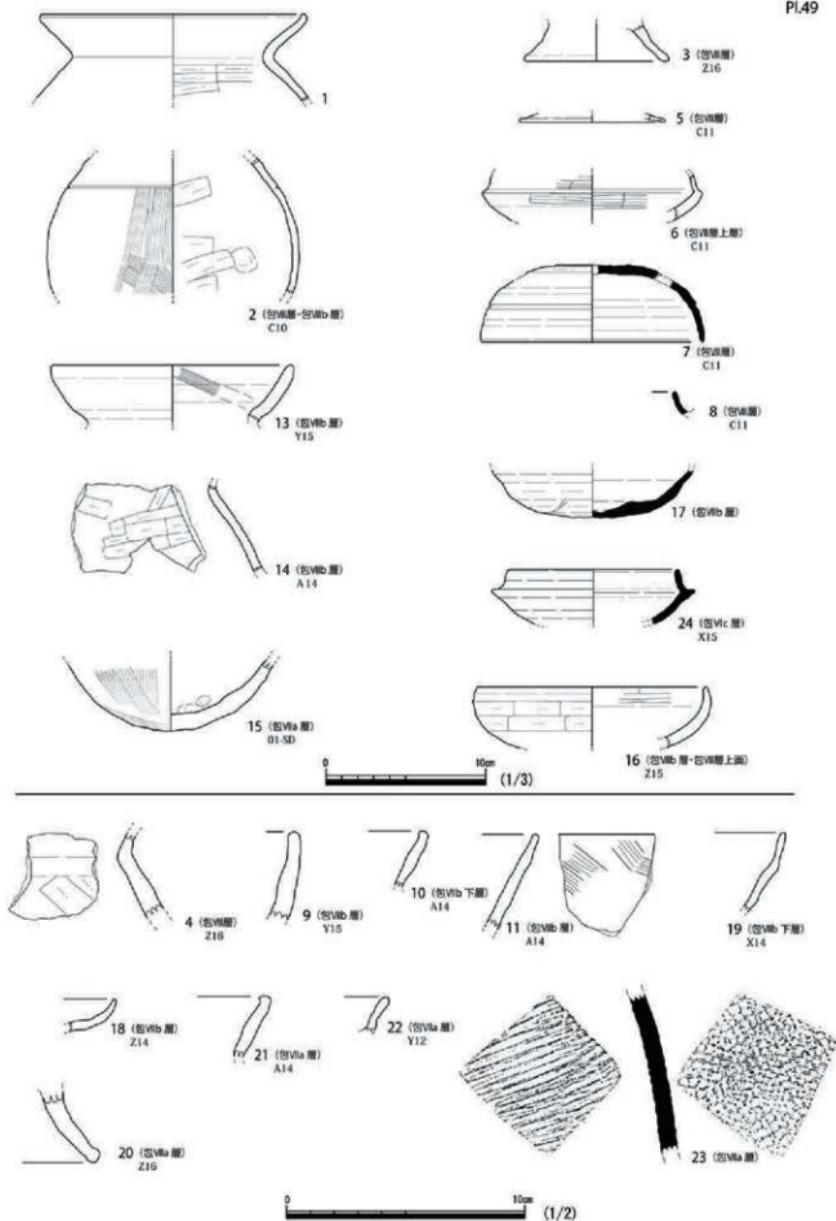


图 54 包Vib层·包Vlb层·包Vla层出土 弥生土器、土师器、須恵器实测图 (1/3 · 1/2)

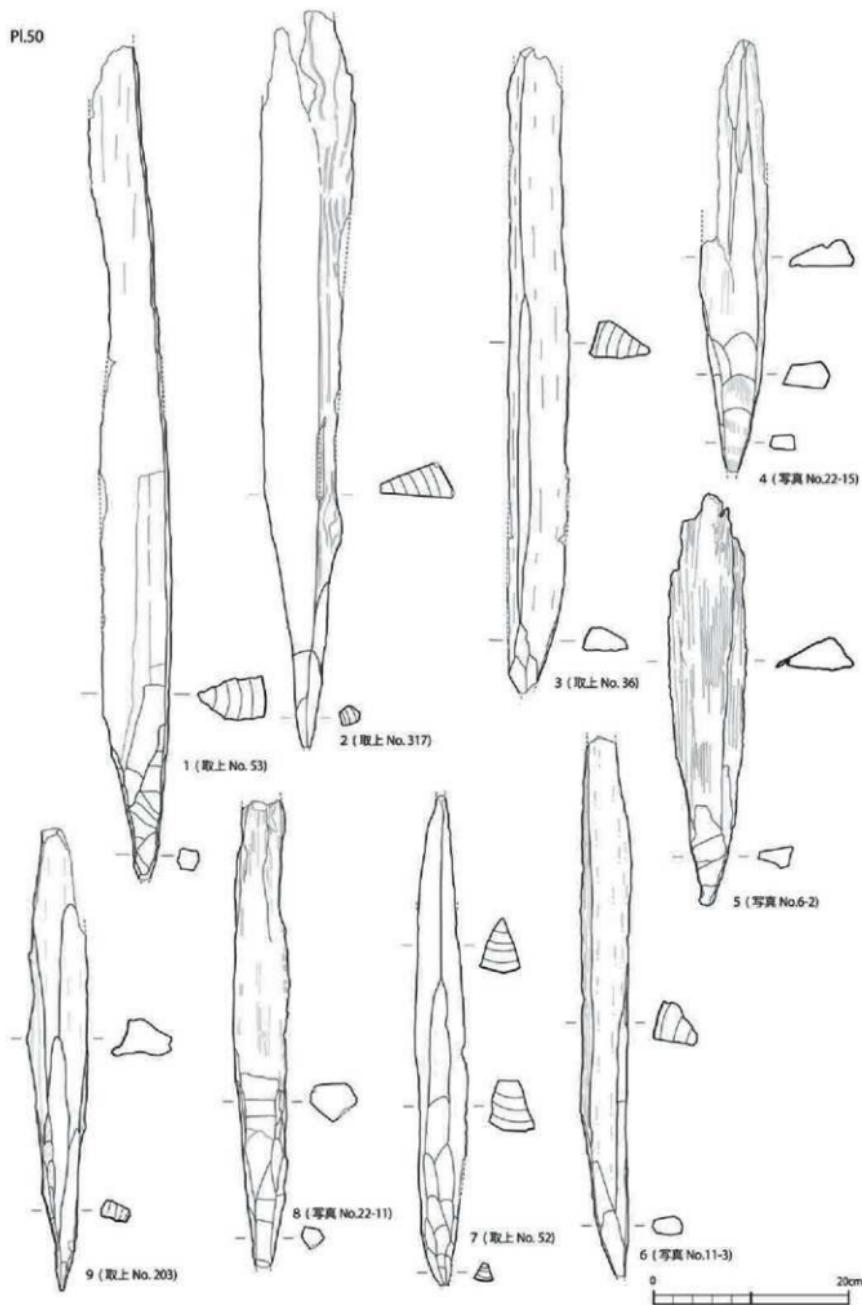


图 55 大畦畔出土杭 (上段 大形断面三角形、下段 中形断面三角形) (1/5)

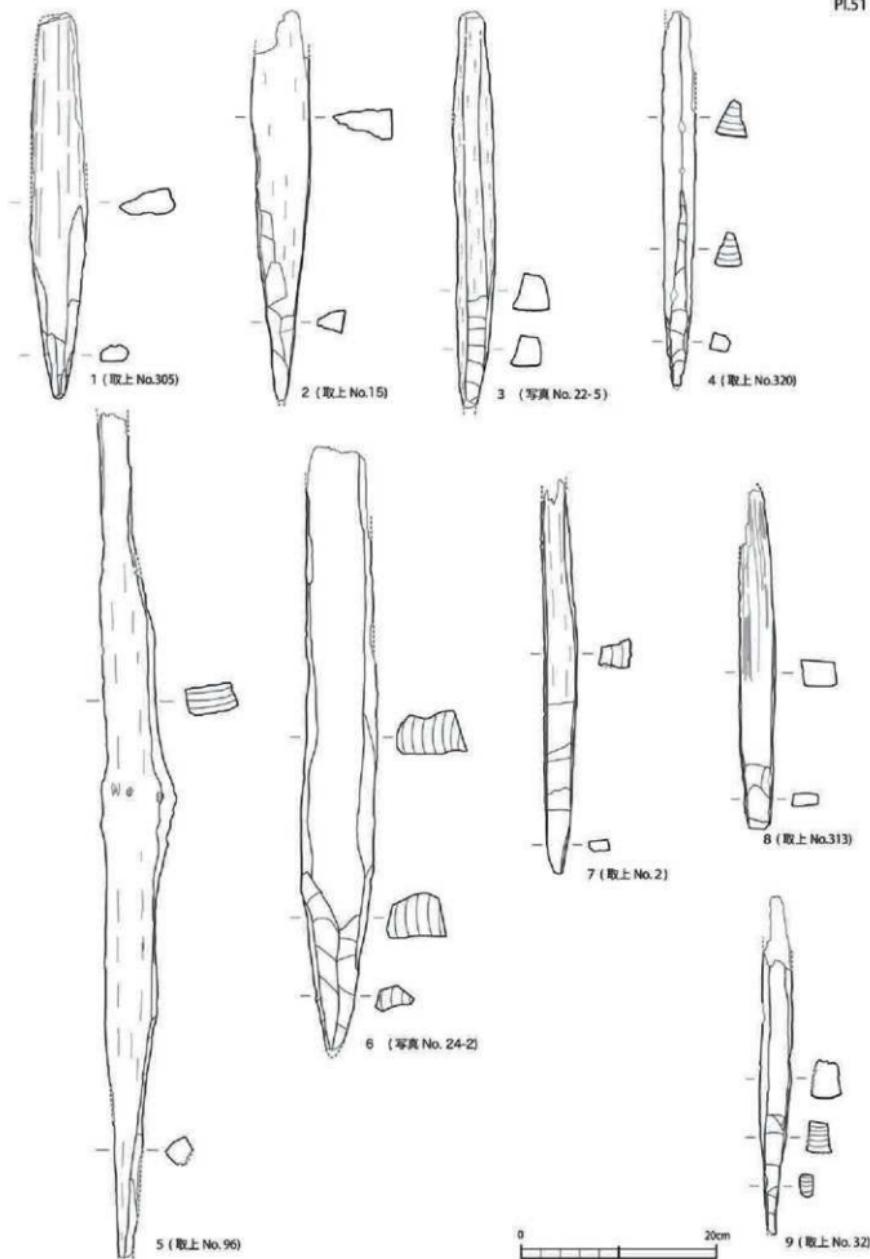


图 56 大畦畔出土杭 (上段 中形断面三角形、下段 断面四角形) (1/5)

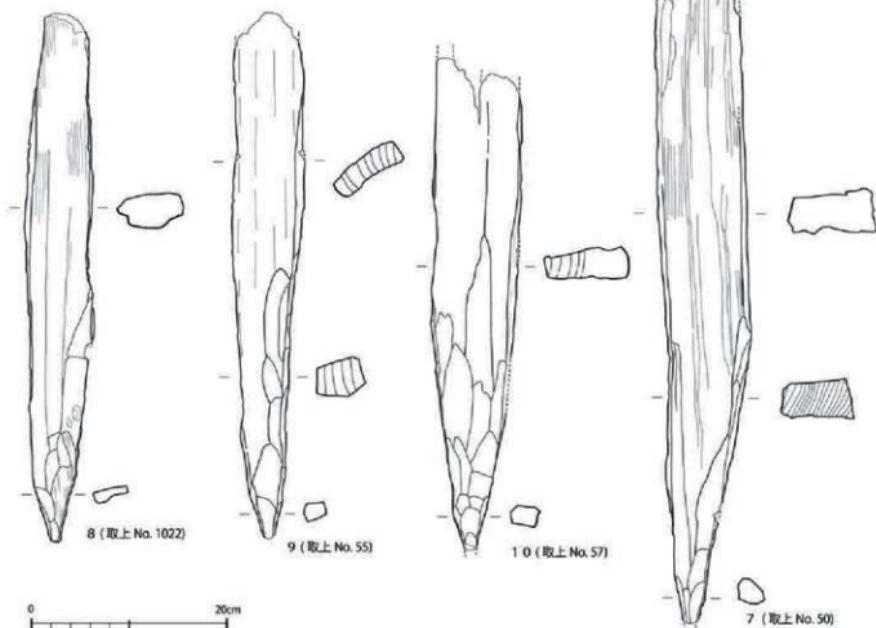
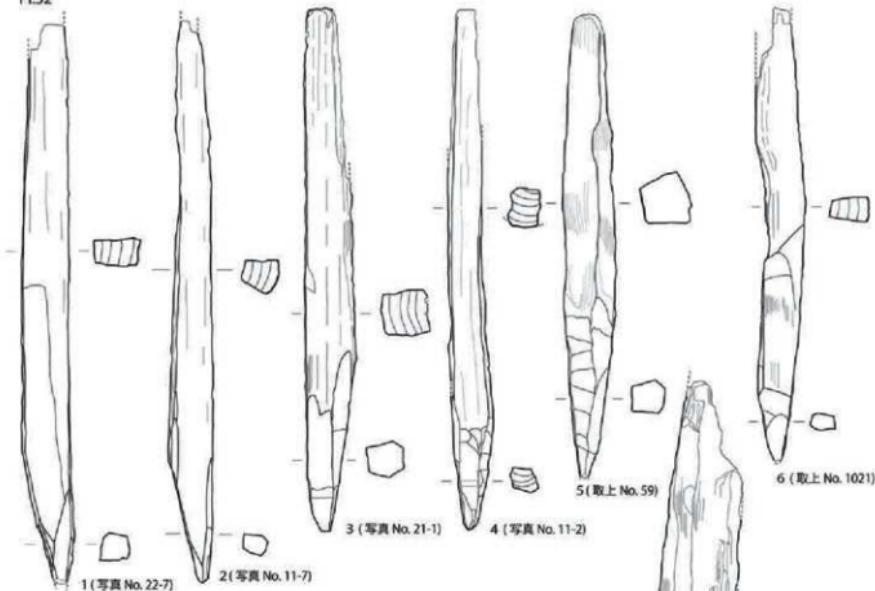


図 57 大畦畔出土杭 (上段 中形断面四角形、下段 大形扁平) (1/5)

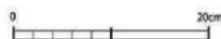
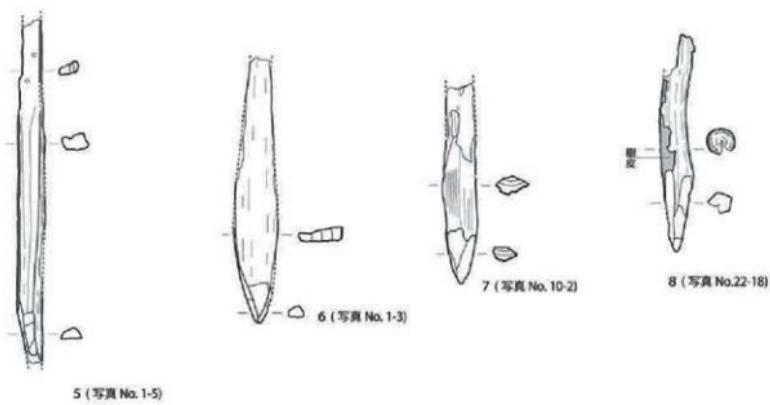
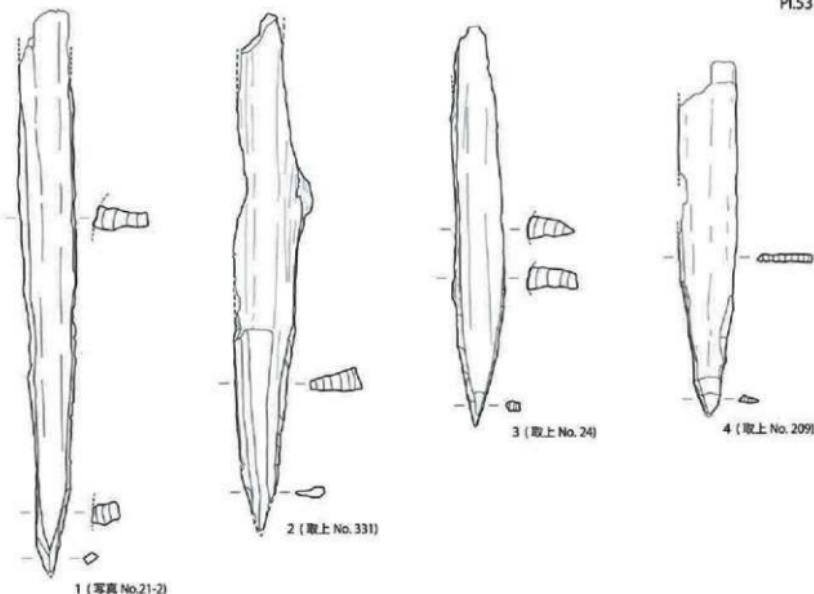


図 58 大畦畔出土杭 (上段 断面扁平、下段 断面円形) (1/5)

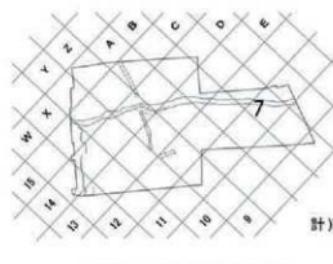
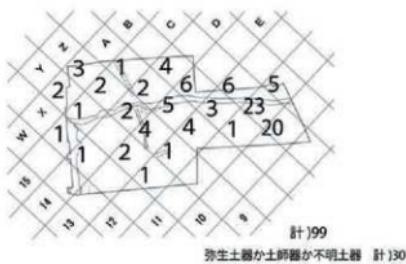
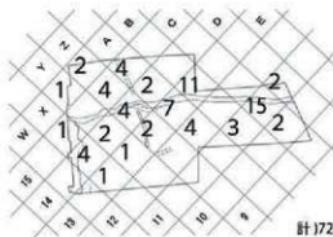
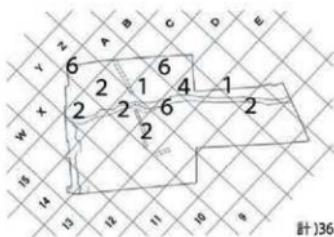
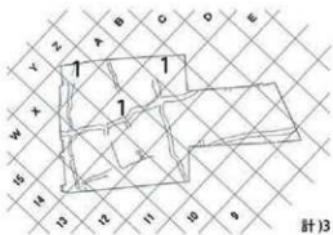
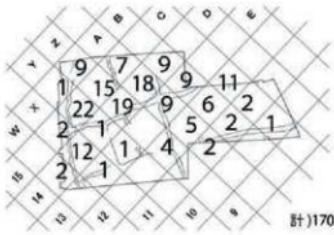
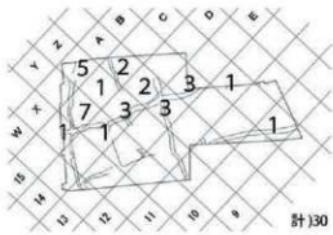
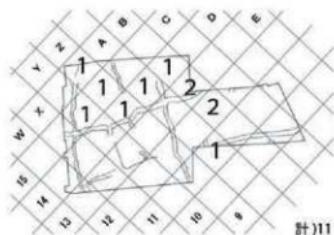
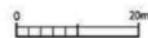


図 59 包VIIb層・包VIa層 土器出土分布図(1/800)



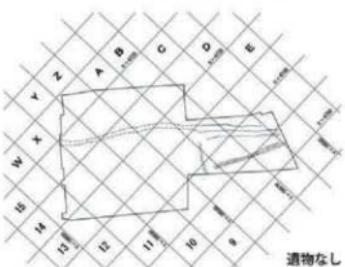
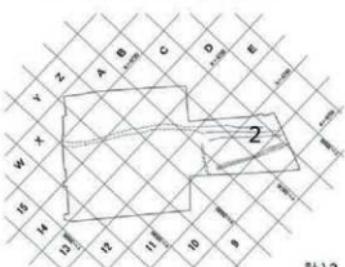
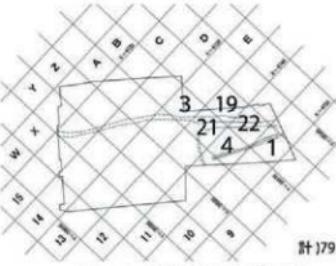
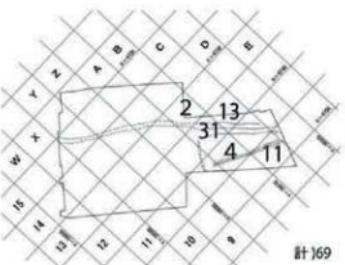
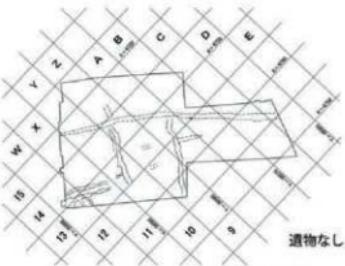
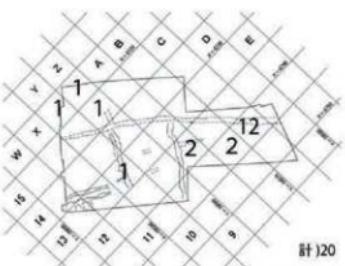
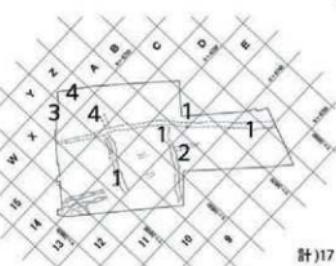
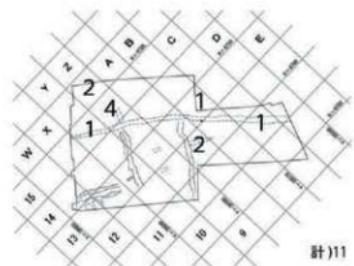
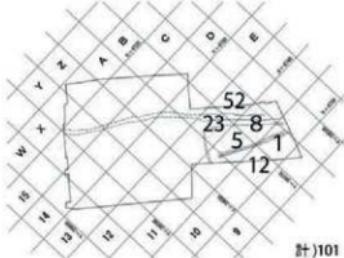
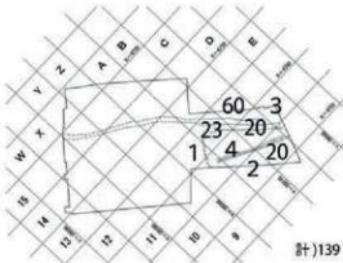


図 60 包VII層下層・包VIIc層 石器出土分布図 (1/800)

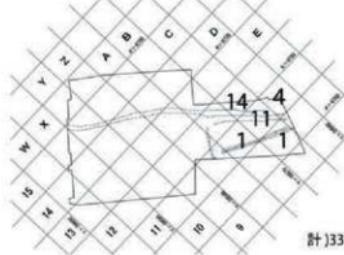




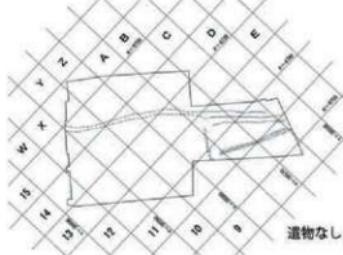
### 包Wb層 土器出土分布図 繩文土器



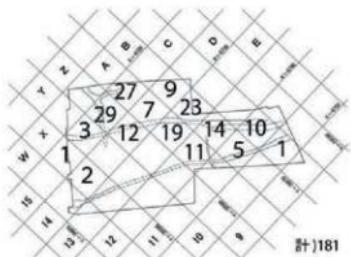
### 包Wb層 土器出土分布図 弥生土器



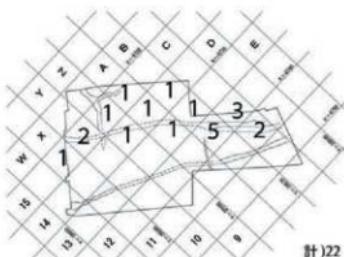
包Wb層 土器出土分布圖 土師器



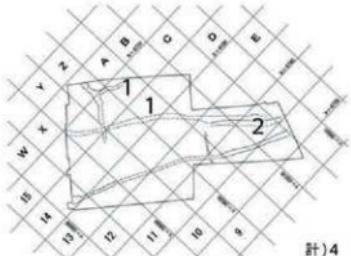
### 包VIIb層 土器出土分布図 須恵器



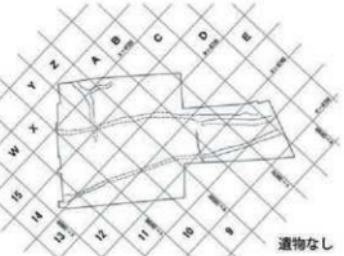
### 第四章 土器出土分布圖 繩文土器



### 包仪层 土器出土分布图 弥生土器



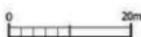
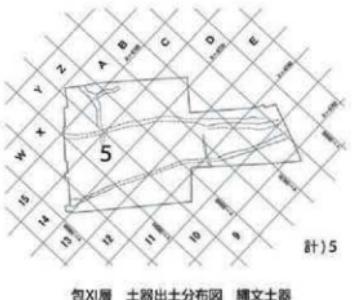
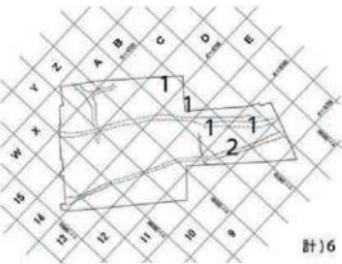
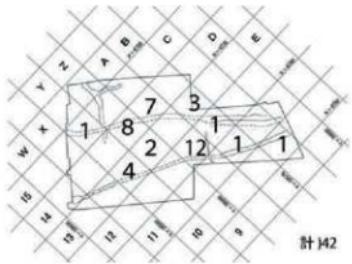
### 包IX層 土器出土分布図 土師器



### 包札層 土器出土分布図 繪唐器

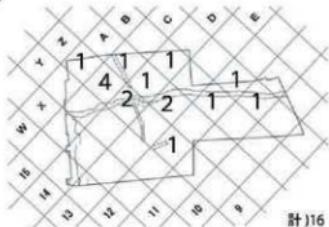
図61 包VIIb層・包IX層 主要出土分布図(1/800)



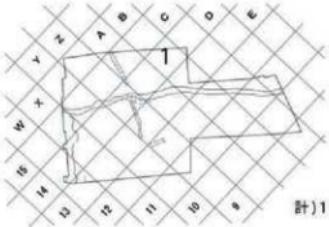


\*この分布図では、板付I式土器は、便宜上縄文土器に含めている。

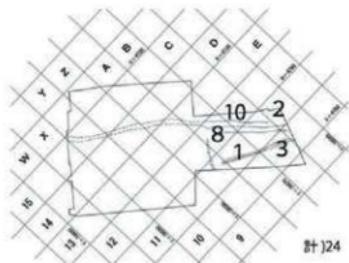
図62 包X層・包XI層・包VIc層 土器出土分布図(1/800)



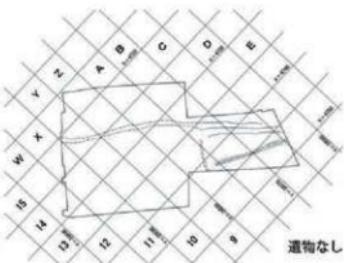
包VII層 石器出土分布図 剥片



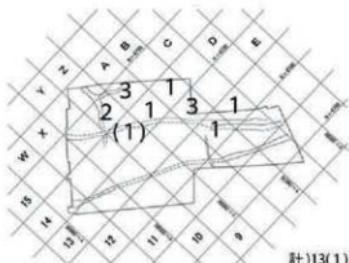
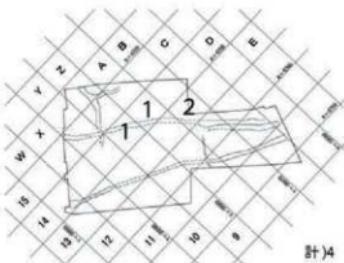
包VII層 石器出土分布図 石核



包VIIb層 石器出土分布図 剥片



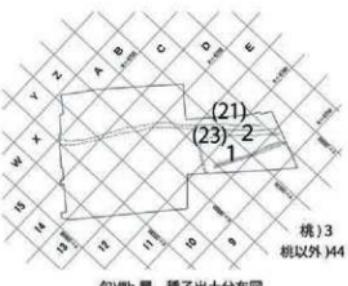
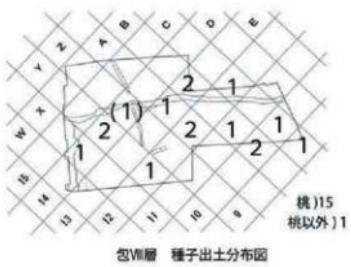
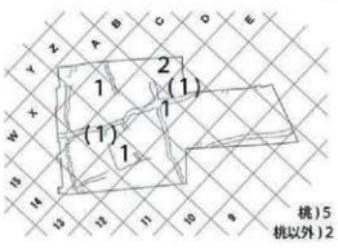
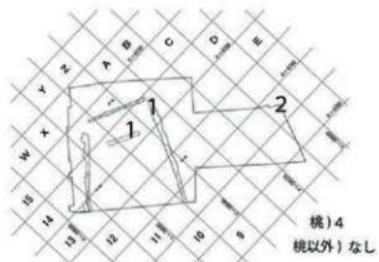
包VIIb層 石器出土分布図 石核

包IX層 石器出土分布図 剥片  
○内は黒曜石ほかの石器

包IX層 石器出土分布図 石核



図63 包VII層・包VIIb層・包IX層 石器出土分布図（剥片・石核）(1/800)



( )内は桃以外の種の個数

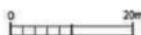
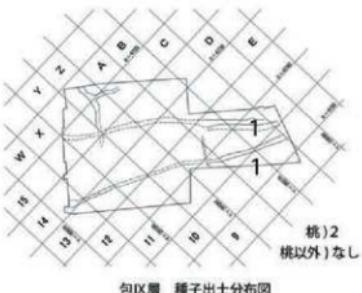


図 64 包VIIa層・包VIIb層・包VII層・包VIIIb層・包IX層 種子出土分布図(1/800)

付表1 表1-1. 植物珪酸体含量

分類群	試験名														
	6C級	7A級	7B級	8級	8級 下層	8級 上層	8B級 (C-11)	8B級 (C-11)	8B級 (C-12)	8B級 (C-11)	8B級 (C-12)	9級	9級 上層	9級 上層	10級 上層
イソクサル酸部酸性化合物															
イソブチノイド	1400	300	300	400	400	1000	200	700	900	700	-	200	-	200	100
クタケ酸	1600	400	600	400	500	1500	600	1000	1200	1000	<100	400	4400	5400	1900
ジオキソ	900	300	100	300	300	900	500	1100	600	500	<100	400	600	300	1100
ラウリック酸スズキ酸	300	180	200	300	<100	150	300	500	200	200	100	400	400	800	1300
イソブチノイド系酸	200	<100	-	-	200	400	300	300	-	200	100	200	200	300	200
不飽和	2500	1600	1200	3500	3600	3600	1400	5000	3300	3400	2400	1600	2000	9600	11000
イソブチノイド酸性化合物															
イソブチノイド	2400	1400	900	2800	2400	2200	1200	2600	1300	1600	500	900	100	<70	700
クタケ酸	1200	400	100	800	900	700	300	800	600	1300	500	600	5000	5000	700
ジオキソ	1600	300	300	1600	600	1600	900	1500	400	600	400	600	2500	2200	1700
ラウリック酸	200	-	-	400	<100	180	100	400	200	200	200	<100	700	300	800
不飽和	2900	1400	1000	4000	2200	3500	2100	5500	3900	4700	300	3000	6700	9500	3400
合計															
イソクサル酸部酸性化合物	7000	2800	2500	4800	4300	7200	3400	8500	6000	4900	1100	3400	15600	17800	21200
イソブチノイド酸性化合物	8300	3500	2300	9700	6300	6600	4700	16700	6200	8500	1900	6100	18500	17200	7300
総計	15300	6400	4800	14500	10700	15800	5900	31900	12100	12300	3350	9500	33800	35500	19300

新木源莊酒類  
イス/キノコ

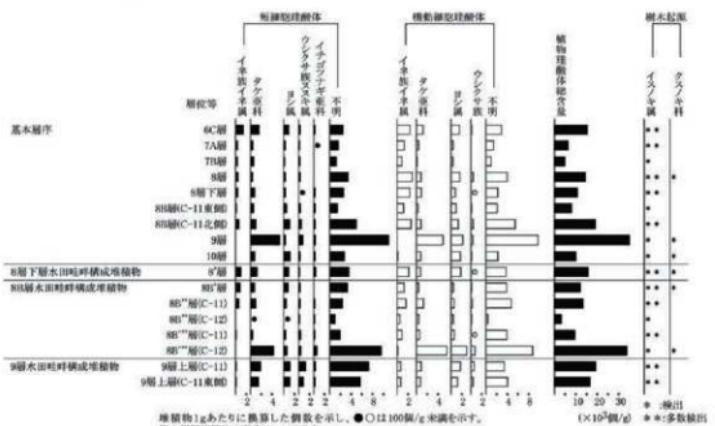


図1 植物珪酸体含量の層位分布

实测 番号	種類 處理 方法	測定年代 BP	δ 13C ‰	樹年較正結果				Code No.
				器 量	cal BC/AD	cal BP	相對比	
9 生木 AAA	1,916 ± 30 (1,908 ± 25)	-27, 19 ± 0.42	1,940 ± 20	e	cal AD 72 - cal AD 93	cal BP 1,878 - 1,857	6.439	
				e	cal AD 97 - cal AD 125	cal BP 1,853 - 1,825	0.561	110361
				e	cal AD 25 - cal AD 127	cal BP 1,825 - 1,813	0.987	
				e	cal AD 160 - cal AD 165	cal BP 1,799 - 1,785	0.605	110360
				e	cal AD 198 - cal AD 200	cal BP 1,752 - 1,744	0.098	
				e	cal AD 61 - cal AD 98	cal BP 1,885 - 1,858	0.518	110362
14 生木 AAa	1,920 ± 30 (1,915 ± 25)	-27, 26 ± 0.50	1,950 ± 20	e	cal AD 98 - cal AD 124	cal BP 1,848 - 1,826	0.625	
				e	cal AD 21 - cal AD 137	cal BP 1,928 - 1,919	0.223	110363
16 生木 AAA	1,836 ± 20 (1,829 ± 24)	-28, 58 ± 0.51	1,860 ± 20	e	cal AD 165 - cal AD 199	cal BP 1,785 - 1,751	0.866	
				e	cal AD 294 - cal AD 219	cal BP 1,746 - 1,731	0.211	110362
				e	cal AD 126 - cal AD 244	cal BP 1,824 - 1,706	1.000	
				e	cal AD 80 - cal AD 128	cal BP 1,870 - 1,822	1.000	110360
23 生木 AAA	1,896 ± 30 (1,892 ± 24)	-27, 40 ± 0.50	1,920 ± 20	e	cal AD 58 - cal AD 177	cal BP 1,892 - 1,773	0.555	
				e	cal AD 191 - cal AD 212	cal BP 1,759 - 1,738	0.615	
				e	cal AD 71 - cal AD 125	cal BP 1,850 - 1,773	0.550	
				e	cal AD 27 - cal AD 60	cal BP 1,923 - 1,910	0.622	
25 生木 AAA	1,900 ± 30 (1,894 ± 25)	-28, 37 ± 0.42	1,960 ± 20	2e	cal AD 49 - cal AD 139	cal BP 1,901 - 1,811	0.845	
				e	cal AD 150 - cal AD 183	cal BP 1,809 - 1,797	0.603	110361
				e	cal AD 155 - cal AD 170	cal BP 1,795 - 1,780	0.616	
				e	cal AD 195 - cal AD 209	cal BP 1,755 - 1,741	0.615	
				e	cal AD 128 - cal AD 190	cal BP 1,822 - 1,770	0.663	
				e	cal AD 186 - cal AD 214	cal BP 1,764 - 1,736	0.337	110362
30 生木 AAA	1,850 ± 30 (1,851 ± 25)	-29, 67 ± 0.43	1,930 ± 20	e	cal AD 81 - cal AD 118	cal BP 1,865 - 1,840	0.693	
				e	cal AD 119 - cal AD 156	cal BP 1,845 - 1,820	0.693	110363

<sup>1)</sup>処理方法は、酸知理ーアルカリ處理一般処理(ASA法)で、アルカリ濃度が11%未満の場合 ASAと表記している。

2) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用した。

3) 昭和年代は、1950年を基準として何年前であるかを示す。

④補正年代および測定年代に付記した誤差は、測定誤差の(68%が入る範囲)を年代前に算出した値。  
 ⑤測年の計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REW 0 (Copyright © 1985-2010 M. Stuiver and P. J. Reimer) を使用した。

5) 前半の計算には、AUDIOGRAM CALCULATOR FOR PRACTICAL CALIBRATION (Copyright 1988-2000)を使用して計算した。前半は直角二等辺三角形として示した。一括りをためる前の値を使用している。

年代総額は、1円目を決めるのが慣例でしたが、暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、暦年較正

用年代値は1欄目を丸めていない

③統計的に真の値が入る確率は、 $\alpha$ は0.05、 $\beta$ は0.05である。

9) 相対比は、 $\alpha$ ,  $\beta$ ,  $\gamma$ のそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

表3. 樹種同定結果

実測番号	地区	グリッド	位置	層位	取上番号	写真番号	種類	木取り	樹種	備考
4	06-II 区	C11		9層	203		中形三角	分割材	クリ	
9	06-II 区	B12		9層~10層	22-5		中形三角	ミカンノコ状	クリ	年代測定実施
11	06-II 区	Y15		9~10層	10-2		小形扁平	分割材	クリ	
14	06-II 区	B12		9~10層	1-3		小形扁平	板目板状	ムクロジ	年代測定実施
16	06-II 区	B12		9~10層	1-5		小形扁平	板目板状	クリ	年代測定実施
20	06-II 区	D10		9層	1021		中形四角	板目板状	クリ	年代測定実施
25	06-II 区	D10		9層	1022		大形扁平	分割材	クリ	年代測定実施
30	06-II 区	B12		9層~10層	22-7		中形四角	板目板状	クリ	年代測定実施
			南壁			杭No.1		破片	クリ	

表2 種実同定結果

調査区	番号	グリッド	層位	同定結果					計測値(mm)		
				分類群	部位	状態	個数	備考	長さ	幅	厚さ
06-II 区	DI-1	Y18	7a層	ニゴトノ属 カラスクリ	枝子	破片	1				
	2	Z15	7a層	モモ	枝	破片	1				
	10	X13	7a層	モモ	枝	破片	1	乾燥状態			
	12	Y15	7a層	モモ	枝	破片	2	乾燥状態、計1個体未満	17.63 ±	13.9 ±	9.92
	13	A13	7a層	モモ	枝	完形	1	表面摩耗	22.45	16.68 ±	11.37 ±
	14-1	Y15	7a層	モモ	枝	完形	1	表面摩耗、側面食痕	22.56 ±	16.91 ±	9.11 ±
	14-2	Y18	7a層	モモ	枝	破片	1		19.61 ±		
	16	D11	7a層	モモ	枝	破片	1				
	17	B14	7a層	モモ	枝	完形	1		19.14	16.23	13.98
	32	X14	8a層	モモ	枝	破片	1				
	40-2	C11	8a層	モモ	枝	完形	1	頂部欠損	22.22 ±	18.08 ±	16.24
	43-1,5	B12	8a層	ヤマモモ	枝	完形	2				
	44-1~19	E12	8a層	ヤマモモ	枝	完形	18				
	45-9~23	C13	8a層	ヤマモモ	枝	破片	1				
	46	V15	8a層	モモ	枝	完形	12				
								乾燥状態、表面摩耗、頂部欠損	13.24 ±	12.51 ±	7.75 ±

表5. 06-II 区出土種実同定結果

番号	枝番号	調査区	遺伝名	層位	分類群	部位	状態	個数	備考	計測値(mm)		
										長さ	幅	厚さ
D 3	A14			7a層	モモ	枝	完形	1	一部欠損	19.89	18.23	16.36 ±
4	1D11			7a層	モモ	枝	完形	1		26.44	21.13	16.18
4	2D11			7a層	モモモモ	枝	完形	1		14.56	12.63	8.99
5	B14			7a層	モモ	枝	完形	1	研合部一部欠損	20.83	16.19 ±	13.48
6	Z12			7a層	クヌギ	枝	完形	1				
7	Y14			7b層	オニグルバ	枝	完形	1	研合部に沿い頂部より削れかたいでいる	25.05	21.28	20.59
8	Y13			7b層直上	モモ	枝	破片	1	半分未満			
9	B13			7b層	モモ	枝子	完形	1				
11	Y15			7b層	オニグルバ	枝	完形	1	頂部～側部欠損			
15	X14			7b層	モモ	枝	完形	1	一部欠損	31.12 ±	16.92	16.98
18	Z15	板列		7b層下層	モモ	枝	完形	1		22.11	17.22	13.08
19	B14			7b層	モモ	枝	完形	1		24.84	19.53	14.89
20	B11			8層	モモ	枝	完形	1		23.73	18.65	14.45
21	C9			8層	モモ	枝	完形	1		25.83	21.02	15.94
22	A12			8層上層	モモ	枝	完形	1		22.43	17.96	14.84
23	Z13			8層	クヌギ	枝子	破片	1				
24	B13			8層	モモ	枝子	完形	1	機械面に種子個体確認			
25	C13			8層	モモ	枝	完形	1	一部欠損	22.43	18.36	14.16
26		板列上		8層	モモ	枝	完形	1		21.98	17.05	13.78
27	B13			8層	モモ	枝	完形	1		19.59	18.53	15.75
28	A12			8層	モモ	枝	完形	1	側面切削痕?	27.52 ±	22.63	15.79 ±
29		板列上		8層	モモ	枝	完形	1	一筋の横	31.14 ±	18.39	15.05 ±
30	1-Y14			8層	モモ	枝	完形	1	一部欠損	26.95	22.84	16.63 ±
30	2-Y14			8層	モモ	枝	完形	1	一部欠損	25.35	19.29 ±	15.83
31	Z14	板列上		8層	モモ	枝子	完形	1	一部欠損			
33	C19			8層	モモ	枝	完形	1		23.23	18.84	15.63
34	A15	アゼ下		8層下層	モモ	枝	完形	1		22.89	21.38	18.67
35	B10			8a層	モモ	枝	完形	1	研合部一部欠損	25.15	17.49 ±	14.32
36	1-Y12			8層	モモ	枝	完形	1	頂部欠損	20.64 ±	17.02	13.21
38	Y14-15			8層上面	モモ	枝	破片	3	研合部上面食痕、他に脱化材1個み	24.8	18.42 ±	-
39	西側深(B10?)			8層	モモ	枝	完形	1	半分、頂部側方に欠損	20.44 ±	15.26	-
49	1-C11			8層	モモ	枝	完形	1	側面側方に欠損	26.29	21.46	18.64 ±
41	C12			8層	モモ	枝	完形	1		23.74 ±	21.03	16.08
42	B11			8層	モモ	枝	完形	1		23.69	20.18	14.54
43	B12			8層	モモ	枝	完形	1		24.09	18.83	15.05
45	C13	板列周辺		8層	モモ	枝	完形	2				
45	C13	板列周辺		8層	モモ	枝	完形	6				
47	C11			9層	モモ	枝	完形	1		22.47	17.88	14.17
48	西側廻北側 (B10?)			9層	モモ	枝	完形	1		26.48	20.09	16.69

付表 1・2 解説 両迫間日渡遺跡の自然科学分析  
パリノ・サーヴェイ株式会社 分析抜粋（編集 亀田）

1 分析方法

(1) 植物珪酸体分析

各試料について、乾燥重量を秤量し、過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム、比重 2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、ブリュエラックスで封入してプレパラートを作製する。400 倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤（2010）の分類を参考に同定し、計数する。

結果は堆積物 Igあたりの植物珪酸体含量（同定した数を堆積物 Igあたりの個数に換算）の一覧表と植物珪酸体含量の層位分布図として示す。なお、各分類群の含量密度は 10 の位で丸めた値として示してある。

(2) 種実同定

試料を双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて同定が可能な種実遺体を抽出する。種実遺体表面に付着した泥を、面相筆を用いて丁寧に除去する。種実遺体の同定は、現生標本および石川（1994）、中山ほか（2000）等との対照から実施し、個数を数えて一覧表で示す。分析後は、種類毎に瓶に入れて保管する。水に入った種実遺体には、約 70% のエタノール溶液を入れて保存する。

(3) 放射性炭素年代測定

分析は、AMS 法で実施する。杭材の木取りを観察した上で、残存する最外年輪から測定試料を採取する。試料表面の汚れをピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。塩酸や水酸化ナトリウムなどを用いて、試料内部の汚染物質を化学的に除去する（AAA 処理）。

試料をバイコール管に入れ、1g の酸化銅（II）と銀簾（硫化物を除去するため）を加えて、管内を真空中にして封じきり、500°C (30 分) 850°C (2 時間) で加熱する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用して、真空ラインにて CO<sub>2</sub> を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製した CO<sub>2</sub> と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを 650°C で 10 時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径 1mm の孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV 小型タンデム加速器をベースとした 14C-AMS 専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。AMS 測定時に、標準試料である

米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸（HOX-II）とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に 13C/12C の測定も行うため、この値を用いて δ<sup>13</sup>C を算出する。

放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5,568 年を使用する。また、測定年代は 1950 年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma; 68%）に相当する年代である。なお、曆年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.0 (Copyright 1986-2010 M Stuiver and PJ Reimer) を用い、誤差として標準偏差（One Sigma）を用いる。

2 結果

(1) 植物珪酸体分析

結果を表 1-1、図 1 に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるものの、保存状態が悪く、表面に多数の小孔（溶食痕）が認められる。

植物珪酸体含量は、10 層～9 層で増加傾向が見られ、10 層の約 10,000 個/g から 9 層の約 35,000 個/g と増加し、極大となる。8B<sup>m</sup> 層（C-12）でも多いが、8B<sup>s</sup> 層以降減少し、5,000 個/g ～ 15,000 個/g の間を変動する。

9 層を除き、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体双方のイネ属が連続的に産出する。10 層～8B<sup>m</sup> 層（C-12）にかけては短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体がいずれも 1,000 個/g 未満である。なお、8B<sup>m</sup> 層（C-11）では 8B<sup>s</sup> 層（C-12）よりもイネ属の含量が多く、短細胞珪酸体が約 700 個/g、機動細胞珪酸体が約 1,600 個/g である。8B<sup>s</sup> 層より上位では機動細胞珪酸体の増加傾向が見られる。その含量は 1,000 個/g 前後～2,800 個/g の範囲であり、他の分類群と比較して多い。また、8 層は約 2,800 個/g、8B 層（C-11 北側）は約 2,600 個/g、8 层下層と 6C 層は約 2,400 個/g、8<sup>s</sup> 層は約 2,200 個/g であり、他の層位よりも含量が多い。

この他に、タケア科、ヨシ属、ススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギア科なども見られる。8B<sup>m</sup> 層（C-12）と 9 層では、タケア科の産出が目立つ。またイネ科起源の他に、イスノキ属やクスノキ科の樹木起源珪酸体も見られ、イスノキ属の産出が目立つ。

(2) 種実同定

結果を表 2 に示す。全試料を通じて、被子植物 9 分類群（広葉樹のヤマモモ、クスノキ、ウメ、スマモ、モモ、センダン、クマノミズキ、エゴノキ属、草本のカラスウリ）107 個の種実が同定された。

栽培種は、ウメの核が 2 個（接合し 1 個）、スマモの核が 1 個、モモの核が 57 個、計 60 個が確認された。

栽培種を除いた分類群は、常緑高木のヤマモモの核が

36個、クスノキの種子が4個、落葉高木のセンダンの核が1個、クマノミズキの核が1個、落葉小高木のエゴノキ属の種子が4個、つる性草本のカラスウリの種子が1個、計47個が確認された。各分類群の写真を図版2に、以下に形態的特徴等を記す。

- ・ヤマモモ (*Myrica rubra* Sieb. et Zucc.) ヤマモモ科ヤマモモ属

核（内果皮）は灰褐色、長さ7～8mm、幅6～7mm、厚さ4.5～5mm程度の歪でやや偏平な非対称広楕円体。内果皮は硬く、表面には微細な網目模様があり粗面。

- ・クスノキ (*Cinnamomum camphora* (L.) Presl) クスノキ科ニッケイ属

種子は灰黒褐色、長さ5.5～6.5mm、幅5～6mm、厚さ5～5.5mmの偏球体。頂部にやや突出する臍からはじまる低い棱があり、側面の途中で終わる。種皮は硬く表面は粗面、断面は橈状。

- ・ウメ (*Prunus mume* (Sieb.) Sieb. et Zucc.) バラ科サクラ属

核（内果皮）は灰褐色、のやや偏平な広楕円体。05-I-2区の番号6と7は接合して1個体となり、長さ19.76mm、幅15.42mm、厚さ11.51mm。（両追間日渡跡2の報告書に掲載予定）頂部はやや尖り、基部は切形で中央部に湾入した臍がある。1本の明瞭な縦の縫合線上が発達し、背面正中線上に細い縦隆条が、腹面正中線には浅い縦溝とその両側に幅の狭い帶状部がある。内果皮は厚く硬く、表面には円形の小凹点が分布する。

- ・スマモ (*Prunus salicina* Lindley) バラ科サクラ属

核（内果皮）は灰褐色、レンズ状広楕円体。出土核は、丸く臍点がある基部を欠損し、残存長14.78mm、残存幅10.14mm、残存厚9.88mm。1本の明瞭な縦の縫合線上が発達し、背面正中線上に細い縦隆条が、腹面正中線には浅い縦溝とその両側に幅の狭い帶状部がある。内果皮は厚く硬く、表面にはごく浅い凹みが不規則にみられる。

- ・モモ (*Prunus persica* Batsch) バラ科サクラ属

- ・センダン (*Melia azedarach* L. var. *subtripinnata* Miquel) センダン科センダン属

核（内果皮）は灰褐色、完形ならば長さ1～1.3cm、径0.7～0.8cmの楕円体。破片は長さ1cm、幅6.5mm程度。背面は浅く広い5～6個の縦溝と縦隆条が交互に並び、上面觀は星型。破片は縦隆条に沿って半割している。表面は粗面。内面には、長さ6mm、幅3mm、厚さ1mm程度の非対称長楕円体の種子が入る浅い窪みがあり、窪みの表面には微細な横方向の筋が流れる。

- ・クマノミズキ (*Swida macrophylla* (Wall.) Sojak) ミズキ科ミズキ属

核（内果皮）は灰褐色、径4mm程度の偏球体。基部に小さく浅い凹みがある。内果皮は硬く、表面には周する1本のやや幅広く浅い縦溝と細く浅い縦溝数本が走る。

- ・エゴノキ属 (*Styrax*) エゴノキ科

種子は灰～黒褐色、長さ1.2～1.3cm、径0.6～0.7cm程度の卵形。頂部から基部にかけて3本程度の縦溝と縦隆条がある。基部は斜切形で、淡灰褐色、径3mm程度の粗面の着点がある。種皮は硬く、表面には微細な粒状網目模様がある。大きさはハクウンボク (*S. obassia* Sieb. et Zucc.) と思われるが、表面の状態がやや悪く、エゴノキ (*S. japonica* Sieb. et Zucc.) との明瞭な区別がつかないため、エゴノキ属にまとめている。

- ・カラスウリ (*Trichosanthes cucumeroides* (Ser.) Maxim.) ウリ科カラスウリ属

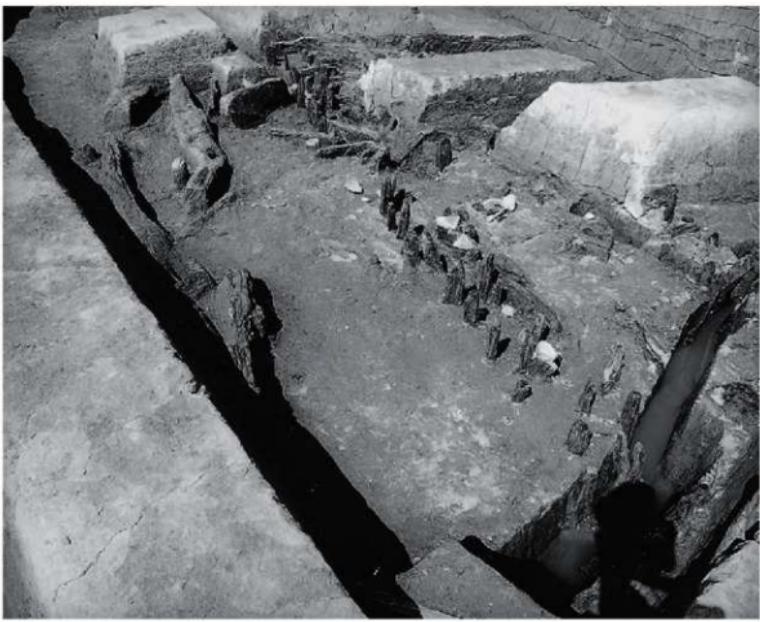
種子は灰褐色、長さ8.5mm、幅1cm、厚さ3mm程度のやや偏平な横楕円体。正中線は幅4.5mm程度の帯状に隆起し、基部に臍がある。種皮表面は粗面で低い突起が散在する。

出土層位に関しては算用数字で表記しているが、その他本文には、ローマ数字で基本層序として表記している。読み替えて頂きたい。

## 写真図版



大畦畔内敷粗杂技法検出状況（西から）



包VIIb層ほか耕作面大畦畔検出状況（南から）



包VIIb層ほか耕作面粗柵等検出状況（西から）



1 調査区南東壁土層断面 B2-B4 (南から)



2 調査区南東壁土層断面 B2-B4 (B4からB2に向かって5m) (北東から)



3 調査区南東壁土層断面 B2-B4 (W12) (東から)



4 調査区北西壁土層断面 C0付近 (南東から)



5 U-U' (P-P') Z13 - Y13 (南から)



6 調査区南西端土層図 (東から)

7 調査区北東壁東寄り D3-D3' (西から)  
(手前 大畦畔検出状況)

8 調査区北東壁南寄り D3-D3' (南から)



1 包VIIb層畦畔検出状況（南東から）

包VIIb～包VII層下層水田区画検出状況



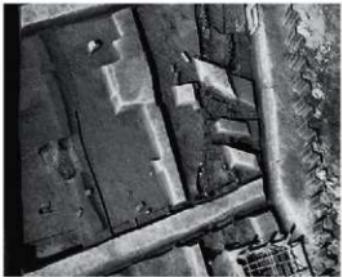
2 包VIIb層畦畔検出状況（南東から）



3 包VII層下層畦畔検出状況（北西から）



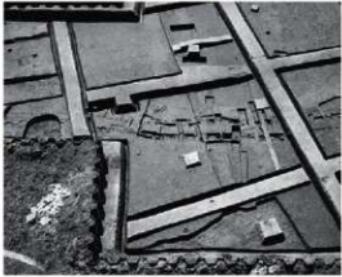
4 包VII層下層（手前）及び包VIIb層（奥）  
畦畔検出状況（北西から）



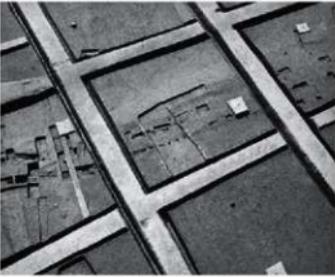
5 包VIIb層杭列検出状況（北西から）



6 包VIIb層杭列検出状況（北東から）



7 包VII層下層杭列出土状況（北東から）



8 包VII層下層杭列出土状況（東から）

包VIIb層ほか耕作面大畦畔杭列・畦畔内粗杂検出状況

Ph. 3



1 包VIIb層ほか耕作面大畦畔杭列検出状況  
(東から)



2 包VIIb層ほか耕作面大畦畔杭列検出状況  
(西から)



3 包VIIb層ほか耕作面大畦畔内粗杂等検出状況  
(北西から)



4 包VIIb層ほか耕作面大畦畔内粗杂等検出状況  
(西から)



5 包VIIb層ほか耕作面大畦畔内粗杂等検出状況  
(西から)



6 包VIIb層ほか耕作面大畦畔杭列検出状況  
(西から)



7 包VIIb層ほか耕作面大畦畔杭列検出状況 (北から)



8 包VIIb層ほか耕作面大畦畔杭列検出状況 (南から)



1 B12 331-335杭断面 (T-T' 北側) (南から)



2 A11 331-335杭断面 (T-T' 南側) (南東から)



3 B12 331-335杭断面 (T-T' 北側) (南東から)



4 B12 H-H', 写真No.1-3 (実14: 小形扁平)、写真No.1-5 (実16: 小形扁平)、写真No.1-4杭



5 B12 (g-g') 写真No.22-8 ~ 21杭立面 (南西から)



6 Z15 (e-e') 写真No.10-1杭断面 (東から)



7 C11 (ア-ア') 写真No.24-1 ~ 6杭断面 (南から)



8 B13 写真No.11-1 ~ 3杭立面 (西から)



1 B12 写真No.22-1 ~ 8杭断面（南から）



2 B12 エー工' 杭断面（南から）



3 K14・Z14 K-K' 杭断面（東から）



4 杭立面（南から）



5 Z14 杭立面（北から）



6 A14 杭立面（南から）

7 Z14・15, Y15 包VII層（下層）珪畔・水路検出状況  
（南から）

8 A15-16, Z15-16 包IX層珪畔検出状況（北から）



1 Y13 包IX層畦畔及び石製穂摘具検出状況（北から）



2 Y13 包IX層畦畔及び石製穂摘具検出状況（北から）



3 Y13 包IX層畦畔及び石製穂摘具検出状況（北から）



4 包VII層耕作面検出状況（南東から）



5 包VII層耕作面検出状況（北東から）



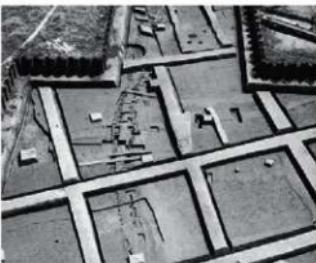
6 包VII層耕作面検出状況（南東から）



7 包VII層耕作面南側検出状況（南東から）



1 包VII層下層～包VII層杭列・畦畔検出状況  
(北西から)



2 包VII層下層～包VII層杭列・畦畔西側検出状況  
(北西から)



3 包VII層下層～包VII層杭列・畦畔検出状況  
(北西から)



4 包VII層下層～包VII層杭列・畦畔検出状況  
(北西から)



5 包VII層下層～包VII層杭列・畦畔検出状況  
(南西から)



6 包VII層下層～包VII層杭列・畦畔西側検出状況  
(北から)



7 包VII層下層～包VII層杭列・畦畔西側検出状況  
(南西から)



8 包VII層下層～包VII層杭列・畦畔西側検出  
状況 (東から)



1 C11 包VIIb～包VII層下層ほか杭列検出状況（南から）



2 C12 包VIIb～包VII層下層ほか杭列検出状況（南から）



3 B12・C12 包VIIb～包VII層下層ほか杭列検出状況（南西から）



4 C12 包VIIb～包VII層下層ほか杭列検出状況（南から）



5 包VIIb層西侧耕作面検出状況（北から）



6 包VIIb層西侧耕作面検出状況（東から）



7 包VIIb層西侧耕作面検出状況（北から）



8 包VIIb層西侧耕作面検出状況（北西から）



1 Y10・Z9 包VIIb層畦畔及び須恵器出土状況  
(南から)



2 D9 包VIIa層畦畔検出状況（北から）



3 包VIIb層西側耕作面検出状況（北東から）



4 包VIIb層西側耕作面検出状況（南東から）



5 包VIIb層西側耕作面検出状況（北東から）



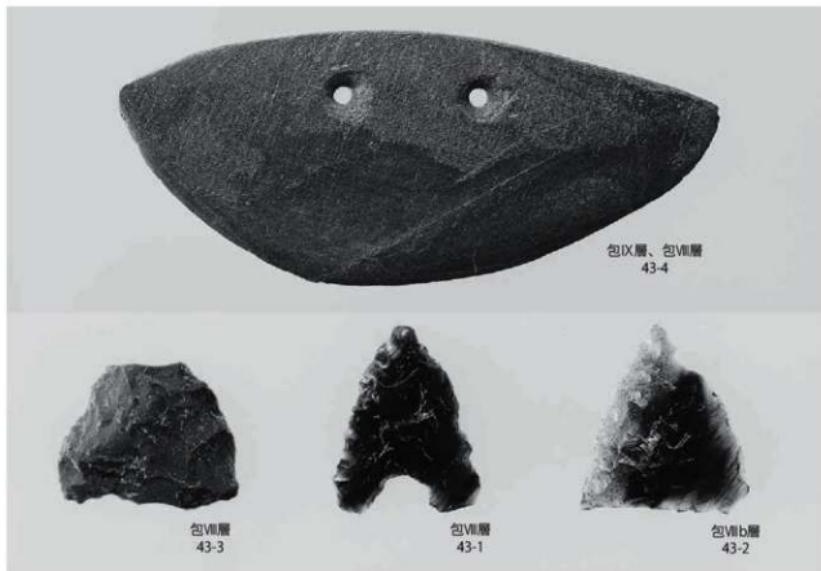
6 包VIIa層西側耕作面検出状況（北西から）



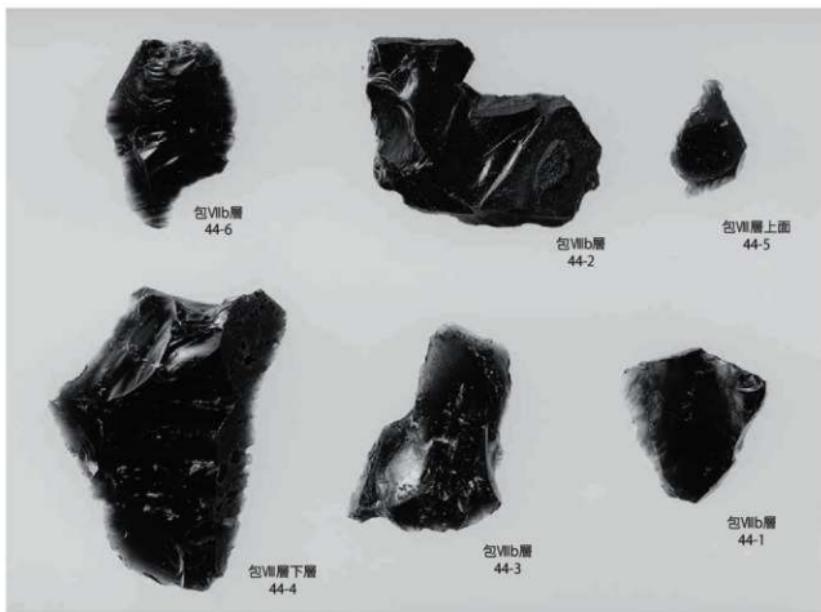
7 包VIIa層西側耕作面検出状況（北東から）



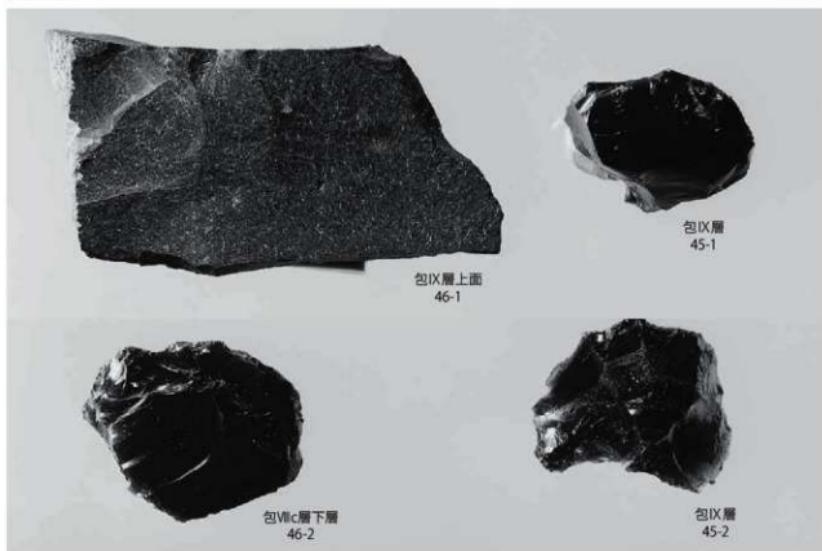
8 包VIIc層西側溝検出状況（東から）



1. 包IX層珪畔上出土 (石製穗揃具)、包VII層、包VIIIb層出土石器 (打製石器)



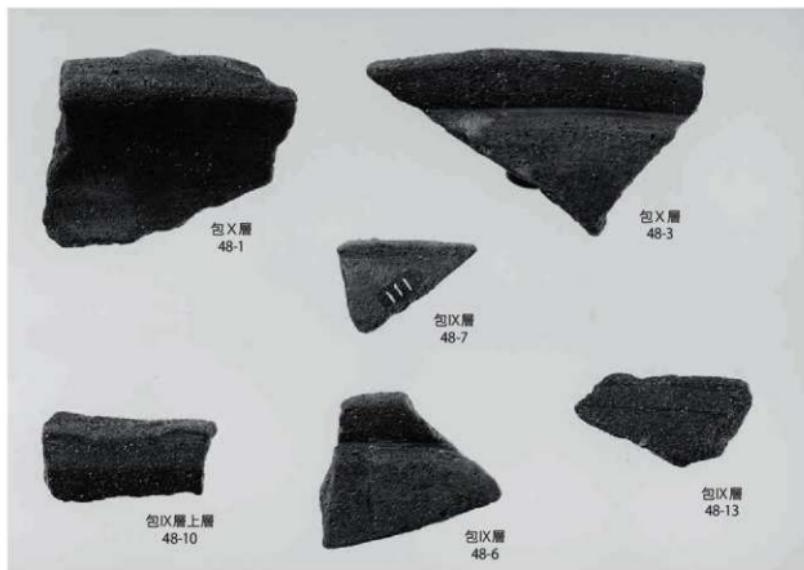
2. 包VIIb ~ 包VIIIb層出土石器 (スクレイバー等)



1. 包IX层、包VIIc层下层出土石器（石核）



2. 包VII层上层～包IX层出土石器（剥片）





1. 包X・包IX層出土 繩文土器（精製土器）



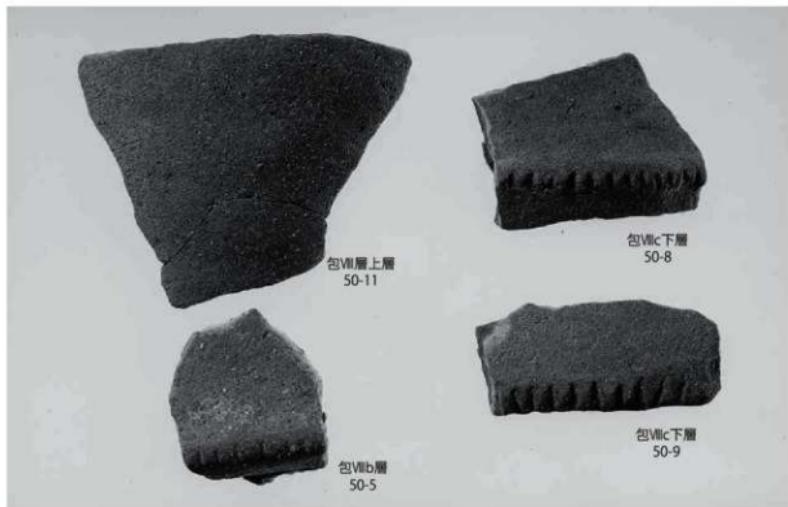
2. 包X・包IX層出土 繩文土器（粗製土器）



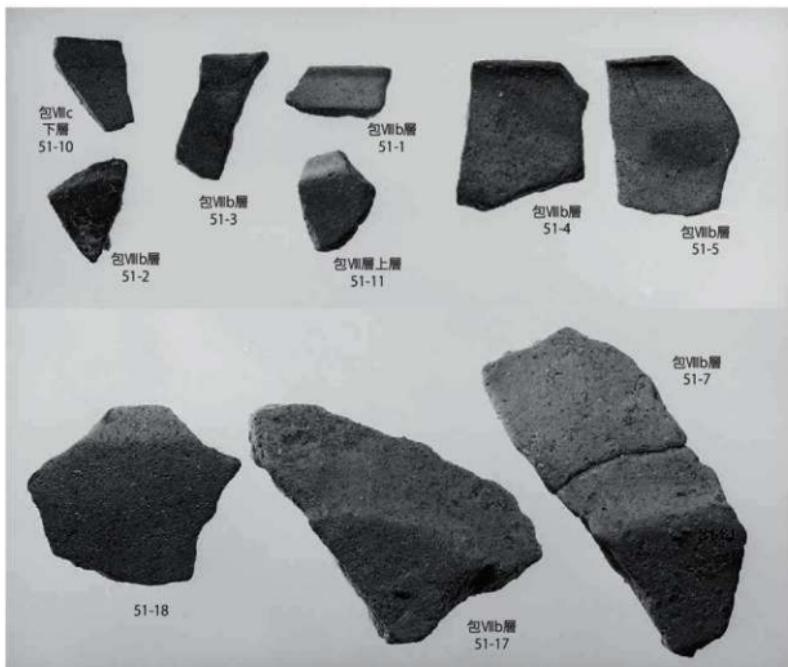
1. 包X・包IX層出土 縄文土器（粗製土器）



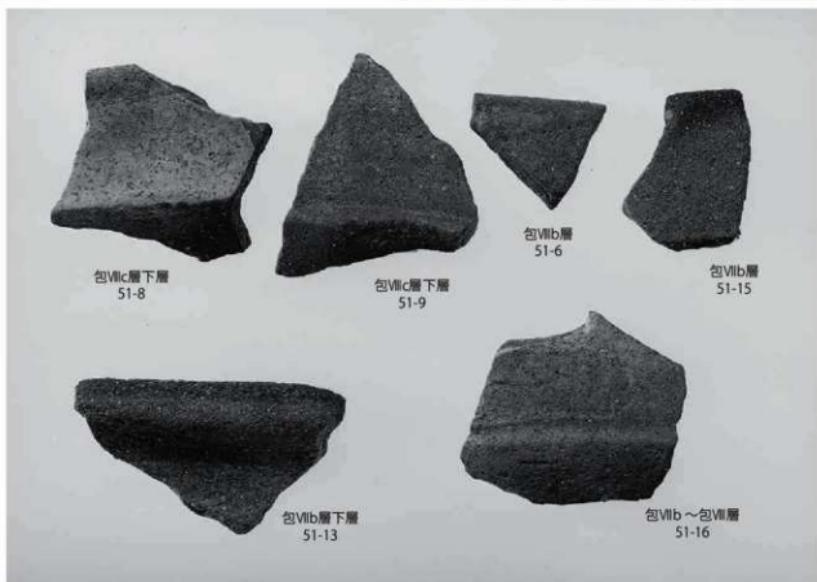
2. 包VIIb・包VIIc・包VII層下・包VIIb層ほか出土 縄文土器（粗製土器）



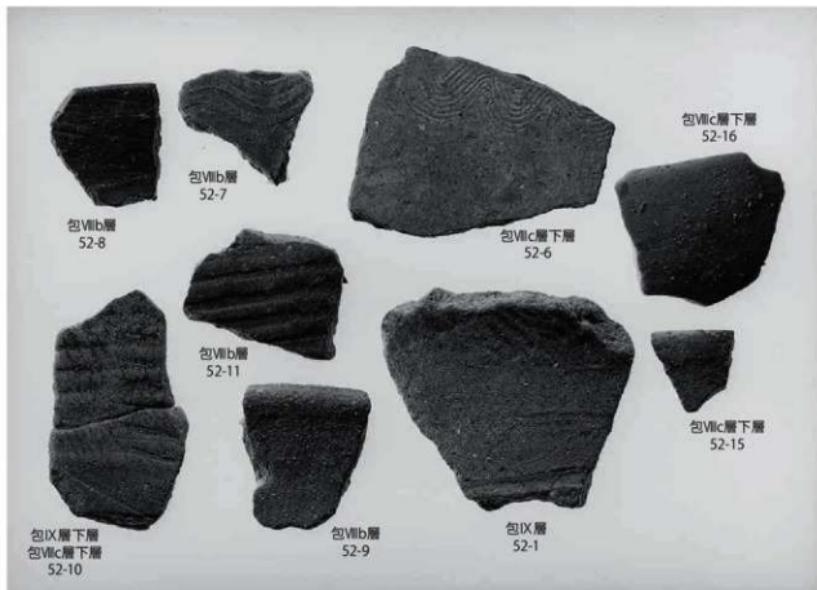
1. 包VIIb・包VIIc・包VII層下ほか出土 縄文土器（粗製土器）



2. 包VIIb・包VIIc・包VII・包VIIb層ほか出土 縄文土器（精製土器）



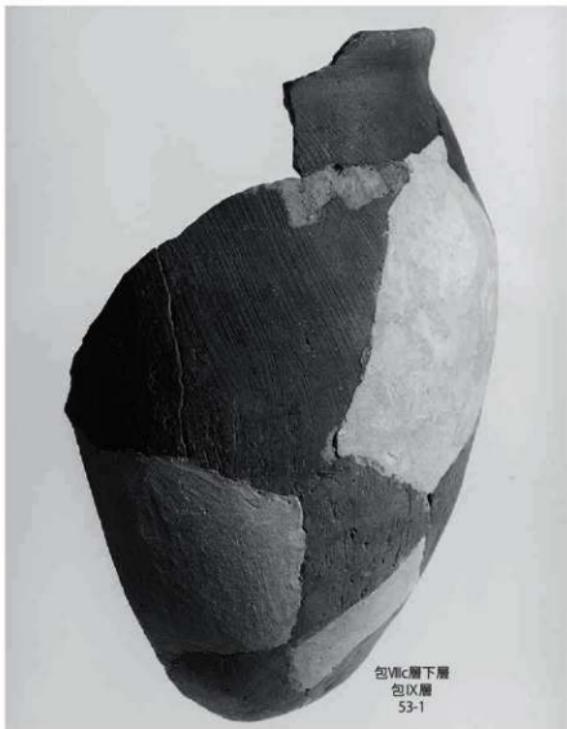
1. 包VIIb・包VIIc・包VII・包VIIb層ほか出土 繩文土器（精製土器）



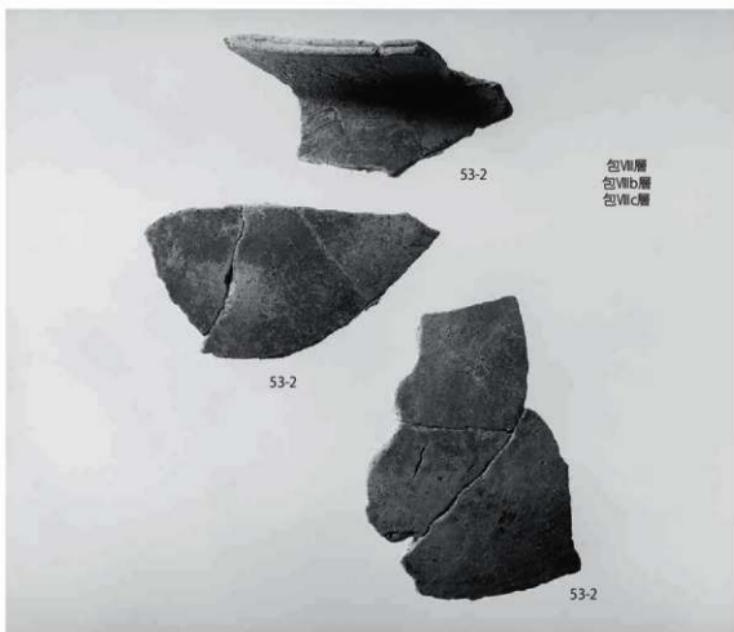
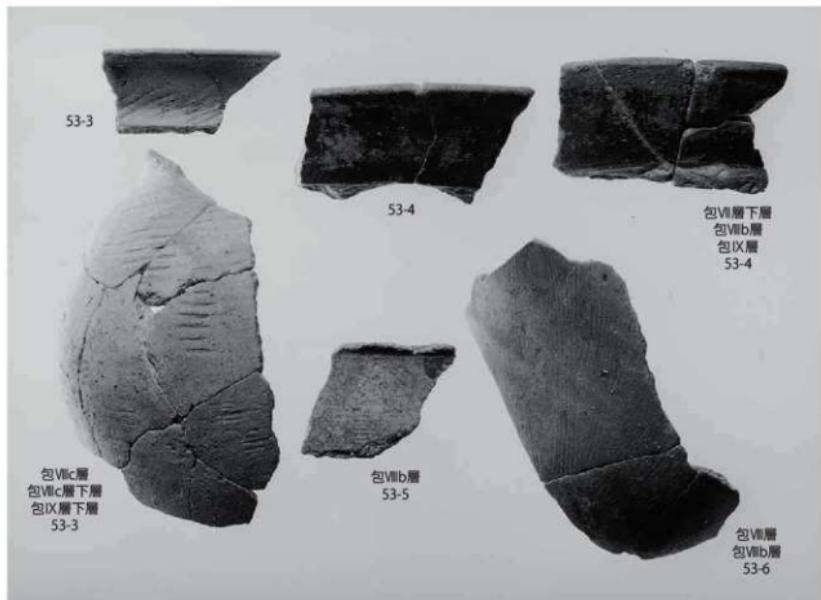
2. 包IX・包VIIb・包VIIc層出土 弥生土器

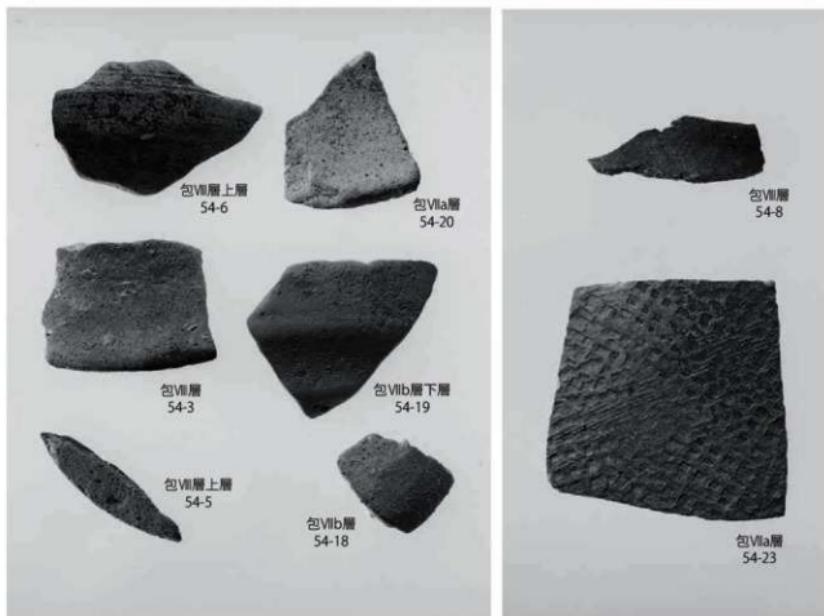


1. 包VIIb・包VIIc層出土 弥生土器



2. 包VIIc層下層はか出土土器 弥生終末～古墳時代初頭土器



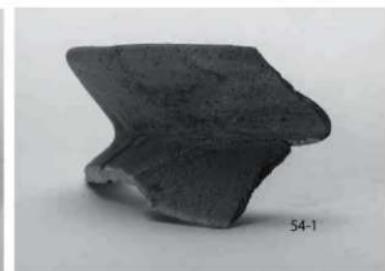
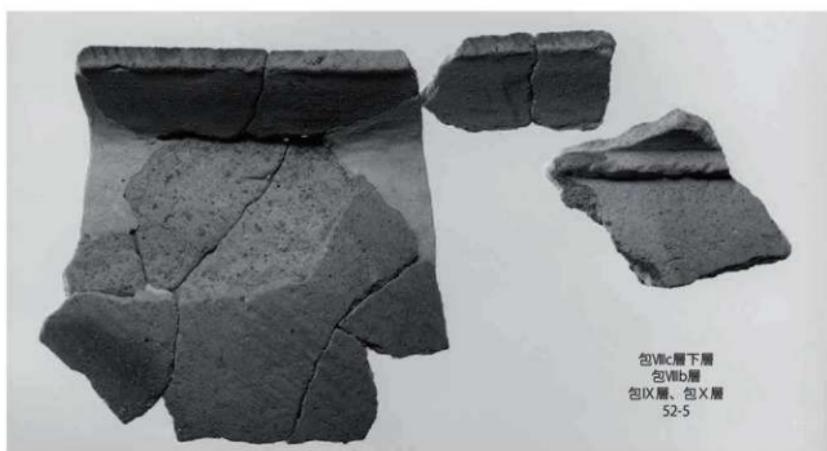




52-4



包VIIc層  
包VIIb層  
包IX層  
52-4





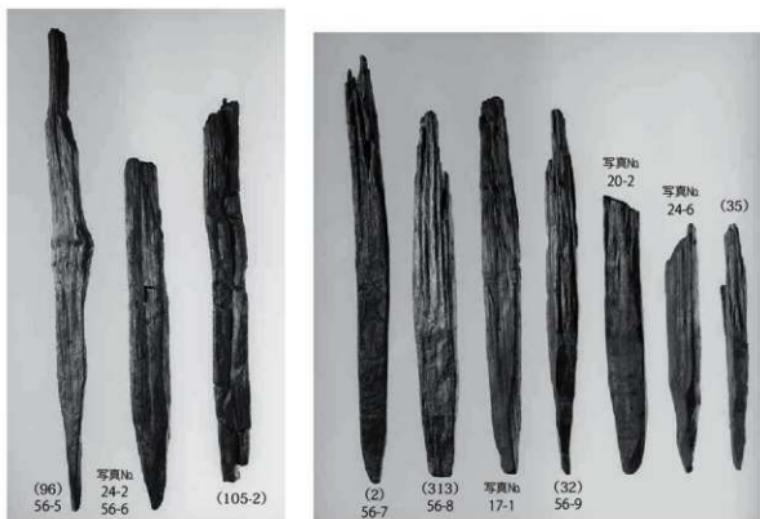
大形、断面三角形杭



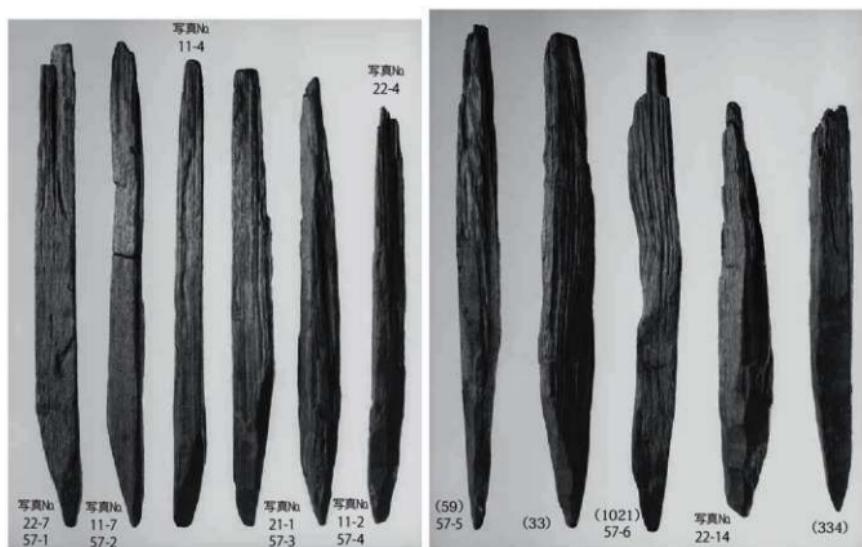
中形、断面三角形杭

中形、断面三角形杭

( ) 内は取り上げ番号



断面四角形杭

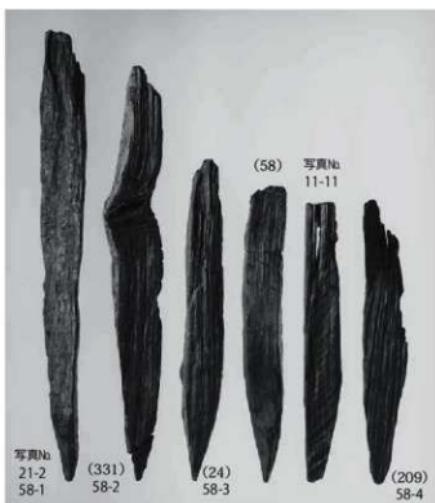


中形、断面四角形杭

( ) 内は取り上げ番号



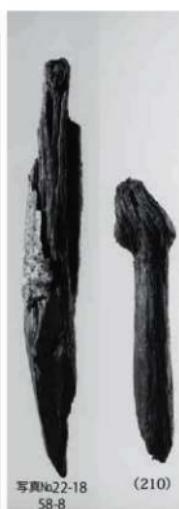
断面大形扁平杭



断面中形扁平杭



断面小形扁平杭



断面小形丸形杭



断面小形三角形杭

( ) 内は取り上げ番号



包VIIIb層耕作面検出状況（南東から）



包VII層耕作面検出状況（北東から）

報告書抄録

熊本県文化財調査報告 第268集  
長山前田遺跡・両迫間日渡遺跡 1  
-九州新幹線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査-

平成24年3月23日

編集 熊本県教育委員会  
〒862-8609 熊本市水前寺6丁目18番1号

発行 有限会社さかき印刷  
〒861-8038熊本市長嶺東6丁目30番37号

発行者：熊本県

所 属：教育庁文化課

発行年度：平成 23 年度

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第268集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：長山前田遺跡 両迫間日渡遺跡

発行：熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本市中央区水前寺6丁目18番1号

電話：096-383-1111

URL：<http://www.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：2015年12月8日